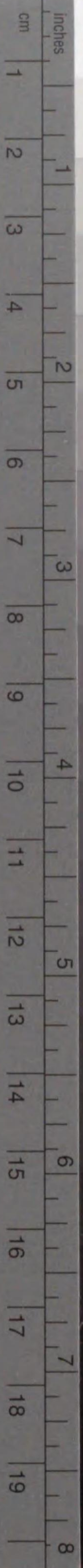


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



712
37

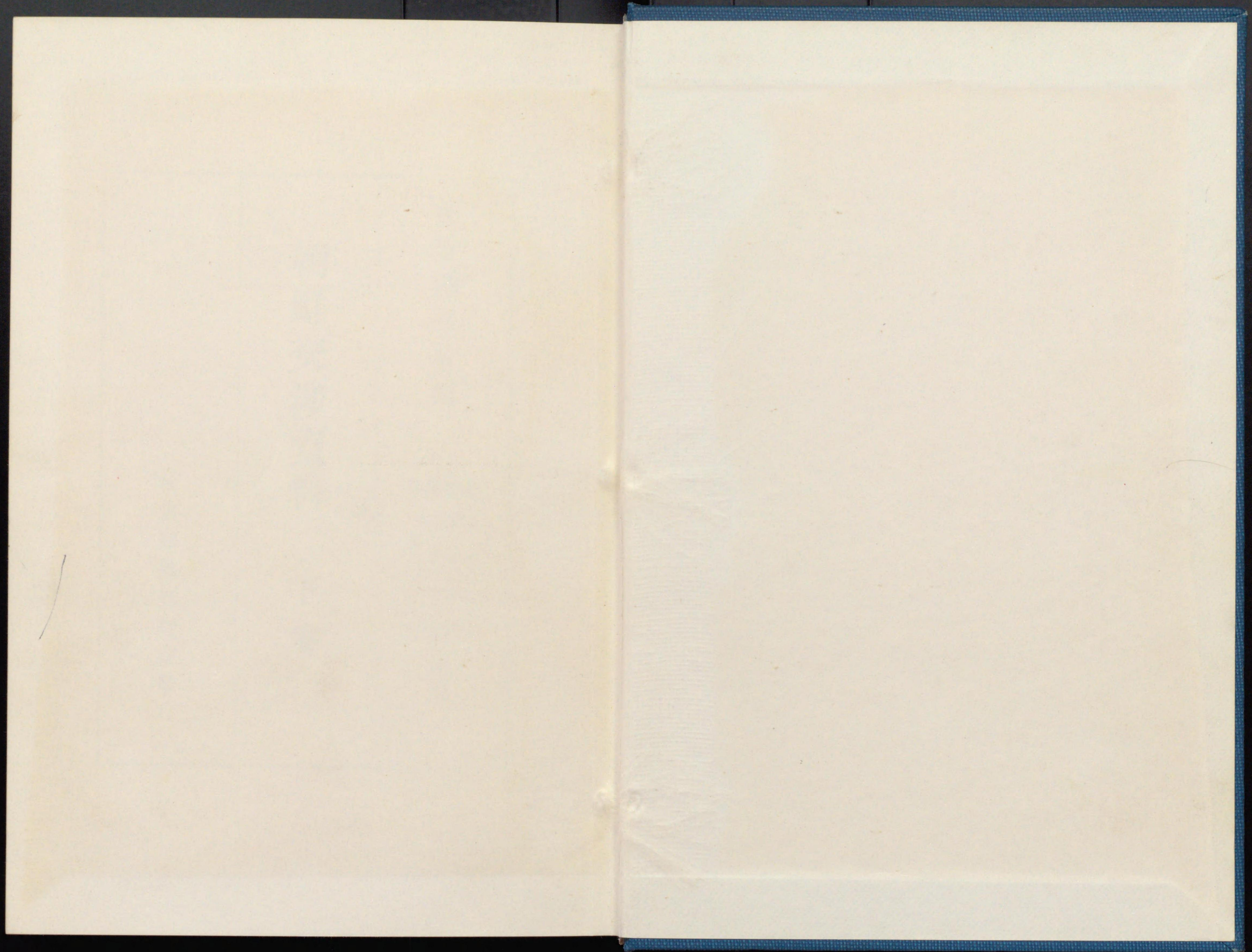
712
37

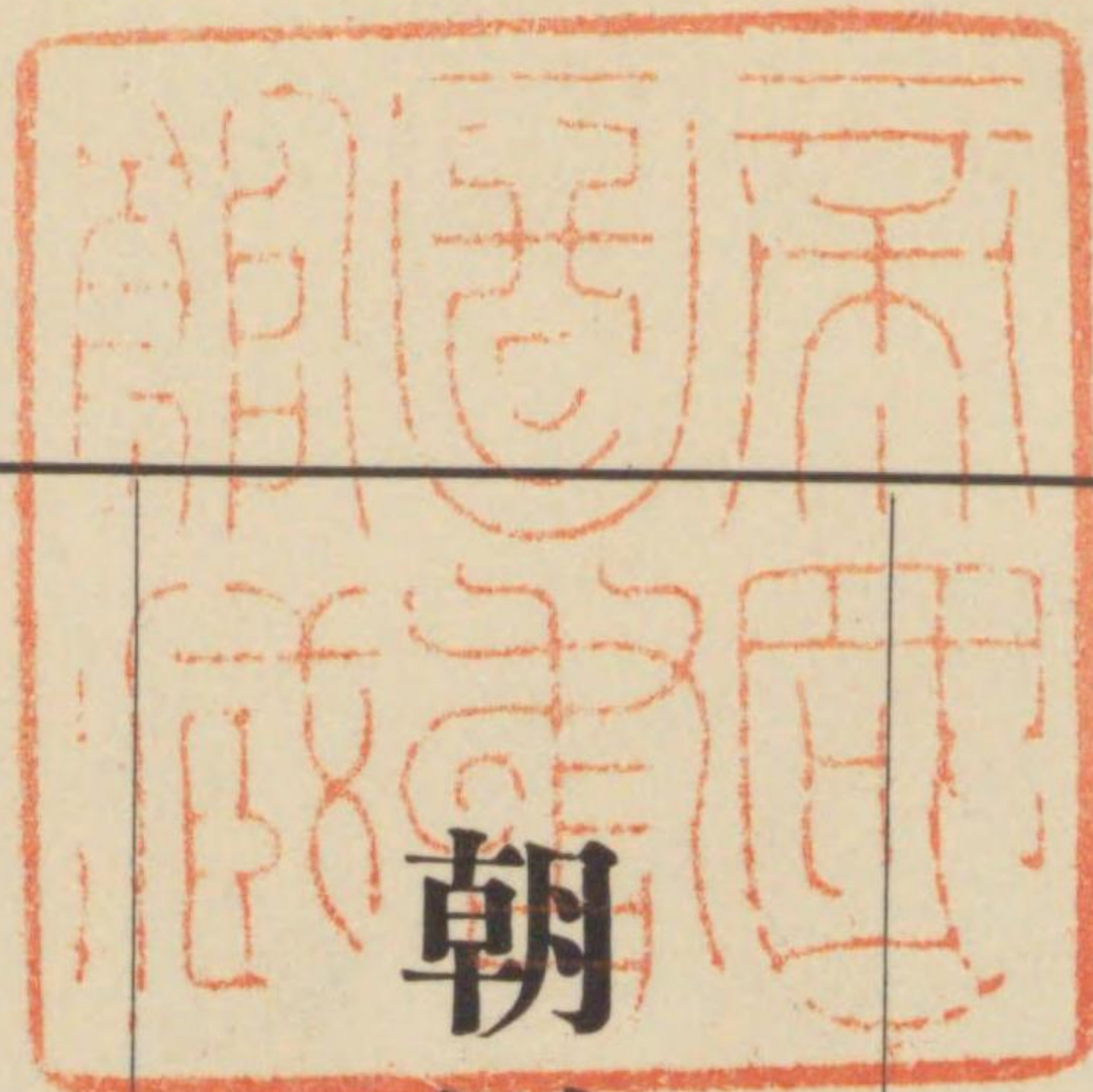
712-37



1200501585066

〇 複写





伊藤博文公編

朝鮮交渉資料 下卷

平尾栗金
佐野子
塚竹慎堅
一太
篤猛郎郎
校訂

秘書類纂刊行會發行



712
37

秘書類纂 朝鮮交涉資料 下卷

目次

大院君清國ニ誘致セラレシヨリ歸國シタル顛末……………一

大院君陰謀ニ關スル始末……………七

朝鮮近海漁業視察報告……………一八

朝鮮近海漁業視察概況……………二〇

陸奧外務大臣ヨリ大石辨理公使宛私信……………五四

防穀令問題ニ付大石公使ノ報告及ビ外務大臣提出閣議案並ニ訓令案……………五七

元山防穀損害要償事件……………六三

東學黨動靜……………六七

朝鮮ニ派遣セシ松岡參事官電報……………七二

參謀次長朝鮮國王殿下ニ謁見……………七三

伊藤伯ヨリ李中堂へ宛タル英文信函轉交ニ關スル件……………七四

元山黃海道防殺事件結局ニ關シ請訓ノ件……………七六

防殺事件落着南督辦ヨリ差出シタル賠償金額拂方取極ニ關スル書簡……………八六

大 三 輪 長 兵 衛 談 話……………八七

對韓政策閣議私案……………九一

井上公使ヨリ西園寺侯宛電報要略……………九七

朴泳孝逃走問題……………九九

朝鮮密使露領浦港ニ入ル件……………一〇七

朝鮮ニ關シ露國ト協商スルニ付井上伯ノ意見……………一〇九

井上伯朝鮮大君主へ謁見顛末並ニ寄贈金案文……………一一一

對韓政策ノ訓令ヲ待ツノ議……………一二〇

三 浦 梧 樓……………一二〇

朝鮮ト露國トノ關係ニ付テ……………一二四

露英兩國使臣ノ態度……………一二七

陸軍教師雇入ト魯國書記官ノ事……………一二九

魯國書記官使命不調ノ顛末……………一三三

魯國書記官ノ事拾遺……………一五二

京城目下之形勢……………新納時亮……………一五五

朝鮮事變ニ付意見書……………一五八

朝鮮事變處分案……………一六三

朝鮮事變處分案……………一六九

杉村濬朝鮮ニ施行スベキ事業並ニ處理セラルベキ事件ニ付建議……………一九二

對韓意見書……………杉 村 濬……………二〇〇

井上伯金嘉鎮氏談話……………二二三

李竣鎔トノ談話筆記……………二二七

金允植ト談話筆記……………二三〇

朝鮮内廷ノ事情ニ付「ドクトル、アルレンス」トノ談話……………二三八

「ヒリヤア」氏トノ談話要略筆記……………二三四

井上伯謁見始末……………二三九

井上伯大院君談話筆記……………二五二

金鶴羽暗殺セラル……………二六八

總理大臣金宏集談話要略……………二七一

井上伯内謁見陳奏要略 二八七

金宏集、金允植、魚允中トノ談話筆記 三〇四

朝鮮改革ノ至難ニ付具申 井上馨 三四三

金宏集、金允植談話筆記 三四九

大院君來館談話筆記 三六七

李竣鎔來訪談話筆記 三九三

井上伯内謁見筆錄 四一〇

井上伯再内謁見筆錄 四三一

朝鮮改革ニ付井上伯ノ意見 四五〇

井上伯ヨリ韓國皇帝ニ捧呈セル内政改革要目書 四五五

井上伯内謁見記 四六四

朝鮮政況ノ報告 四七三

井上伯内謁見次第 四八六

井上伯退京ニ際シ希望 四九八

朝鮮國王ノ誓文 五〇一

井上公使内謁見 五〇三

内謁見筆錄 五一五

朝鮮公債一件ニ付井上公使陸奧外務大臣往復電信要略 五二八

朝鮮財政ニ付キ井上公使具申 五三六

朝鮮新開港場ノ件 五五三

伊藤首相井上公使へ寄スル書簡 五五六

朝鮮國鐵道電信條約ノ儀ニ關シ遞信大臣答申 五五九

朝鮮鐵道電信鑛山事業仁川日本人居留地擴開ニ付列國使臣故障 五六五

朝鮮内閣騷動ノ件 五七一

朝鮮内閣員分離並總辭職動議ノ件 五七三

井上公使前件ニ付電報 五九二

朝鮮ニ關シ各國ニ對スル宣言案 五九六

陸奧外務大臣ノ對韓策 五九七

對韓問題閣議案 五九九

朝鮮問題ニ付聲明書按 六〇五

朝鮮交渉資料

朴泳孝ノ舉動其他……………六〇六

日清戰役死者遺骨合葬ノ件……………六〇八

朝鮮内閣破裂朴泳孝逃走顛末……………六二〇

日清平和後ニ於ケル對韓方針ヲ定ムル義ニ付井上伯具申……………六三八

大院君李竣鎔隱謀暴露權設裁判所開廷顛末……………六三三

前件落着……………六四一

軍部大臣趙義淵進退ニ關シ内閣破裂ノ傾向ヲ生ジタル報告二通……………六四八

朝鮮内閣ノ破裂……………六五五

韓廷ト歐米使臣トノ關係並ニ之ニ處スル方策……………六六八

井上公使出發後朝鮮政況……………六八三

井上伯爵意見書……………六八七

韓官ト井上公使トノ交情……………七〇二

朝鮮事變前後電報……………七〇三

— 目次終 —

秘書類纂

朝鮮交渉資料 下卷



大院君清國ニ誘致セラレシヨリ
歸國シタル顛末

一、明治十五年京城變亂ノ時、大院君亂機ニ乗ジ政權ヲ執リタレバ、曩キニ同君ガ勢力ヲ失ヒシ以來、國政ニ干與シタル者ハ何レモ震慄シテ措カザリキ。此時清兵ハ王室ヲ保護スルノ

大院君清國ニ誘致セラレシヨリ歸國シタル顛末

口實ヲ以テ京城ニ屯駐シタレバ、趙寧夏、金允植、魚允中等ハ清將吳長慶、及ビ水師吳大澂、馬建忠輩ト謀リ、大院君ヲ軍艦ニ誘致シ、直ニ清國ニ向ケ拔錨セリ。大院君ハ憤怒絶悶スト雖モ、勢ヒ奈何トモスル能ハズ、遂ニ保定府ニ幽閉セラル、ニ至レリ。當時日本人其他各國人トモ李鴻章ノ事ニ臨ミテ勇捷ナルコトヲ稱セザルモノナカリシ。其ノ實ハ李鴻章ノ與リ知ラザル所ナリ。當時李鴻章ハ母ノ喪ニ丁リ、郷里安徽ニ歸リ居タレバ、初メヨリ此事ニ與ラズ、其後此ノ事ヲ聞クニ及ビテ、書ヲ馬建忠、吳長慶ニ與ヘテ曰ク、今次ノ事、快捷神ノ如シ、覺エズ驚喜狂セント欲ス云々ト、李鴻章ノ初メヨリ關係セザリシコト以テ知ルベシ。

一、大院君直隸ニ幽門セラレタル以來、其供奉待遇ノ費用ハ保定府ヨリ定額ヲ以テ支給スル外ニ、一切玩好奢侈ノ物ニ至ルマデ清國帝室ヨリ供給シ、待遇極メテ厚シ。當初ハ汗漫ノ人ト交游スルコトヲ許サバリシト雖モ、大院君ハ専ラ帝室ニ關係アル人々ト結交スルコトヲ勉メタルニ由リ、漸ク交際ヲ廣ムルコトヲ得タリ。此等ノ結交贈賄ノ費用ハ都テ本國ヨリ取寄セタルコトナレバ、同君ノ家ニ蓄ヘタル金銀、寶珠、器玩ノ類、今ハ幾ンド傾盡シテ餘ス所ナシ。斯ノ如クスルコト數年ニシテ、漸ク情實ヲ通暢スルノ路ヲ得、遂ニ冤屈ノ情、清帝室ニ達徹シ、親王以下諸人閔姓ノ跋扈、大院君ヲ誣陷シタルコトヲ怒ラザルナキニ至レリ。

一、清廷ハ愈ヨ大院君ヲ還歸セシムルコトニ決シ、密ニ李鴻章ニ勅ス、李鴻章軍艦ヲ派シテ閔泳翊ヲ天津ニ招致シ、先ヅ大院君冤屈ノ狀ヲ叙シ、因テ閔族ガ大院君ヲ薄待スルコトヲ詰責シ、併セテ國王ガ其生父ニ不孝ナルコトヲ論ジ、且ツ今日勅命ヲ奉ジテ大院君ヲ本國ニ還歸セシムル上ハ、國政ノ重事ハ盡ク大院君ニ質シテ以テ處決スベシ、閔姓ノ外戚ノ勢ヒヲ藉リテ跋扈スル者ノ如キハ皆罪ヲ聲シテ退去セシムベシ云々ト面諭シタルニ、閔泳翊ハ唯々奉承セリ。因テ李鴻章ハ更ニ閔泳翊ニ命ジ、既ニ命ヲ受ケタル上ハ證書ヲ手書シテ質ト爲スベシト迫リタリ。閔泳翊乃チ大ニ懼レ、辭シテ曰ク、吾レ實ニ年少、未ダ權力ヲ有セズ。此勅令ハ固ヨリ國王及ビ王妃ニ報ジ、當サニ善後ノ策ヲ圖ルベシ、證書ヲ以テ質ト爲スニ至リテハ敢テ當ラザル所ナルヲ以テ、更ニ權力アル重臣ヲ以テ此任ニ當ラシムベシ、即チ此任ニ當ルモノハ金允植ノ外ニ有ルベカラズト。李鴻章乃チ軍艦ヲ派遣シ、金允植ヲ招致シ、諭スニ前狀ヲ以テス。金允植其命ヲ奉ジテ證書ヲ手書シテ以テ質ト爲ス。李鴻章又命ヲ袁世凱ニ傳ヘテ每事大院君ト相議サシムルコトト爲セリ。大院君及ビ閔、金俱ニ國ニ歸リ、袁世凱ト計議シ、今王ノ懦弱、閔氏ノ跋扈、奈何トモスベカラザルニ由リ、國王ヲ廢シ、大院君ノ孫(謫子載晃ノ子ナリ)ヲ立テントシ、計議幾ンド熟シ、將サニ期シテ

事ヲ舉ゲントスルニ及ビ、閔泳翊忽チ事成リシ後ノ利害ヲ慮リ、之レヲ國王及ビ王妃ニ密告シ、泳翊ハ即夜遁亡シテ香港ニ至レリ。國王及ビ王妃大ニ驚キ、大ニ怒リ、因テ大院君ヲ脅制シ、又袁世凱ヲ責ム。袁一言ノ對フベキナシ。乃チ金允植ヲ以テ罪魁ト爲シ、將サニ死刑ニ處セントス。袁乃チ李鴻章ニ告グ、李、書ヲ國王ニ送リテ解辨シ、因テ一等ヲ減ジテ遠島ニ流配ス。閔泳翊ハ香港ニ遁亡シタル以來、勢ヒ國ニ歸ヘル能ハズシテ以テ今ニ至レリ。是レ實ニ明治十八、十九兩年間ノ事ナリ。

一、大院君國ニ歸ヘリ此事ヲ生出シタルヨリ以來、益々時事ニ齟齬シテ一向隱居シテ憤鬱無聊ノ歲月ヲ送ルコト、ナリ、袁世凱モ亦王室及ビ閔族ニ對シテ面目ヲ損シタレバ、只ダ恐喝ヲ以テ之レヲ脅迫スルノミナリ。左レバ王室及ビ閔族ガ袁ニ對スルノ情及ビ清國ニ對スル情ハ此レヲ推シテ知ルベシ。是ニ於テカ露ニ附シ、清ヲ排スルノ論、密カニ閔族ノ間ニ行ハレ、種々事情ヲ露國公使ニ訴フルコト屢々ナリケレバ、露使ハ之レヲ奇貨トシテ頻リニ籠絡シタルヲ以テ、閔族ハ勿論、當今韓廷ニ勢力ヲ有スル徒ハ大抵露使ニ趨付セリ。閔族ハ露國ニ密約シテ其ノ保護國タランコトヲ企テ、王妃ハ固ヨリ之レニ同意シタレドモ、國王ハ猶豫未決ノ狀アリ。露使ト閔族ノ間ノ陰密ナリ瑣々ナルコトハ推測ノ及バザルコトナリ。

一、大院君ト袁世凱トノ交情ハ嫌疑ヲ避クル爲メ、只ダ時ニ書札ヲ以テ往復スルニ過ギズ。袁ハ謂フ、大院君其ノ地位名望ヲ以テ國政ヲ矯革セント欲セバ、掌ヲ反ヘスガ如ク容易ナレドモ、彼レ老ヒテ爲ス能ハズトテ之ヲ譏リ、大院君ハ謂フ、袁世凱清國ノ勢力ニ倚伏シテ閔族ヲ脅嚇スレドモ、彼レ年少遂ニ爲ス能ハズトテ之レヲ輕ジ、爾來數年ノ間相互ニ輕視スルノ狀ヲ顯ハセリ。本年五、六月ニ至リ、李鴻章書ヲ國王ニ上リ、國政ノ非ナルコトヲ極論シ、又上國ニ對シテ禮ヲ失シタルコトヲ責メ、若シ改圖セザルニ於テハ王位ヲ廢立スベシトノ說アリ。國王大ニ恐レ且ツ大ニ怒リタリ。閔族ハ其ノ機ニ乗ジテ年老無恥ナル大臣等ト謀リ、王位ヲ世子（今王妃ノ所生）ニ禪ルコトヲ陰謀セリ。國王又大ニ怒リタレドモ〇〇ニシテ閔族及ビ大臣等ヲ罪スル能ハズ。又王妃ノ中ヨリ種々奇策ヲ廻ラシ、遂ニ世子南面受賀ノ事ヲ決行セリ。是レ開國以來初有ノ事ナルヲ以テ、參判李容元ノ如キハ其非ナルコトヲ抗論シタルガ爲ニ、竄配ノ罪ニ處セラレタリ。是ニ於テ國王ノ〇〇、王妃ノ機敏巧慧ナルコト知ルベシ。又國王ノ孤立ノ勢ヒヲ推知スベシ。

一、本年七月初旬頃、在香港閔泳翊ヨリ一ノ密電ヲ發シ來レリ。電ニ曰ク、清廷ハ將サニ朝鮮ニ向テ廢王ノ事ヲ實行セント云々（是レ或ハ閔泳翊、清國ニ於テ何ントカ聞キ込ミタルコトアルヤ、或ハ閔族等ノ巧計ニアルヤ知ルベカラザルナリ）、王及ビ妃皆驚懼措ヲ失ス、是

ニ到ツテ韓圭禹ハ閔泳駿、閔泳煥、閔泳韶等ト密ニ謀リ、王ヲ脅カシテ露國ニ結約シ、朝鮮ヲ擧ゲテ露國ノ保護ノ下ニ置キ、其ノ報酬トシテ咸鏡一道ヲ以テ露國ノ命ニ從フコトヲ議出シタリ。王又果決シ能ハザリシ。大院君ハ隱居シテ手ヲ斂ムレドモ、液廷ニ出入スル宦官、宮妾都ベテ大院君ノ耳目トナリ居ルガ故ニ、此ノ賣國ノ事ヲ聞知シ、憤慨ノ餘リ遂ニ病ヲ成セリ。且ツ大ニ決心スル所アリ、袁世凱トノ交渉ハ尤モ頻繁ナリ。

一、露公使韋貝ハ本年三、四月期滿チテ更代スル筈ナリシガ、暫ク京城ニ留リテ閔族ト計議スル所アリ。先月中ニ至リ始メテ歸國セリト云フ。其間何等ノ密謀陰圖アリシヤ實ニ測ル可カラザルナリ。

一、今日朝鮮ノ情況ヲ概觀スレバ、右ニ記スル數項決シテ訛誤ナキコトヲ信ズ。大院君ノ憂國憤懣、即チ勢ヒノ已ム能ハザル所ナリ。其傾軋逼迫ノ勢ヒ見ルベシ、狀スベシ。然レドモ其ノ間當局輩、國事ヲ以テ兒戲ノ如キノ所爲ハ、局外ニ在リテ尋常ノ推測ヲ以テ了知スルコト能ハザルナリ。

大院君陰謀ニ關スル始末

明治二十年ノ頃、朴泳孝ハ大院君ガ他日朝鮮ニ事ヲ起スノ意アルヲ察シ、日本人某（小川實ニハ非ザルヤウ記憶ス）ノ朝鮮ニ赴クニ托シ、將來共ニ國事ヲ謀リタキ旨ヲ通ゼシニ、大院君ヨリ紅紙ニ刷リタル支那風ノ名刺ヲ送り越シタルコトアリ、越エテ本年三月頃ニ及ビ、朴ハ大院君ヲ招徠シ、歐米ノ開化ヲ朝鮮ニ誘入セント欲シ、安駟壽ニ托シテ左ノ主意ヲ書シタル書翰ヲ大院君ニ送リタリ。

第一、大院君ノ國王ニ奏シテ穩カニ國政ヲ改良セシムルコトヲ希フコト

第二、第一ノ事成ス能ハザレバ閔氏ヲ刈除シテ國政ヲ改ムルコト

第三、第一、第二共ニ成ラザレバ手段ヲ悉クシテ日本ニ渡航アリタキコト

右ノ書翰ハ安駟壽携帶歸リテ小川實ニ交付シ、小川ヨリ大院君ニ傳呈シタルニ、斯カルモノハ受取ルベキ理由ナシトテ之レヲ斥ケ、固ク請フモ受ケズ、小川ハ大院君ノ心動カスベカラザ

ルヲ察シ、一覽ノ上返戻セラレンコトヲ請ヘリ。是ニ於テ大院君ハ其封緘ヲ破リ、之ヲ一見シタルガ、直ニ之レヲ返付シ、且ツ曰ク、送クルニ滿朝ヲ驚動スルニ足ルベキモノヲ以テセバ其用ナシトセズ、汝還リテ之レヲ朴ニ通ゼヨト、大ニ意味アル一言ヲ以テセリ。

是レヨリ先キ金玉均ハ犬養毅、頭山滿、岡本柳之助、大井憲太郎等ニ謀リ、本國ニ事ヲ起サント企テ居リシガ、安馴壽ノ貨幣鑄造ノ事ヲ以テ來朝シタルヲ幸ヒニ、其ノ密謀ヲ打明ケテ同意ヲ求メ、且ツ金策ヲ依頼セリ。安ハ始メ之レニ同意セシモ、中々危険ヲ感ジテ歸國ノ上閔氏ニ密告セリ。是ニ於テ金玉均ノ策ハ全ク齟齬シ、他ノ手段ニ出デザル可カラザル時、恰モ好シ大院君ノ一言ハ小川ヨリ朴ニ傳ヘ、金ニモ之レヲ傳話シタルヨリ、金ハ頻リニ之レニ應ゼンコトヲ望ミ、乃チ朴、金兩名ヲ以テ手強キ書面ヲ送レリ。小川ハ之レヲ大院君ニ呈シタルニ、今ハ快ク之レヲ請取リタリ。蓋シ其ノ書ハ大院君ヨリ袁世凱ニ見セタルナラント云フ。又一方ニ於テ小川ハ樞山公使並ニ閔氏ニ之レヲ密告シタルモノト見エ、青木外務大臣ヨリ書面ノ事ニ付閔氏ニ問ヒタルコトアリ、又閔氏モ之レガ爲ニ警戒ヲ加ヘタルコトアリト云フ。

六月頃ヨリ大院君ハ頻リニ小川ヲ説イテ曰ク、今我國ノ命脈ハ旦夕ニ迫リ、之レヲ救フ者ハ朴、金二人ヲ除キテ他ニ望ム可ラズ。汝速カニ還リテ之レヲ二人ニ告ゲヨ、我ハ年已ニ老ヒタリ、他ニ望ナシ。朝鮮ノ政治ヲ舉ゲテ一人ニ託セント欲ス云々。依テ小川ハ大院君ノ編書ヲ得、

携ヘ歸リテ之レヲ示サンコトヲ請フモ許サズ、大院君曰ク、我ハ國父ナリ、我ガ書ハ國書ニ次イデ重キヲ爲セリ。容易ニ人ニ與フ可カラズ、想フニ汝還リテ我ガ天津ヨリ歸國ノ模様ヲ語ラバ、二氏ハ必ラズ之レヲ信ゼン、此ノ事ハ清、韓人五、六名ヲ除キ他ニ知ル者ナキモ、我今舉ゲテ汝ニ語ラント左ノ言ヲ爲セリ。

前年我天津ニ抑留セラレテ歸ヘルヲ得ザリシトキ、策ノ出ツベキナキヲ以テ、止ムヲ得ズ北京ノ皇族ニ賄ヒテ赦免ヲ請ヒタルニ、清皇帝ヨリ我ヲ赦シテ還シ、其ノ國政ニ與カラシムベシトノ教諭ヲ李鴻章ニ賜ヒタル趣ニテ、李ハ一日之レヲ我ニ示シ、速カニ歸國セシム可キ旨ヲ語り、且ツ閔泳翊ヲ天津ニ招キタリ。李、閔ニ謂フテ曰ク、汝等大院君ノ罪アルヲ主張シ、遂ニ夫兵ヲシテ之レヲ拘ヘシム。而シテ詳カニ其情ヲ探グレバ、大院君一ノ罪アルニアラズシテ汝等却テ罪アリ、且ツ大院君ハ國父ナリ、臣トシテ王父ヲ辱カシム、何ゾ無禮ナル。是ヲ以テ皇帝震怒、勅ヲ我ニ降シ、大院君ヲ赦シテ歸國セシム。汝之レヲ護シテ還ヘルベシトテ、李ハ便チ閔泳翊ヲシテ大院君歸國ノ上ハ之レヲ厚待シ、國政ヲ執ラシムベシトノ警書ヲ出サシム。閔肯ゼズ。李曰ク然ラバ汝ヲ拘留セント。是ニ於テ閔ハ大ニ懼レタルモ遂ニ之レヲ肯ゼズシテ曰ク、諸閔ノ國政ニ參スルハ王命ヲ奉ズルニ過ギズ、其ノ權ナキ者焉ゾ誓ヒテ立ツベケンヤ、

若シ強ヒテ之レヲ爲サシメント欲セバ、金允植ヲ以テ適當トス、身、外務督辦ニ居リ、上下ノ信ヲ負フ、之レヲ招クベキヤ否ヤ、李氏其ノ言ヲ可トシ之レヲ招ク、李、我ト閱泳翊ヲシテ列坐セシメ、金允植ヲ其ノ前ニ引キテ誓ヒヲ立テシム。李、之レニ迫リ闕之レヲ助ク、金允植拒ムヲ得ズシテ誓書ヲ出セリ。李、更ニ我ニ向テ曰ク、今歸國ノ事已ニ定マル、閔氏果シテ閣下ヲ厚待セバ、閣下ハ閔氏ヲ殘虐セザルヲ我ニ誓フベシト、我ハ之レヲ聞キ憤然筆ヲ抛ケ叱シテ曰ク、汝何ゾ斯カル無禮ノ言ヲ吐ク、閱泳翊ハ我ガ孫ニ當レリ、子孫ノ爲ニ誓ヒヲ立ツ、天下豈此ノ理アラシヤト大喝シタルニ李ハ容ヲ和ゲテ好シト稱シ、是レヨリ李ハ大ニ我ヲ信ゼリ。我還ヘルニ及ビテ李ハ特ニ令ヲ丁汝昌ニ傳ヘ、我ガ國政ヲ執ランガ爲ニハカヲ悉クシテ之レヲ助クベキ旨ヲ以テセリ。歸國ノ後ハ金允植、袁世凱等相謀リテ政權ヲ執ラシメンコトヲ勉メタレドモ、諸閔ハ容易ニ之レヲ我ニ委ヌルヲ欲セズ、國王モ亦之レヲ聽サス、是ニ於テ金允植ハ密カニ袁世凱ト廢立ヲ謀リ、我ガ孫ヲ王位ニ就カシメ、我ヲ其攝政トナサントセリ。然レドモ無事ニ其ノ事ヲ成シ遂グベキニ非ラズトテ、閱泳翊ヲ味方ニ入レ、江華府ニ二千ノ兵ヲ養ハシメ、其ノ力ヲ以テ京城ニ迫ル事トナシタリ。閱泳翊ハ始メ之レヲ承諾シタルモ、退イテ考フレバ己ガ肉ヲ食フニ均シキヲ以テ、窃カニ國王反ビ王妃ニ告

ゲ、其ノ謀モ全ク敗レタリ。即チ金允植ノ流罪トナリタルコト、閱泳翊ノ香港ニ淹留シテ歸リ得ザルコトモ皆此ノ事ニ關スルナリ。

故ニ今日ト雖モ我ヨリ援助ヲ乞フトキハ、丁提督ハ必ラズ心ヲ悉クシテ我ヲ助クベシ、只ダ我レ身ヲ以テ事ヲ始ムルハ得策ニ非ザレバ、朴、金二人ニ謀ルナリ。二人幸ヒニ日本兵二百名許リヲ率キテ仁川マデ來ラバ可ナリ。

(一) 若シ其ノ事行ハレザレバ、日本ニ於テ兵ヲ起スノ情ヲ裝ヘバ可ナリ。

(二) 若シ又其ノ事モ日本政府ノ妨ゲヲ受ケテ成スコト能ハザレバ、二人ガ事ヲ朝鮮ニ舉グルノ陰謀ヲ新聞紙ニ掲グルモ可ナリ。

(三) 若シ又其ノ策ニモ出ヅル能ハザレバ、國王ニ向ケテ二人ガ罪ナクシテ逆賊ノ名ヲ被リタル理由ヲ詰問シ、其ノ決心ヲ動スベカラザルヲ示スコシ。

右三者ノ一ヲ行ヘバ政府ハ必ラズ動亂セン、其機ニ乗ジテ北洋艦隊ノ派遣ヲ請ヒ、諸閔ヲ捕ヘテ艦隊ニ交付セバ、我ガ國ノ政治二人ノ手ニ歸スルコト難事ニアラズ。汝速カニ還リテ二人ニ告ゲヨト、小川ハ又々其ノ證ヲ請ヒタルニ、大院君ハ書面ノ代リトテ名刺ノ裏ニ二、三行ノ詞ヲ書シテ之レヲ小川ニ渡セリ、是ニ於テ小川ハ大院君ヨリ旅費ヲ請取リ日本ニ歸渡セリ。

同時ニ金嘉鎮、安駟壽、權在衡ノ三名王命ヲ以テ渡來シ、仁川郵便局長吉田氏文モ此ノ事ヲ

聞キ込ミ、共ニ事ヲ謀ルノ決心トナリ、孰レモ神戸マデ同行セリ。吉田ハ先ヅ東京ニ入り、次イデ去月二十六日金嘉鎮、權在衡入京シ、次ニ安駟壽モ入京セリ。吉田ハ素ヨリ此等ノ事ヲ目的トシテ朝鮮ニ赴キタル者ナルガ故ニ、小川ノ仕事ヲ取りテ己レノ功ト爲サント欲シ、着京スルヤ否ヤ金玉均ニ面シテ小川ノ輕躁事ヲ誤マルヲ説キ、金嘉鎮ニモ同様之レヲ説キ、遂ニ其ノ間ニ周旋スルコトトナレリ。或ハ後藤伯ニモ屢々往來シ、金嘉鎮等ニハ其ノ同意ナルコトヲ唱ヘタリト云ヘリ。

本月三日ノ事ナリト聞ク、金玉均ハ大磯ナル朴泳孝ノ許ニ電報ヲ發シ、明日其ノ地ニテ面會スル旨ヲ以テセリ。朴ハ翌日函根ニ到ル筈ナリシモ、金玉均ノ來ルヲ以テ留リタルニ、次日即チ四日ニ金ハ吉田ヲ伴フテ朴ノ寓ニ到リ、共ニ大院君ノ舉ニ與ミスベキヲ以テセリ。朴熟ラ思フニ、支那ノ干涉ハ大院君繫留ノ時ニ於テ已ニ大ナル國辱トナレリ。若シ再ビ大臣ヲ繫留セラシ、コトアラバ、遂ニ先例トナリ隸屬ノ實ヲ表ハスニ至ラン。事體已ニ不可ナリ、況ンヤ大院君ノ心測ルベカラズ。乃チ金ニ説イテ曰ク、大院君ハ朝野ノ望ミヲ負ヒ、其黨モ亦タ尠ナカラズ、眞ニ事ヲナサント欲セバ我輩ヲ要スルノ理ナシ、況ンヤ年老フルト雖モ曾テ兩國政柄ヲ執リ、今ニ至ルマデ豪氣猶ホ消磨セズ、我輩ニ政治ヲ委任セントハ必ラズ虛言ナリ。輕信シテ誤マル勿レ、其ノ策ノ何レニ出ヅルモ之レニ同意スル能ハズト、朴ハ斷然之レヲ拒絕シタルモ、

吉田ハ頻リニ之レヲ勸メ、金玉均モ思ヒ止マルベキ様子モナケレバ、朴ハ金ノ最後策ナル國王ニ詰問書ヲ送ルノ一事ヲ實行スルヲ恐レ、兩人協議ノ上ナラデハ決シテ國王ニ詰問書ヲ送ルベカラザル旨ヲ告ゲ、金ハ猶ホ熟考スベシト吉田ト共ニ歸京シタル由ナレドモ、金ハ吉田ト共ニ頻リニ奔走シ、同意者ヲ求メテ止マザリシナリ。

朴ハ翌日直ニ沼津ニ赴キタルガ、金玉均ノ詰問書ヲ送ランコトヲ恐レ、更ニ書ヲ裁シテ其ノ事ヲ思ヒ止マルベキヲ申送リシニ、金ハ決シテ專斷セザルヲ以テ安心保養スベキ旨ヲ答ヘタル由、又朴ハ吉田ノ言ニ依リ金嘉鎮ノ同腹ナルヲ知リシカバ、容易ナラザルコト、思ヒ、安駟壽ヲ招キタルニ、安ハ大磯邊ナレバ赴クベキモ、其地ニハ赴キ難キ旨回答セリ。是ニ於テ朴ハ大磯ニ立戻リ、安ノ來ルヲ待テリ。安ハ七日ニ金嘉鎮ト共ニ横濱ナル米國水師提督「ベルナツブ」氏ヲ訪ヒ、其夜ハ横濱ニ一泊シ、次日朴ノ寓ニ赴キタリ。朴ハ乃チ金玉均ノ舉ニ與スベカラザルヲ諭シ、安之レヲ諾シテ歸ヘル。

金嘉鎮ノ吉田ヲ介シテ金、朴二氏ニ申入レシ大要左ノ如シ。

僕甚ダ大院君ノ舉ヲ賛ス、然レドモ大院君ノ四策恐ラクハ皆行ハレ難シ、依テ僕ハ公使ノ職ヲ以テ二君舉兵ノ始末ハ國王殿下ニ密告スベシ、然ルトキハ朝廷動亂シテ大院君ノ策成リ、閔氏ヲ天津ニ拘引スルヲ得ベシ云々。

金嘉鎮ノ米國水師提督ヲ問ヒタルハ、本國政府ヨリ變亂アルベキヲ以テ米艦五、六隻ノ派遣ヲ請フベシトノ電訓ヲ（四日ノ事ト聞ケリ）得タルヲ以テ、之ヲ提督「ベルナップ」氏ニ告ゲシガ爲メナリ。即チ金嘉鎮ハ八日ニ於テ「ベルナップ」氏ニ面會シタルモ、其後猶ホ米國公使館ニ於テ同氏ニ會合シテ之レヲ懇請セリ。「ベルナップ」氏ハ豫メ事ノ起ランコトヲ察シテ艦隊ヲ派遣センコトハ叶ハザルモ、幸ヒニ近日支那海ヨリ二、三隻仁川ニ廻航スベキモノアレバ、暫ク繫泊セシムベシト答ヘタリ。安ハ米國ノ艦隊ノ派遣ヲ請フニ至リタルハ、小川實ノ陰謀ヲ密告シタルニ基ケリト云フモ、安モ恐ラクハ閔氏ニ密告シタル一人ナラン。金嘉鎮モ安ヲ信ゼザルガ故ニ、吉田ヲ介シテ金、朴二氏ニ通謀シタルナリ。

金玉均ハ金嘉鎮ノ策ヲ聞キ、之レヲ福澤諭吉ニ諮リタルニ、福澤ハ金嘉鎮ノ首竄兩端ヲ持スルヲ察シ、其ノ策決シテ行フベカラズト答ヘタル由。又金玉均ハ大磯ニテ朴泳孝ニ面會シタルトキハ、外務大臣ニ相談スベシト云ヒタルモ、之レヲ後藤大臣ニ謀リタルハ福澤ノ意見ニ依ルモノナリト云ヘリ。然レドモ外務大臣ノ同意ヲ得ルノ難キハ金玉均自ラ之レヲ知り居レバ、從來ノ關係ヨリ後藤大臣ニ謀リタルモノト考ヘラル。其後チ金玉均ハ五、六回後藤大臣ヲ訪ヒタルモ確答ヲ得ザリキ。

朴泳孝ハ十八日午后急ニ東京ニ歸ヘリ、讀賣新聞ノ記事ニ付同社ニ掛合ヒ、十九日夜ニハ金

玉均ニ會ス。金玉均ハ猶ホ思ヒ止ラズ、獨リ仁川ニ至ランコトヲ語り、且ツ共ニ天津ニ往キテ李鴻章ニ謀ランコトヲ勸メタリ。朴ハ成竹アリヤト問フニ、金ハ之レアルベシト答フ。朴ハ一身ノ利害ハ第二ニ置カザル可カラズ、君先ヅ策ヲ講ゼヨト言ヒ、更ニ語ヲ改メテ曰ク、李氏ハ支那皇帝ノ勅命ヲ擔ヒ、大院君ノ重キヲ以テスルモ、未ダ閔氏ノ專横ヲ止ムル能ハズ、我輩輕微ナル亡命ノ身ヲ以テ李氏ヲ動かサンコト恐ラクハ爲シ得ベカラズ。徒ラニ爲シ得ベカラザルコトヲ爲シテ一跌辱ヲ受クルニ至レバ、誰カ又我輩ヲ救ハンヤ。君苟クモ身ヲ以テ國ニ許スノ忠心アラバ輕擧スベキノ時ニアラズ。僕ハ決シテ之レニ同意セズト、又々拒絕シタリト云フ。二十日午后ニハ福澤ヨリ後藤大臣ノ回答ヲ傳フベシトノ通知アリタルヲ以テ、朴ハ金ト共ニ福澤ニ赴キ、同夜ハ安駟壽ニ會合シ、二十一日朝鎌倉ニ赴ケリ。二、三ヶ月ハ一禪寺ニ在ツテ修禪スベシト語レリ。

金嘉鎮ハ素ト金玉均ヲ忌ミ居リシニ、今回之レト共謀シタルハ其ノ原因ナクンバアラズ。聞ク金嘉鎮歸國ノ時ニハ日本諸友ノ意見ヲ叩キ、其ノ中ニハ必ラズ之レヲ實行スベシト斷言シタル件モアリシガ、歸國ノ後一モ實行スル能ハズ。故ニ今日右ノ諸友ニ對シ面目ナキコトアルナラント。

(一) 今回日本ニ渡來シタルニハ二個ノ重キ命アリ、其ノ一ハ李經芳ニ協議シテ北洋大臣ヨ

リ朝鮮王ニ申出シタル右ノ三ヶ條ノ要求ヲ取消スベシト云フニ在リ。

第一 在外朝鮮公使ノ席次ハ其國在留ノ清國公使ノ下ニ在ルベシトノコト。

第二 朝鮮公使ヨリ外國ニ申出ス事ハ其國ニ駐在スル清國公使ニ豫メ告知スベシトノコト。

第三 (判然セザレドモ新ニ公使ヲ派遣スルニハ、清國政府ノ同意ヲ得ベシトノコトナルガ如シ)

右三ヶ條ノ取消ハ金嘉鎮ヨリ來朝後直チニ李經芳ニ協議シタルニ、李ハ色ヲ勵シテ内政整ハズシテ屢々中國ノ煩ヲ爲ス、何ゾ此ノ言ヲ吐クヲ得ン。若シ眞個ノ獨立國タラント欲セバ先ヅ内政ヲ整ヘヨト、一モ二モナク拒絶セラレタルコト。

(一) 其ノ一ハ奥國公使ト通交約款ヲ締結スルコトナリシモ、金嘉鎮ノ入京前後ニ奥國公使ハ其ノ事ヲ知リナガラ、去ツテ天津ニ赴キ金ハ鼻毛ヲ拔カレタ思ヒアルコト。

(二) 等ナルベシト云フ。

或人米艦派遣ノ事時事新聞ニ掲載セラレ、金嘉鎮ノ非常ニ痛心シ居ルヲ聞キ、二十一日金ヲ公使館ニ訪ヒ、其ノ事ヲ語り出シテ且ツ金玉均ノ各所ニ到リ饒舌リタルヨリ、貴下ガ共謀ノ事モ知ル人多シト語りタルニ、金ハ悄然トシテ眉ヲ蹙メ、昨夜安ヨリ之レヲ聞ケリ、若シ本國ニ聞ユレバ甚ダ危シ、事已ニ此ニ至ル、早ク日本ヲ去ルニ若カズ、幸ヒニ良策アラバ告ゲラレヨ

云々ト語レリト。

明治二十四年九月二十三日

朝鮮近海漁業視察報告

本邦漁人ノ朝鮮海出稼漁業ヲ爲スニ於テ、朝鮮政府ノ頻リニ忌避セントスルモノハ濟州島ニ在リ。故ニ其ノ原因ヲ探リ情態ヲ詳カニセンコトヲ欲スルモ、元來濟州ハ朝鮮極南ノ洋上ニ孤立セル離島ニシテ、夏日ト雖モ尋常小艇ニテ渡航センニハ多クノ日子ヲ費ス所ナリ。殊ニ目下嚴冬ニ際シテハ縱令往路ハ北風ニ乗ジ速カニ航スルコトヲ得ルモ、歸路甚ダ困難ナルベキヲ察シ、故ニ嚮キニ釜山ニアリシ日、若シ仁川碇泊ノ警備軍艦ノ運轉スルコトアラバ、之レニ搭ジ路次濟州ニ渡ルコトヲ得バ甚ダ幸ヒナル旨ヲ在釜山室田總領事ニ告ゲシニ、同人ヨリ具申スル所アリ、明清京城ニ抵リシ時、在京城杉村領事ヨリ軍艦鳥海號ニ搭ジ、濟州及ビ最寄各島ヲ巡視シ、釜山ニ抵ルコトヲ許可セラル、旨ノ傳達アリ、依リテ朝鮮政府ノ護照關文ヲ請求セシニ朝鮮政府ハ其ノ官吏ヲシテ同行セシムベシトノ照會アリ。是レ固ヨリ望ム所ニ非ラズト雖モ、強チ拒否スルニ由ナク、且ツ朝鮮政府ハ此ノ舉ニ向ツテ多少疑惑ヲ抱ケルモノ、如クナルヲ以

テ、即チ之レヲ諾セリ。而シテ一月二日朝鮮外衙門主事李鉉相ハ通辨朴龍赫ヲ隨ヘ仁川ニ來ルヲ以テ、翌三日鳥海號ニ搭ジ、即日拔錨シ、爾來所安島、古今島、濟州島、巨文島、蛇梁島ヲ歴覽シ、一月二十日午後釜山ニ返レリ。然ルニ其間風浪穩カナラザル日多ク、殊ニ鳥海號ハ噸數僅カニ六百二十五噸ノ小艦ニシテ、暴風激浪ニ堪ヘザルガ上ニ、艦體ノ割合ニハ重量多キ大砲ヲ載スルヲ以テ、進退快捷ナルコト能ハズ、爲ニ視察上往々隔靴ノ憾ミヲ免レズ、且ツ意外ニ多クノ日子ヲ費シタリキ。然レドモ漁業上ノ事情ニ於テ得タル所亦少ナカラズ、其ノ概要ハ左ノ如シ。

仁川ヨリ八尾島ニ至ル

一月三日午後三時三十分仁川ヲ發シ、五時半船ヲ八尾島ニ泊ス。海程僅カニ二十哩、此間ハ京畿道ニシテ固ヨリ通漁規則ノ區域外ナレバ記スルニ足ルモノナシ。但ダ仁川居留人民食料ニ供スル爲メ、夏期ニ在テハ漁業ヲ爲ス日本人アリ、獲ル所ハ鯛ヲ主トシ、「グチ」、鱸、ツツコカレイ鞋底魚等ノ類ナリト云フ。此ノ邊ノ海ハ潮汐ノ干満殊ニ甚シク、仁川港ノ如キハ最高潮三十二尺ニ及ビ、干潮ニ際シテハ數里ノ間、底ヲ露ハシ干潟トナル。斯ノ如クナルヲ以テ潮勢隨テ急激ニシテ、且ツ海水濁色ヲ帶ブ。故ニ好漁場トハ云ヒ難シト雖モ、其ノ潮ノ干満ニ乗ジ、之レヲ利用

シテ漁スルノ方法亦少ナカラザルベシ。又海底泥沙ノ處多キヲ以テ推測スルニ、蛤蜊其他介類ノ棲息スルモノモ必ラズ有ルナラン。固ヨリ實驗セシニアラザレバ斷言シ難シト雖モ、前號ニ報ゼシ所ノ仁川港ニ於ケル魚介ノ販路自由ヲ得ル以上ハ、本邦漁人ノ爰ニ來リテ此等ノ漁業ヲ爲スモノ増加スルナラント想像セラル。

所 安 島

四日午前四時八尾島ヲ發シ、忠清道ノ海上ヲ駛走シ、五日午後六時全羅道ノ所安島ニ着シ、翌六日ヲ以テ上陸シ、(海圖第二百二十七號朝鮮叢島南部ノ部ニ、完島、尙山島、古爾島ノ三島鼎立セリ、今上陸セシ所ハ尙山島ニ當ル)、此ノ地ハ灣形ヲナシ、灣内鎮山、關廳、榧子洞ノ三洞アリ、鎮山ハ日本漁船常ニ多ク來リ泊スル所ニシテ、現今ハ冬季ナルガ爲メ唯ダ濟州島ニ渡リテ鮑、海鼠ノ潜水漁業ヲ爲サントスル船ノ爰ニ來リテ風候ヲ待ツモノ四、五艘アリシノミ。故ニ小屋掛ヲ爲セルモノ、如キハアラザリキ。此ノ地ノ形勢蜂腰ノ如ク、其腰ノ穿マリタル所左右共ニ灣形ヲナシ、風向ニ應ジ何レニテモ船ヲ泊シ安全ナルヲ得ベシ。但ダ西面セル所ハ底淺ク、大船ハ岸ニ接近スルコトヲ得ザレドモ、漁船ノ如キハ支障更ニ無シ。其處ハ關廳ト榧子洞トノ間ニ在リテ、陸地ノ幅七、八町ニ過ギザルベク見エ、平坦ニシテ薄瘠ナル麥田アリ、關廳

ト榧子洞トノ間ノ長サ十町ニ滿タズ。兩村トモニ飲料ニ適スル水アリ。且ツ元來朝鮮ハ到ル處ノ山々皆兀赭ニシテ、薪材ニハ頗ル乏シキヲ常トスレドモ、此ノ列島、殊ニ完島ニハ稍ヤ雜樹ノ生ゼルアルヲ以テ、甚シキ缺乏ヲ告グルコトナシ。若シ本邦出稼漁人ノ爲メ、定置ノ製造場ヲ設ケント欲セバ、實ニ究竟ノ位置ナルベシ。土人ノ氣向ヲ察スルニ、敢テ日本人ヲ嫌忌スルノ風ナシ。就中榧子洞ニハ日本語ヲ解スルモノアリ、曾テ長崎及ビ豊後佐賀關ニ至リシコトアリトテ來リ請フテ曰ク、村ニ一兒ノ眼病ヲ患フル者アリ、今日日本軍艦ノ來ルヲ見ル、軍艦ニハ必ラズ軍醫ノアルアラン、願クハ治療ヲ賜ヘト、依テ加藤大軍醫ハ之レヲ診シ、治方ヲ授ケテ遣レリ。此ノ一事ヲ以テ見ルモ、他日製造場等ヲ設クルトモ敢テ苦情ナキコトヲトスベシ。榧子洞ニハ貢米ヲ徵收スル爲メ、派スル所ノ朝鮮官吏ノ宿スルニ充テタル一舎アリ。李鉉相ハ爰ニ至リ村老ヲ召シ王命ヲ布ケリ。其要今回日本軍艦ノ此ノ地ニ來レルハ敢テ暴狀アルニアラザレバ、村民敢テ驚クコト勿レ。日、韓通漁ノコトハ依然トシテ條約ニ遵フベシ、更ニ王命ヲ布クニアラザレバ變ズルコトナカルベシト云フニ在リシモノ、如シ。衆皆唯々トシテ退ク、而シテ村老我ガ一行ノ爲メ酒饌ヲ設ケントセシモ、其村民ヲ煩ハサンコトヲ避ケ之レヲ謝シ、各火酒一盞ヲ受ケテ本艦ニ歸レリ。抑モ此島ハ船ヲ泊スルニ良ク、雷ニ濟州島ニ抵ルニ根據ノ地トナスニ可ナルノミナラズ、漸次漁業ヲ全羅道ノ西面及ビ忠清道ニ擴メンニハ、根據トナスニ最

モ宜シキヲ得タル形勢ナリ。島ノ近傍亦タ鯛、鱈、鱧等其他漁スベキ魚類少ナカラズ。但ダ鮑ハ頻年潜水器械ヲ使用シ濫獲シタル結果トシテ、今ハ頗ル減少セシモノ、如シ。海鼠ハ尙ホ之レ有レドモ元來此邊ノ海鼠ハ形小サク、之レヲ濟州島産ノモノニ比スレバ製シ揚ゲ百斤ノ價ニ拾圓程ノ低下ニシテ、且ツ海水濁色ヲ帶ビ水溫モ冷カニ過グルガ爲メ、潜水器械ノ使用十分便ナラズ。故ニ甚ダ此ニ捕獲スルコトヲ勉メズト云フ。此日長崎縣下西彼杵郡瀬ノ脇村竹内源吉及ビ長崎市眞殿一郎ノ營業ニ係ル潜水器械船ノ漁者數名本艦ニ來リ訴ヘテ云フ、該船ハ濟州島ニ赴キ鮑及ビ海鼠ヲ捕ランガ爲メ、陰曆十月十五日(即チ太陽曆十二月一日)長崎ヲ發シ釜山ニ抵リ、免許證ヲ請ヒ受ケ、夫レヨリ此ノ島ニ來リ風候ヲ待ツモノナルガ、風順ナラズシテ未ダ濟州ニ渡ルコトヲ得ズ。元來長崎ヲ發スルトキ一隻ノ親船ニ糧食其他要具ヲ積ミ、不日ニシテ此ノ島ニ來ル筈ナリシガ、今ニ至ルマデ着船セズ、彼等四艘ノ小漁船ハ乗組漁夫ノ數殆ンド四十名ニシテ、長崎ヲ發シテヨリ已ニ一月餘リヲ經タリ、從來長崎ヨリ釜山ヲ經テ濟州島ニ至ルニハ十五、六日、多クモ二十日以内ニ着スルヲ常トスルニ、本年ハ風候惡シク意外ノ日數ヲ費シ、今ヤ糧食全ク盡キ、韓人ニ就イテ買ハントスルモ錢ノ儲ヘナク、復タ如何トモスルコト能ハズ。故ニ敢テ救助ヲ請フト、因テ伊藤艦長ハ事情ヲ憫察シ、若干ノ救助ヲ施セシ由ナリ。明清此事ニ關ラザリシト雖モ、之レヲ聞イテ思考スルニ、抑モ斯カル事態ニ及ブモノハ其ノ營業本主、

即チ竹内、眞殿等ノ不注意ヨリ生ズル所タルハ論ナシ。然レドモ一片ノ小舟ヲ以テ數百里ノ海洋ヲ超エ、言語不通ノ異邦ニ出漁シ、此ノ窮困ニ遭遇スル漁人等ノ情態モ亦悲シムベキナリ。表面ヨリ之レヲ見レバ、彼等ハ自己ノ營利ノ爲メ此ノ大膽ノ舉ヲナシ、自ラ窮困ヲ招クモノ、如シト雖モ、翻ツテ一面ヨリ之レヲ見ルトキハ、彼等ハ年々朝鮮海ヨリ獲スル所ノ海物ヲ以テ製シテ清國貿易品トナシ、以テ本邦ニ收ムル所ノ價金實ニ數十萬圓ニ上レリ。若シ彼等ヲシテ斯カル窮困ニ遭フノ慮ナク、安ジテ業ヲ營ムコトヲ得セシメナバ、更ニ尙ホ幾十萬圓ノ輸出品ヲ増加スルニ至ルヤ知ルベカラズ。然ラバ則チ能ク之レヲ保護シテ彼等ヲシテ勇進以テ顧慮スル所ナカラシムルハ、實ニ國利上止ムベカラザル所ナラン。彼ノ歐羅巴北海ニ於ケル遠洋漁業ノ如キ、其ノ漁業者ニ向テ救護ヲ施スノ方法完備セリ。故ヲ以テ漁業年ヲ逐テ發達シ、漁業ノ發達ハ間接海軍ノ助ケヲ爲セリ。本邦ノ如キ今ヤ遠洋漁業ヲ獎勵セザルヲ得ザルノ時機ニ際會セリ。而シテ之レヲ獎勵セントセバ豫メ救護ノ方法ヲ設ケ、前述ノ如キ窮困ニ陥ルコトナカラシムルヲ要スベシ。此ノ事ニ就テハ別ニ鄙見ノ存スルアリ、他日詳カニ之レヲ陳ベントス。

古今島

一月八日所安島ヲ發シ、此日長直路ニ入ル。長直路ハ海圖二百二十七號ニ「インサル」島、

「ナウチラス」島、鹿島トノ間ニシテ、「インサル」島ハ本名蒟蒻島、「ナウチラス」島ハ本名古今島ト云フ、(海圖ニハ「インサル」ト「ナウチラス」ト連續シ居レドモ、是レ誤リニテ實ハ別島ナリ)翌日古今島ニ上ル。此地ニ鎮アリ、古今鎮ト云フ。衙門ニ至リ僉使趙詰民ニ面ス、李鉉相ハ王命ヲ傳フルコト所安島ノ時ノ如シ、前日朝鮮政府所有ノ汽船一隻來リ、我ガ島海號ト相並ンデ投錨ス。蓋シ此地ニテ收ムル所ノ貢米ヲ積ミ入レ、仁川ニ運送センガ爲メ來レルナリ。趙詰民言フ、此地穀類及ビ麻ト木棉トヲ産ス。大陸ナル唐津ト云フ地多ク米ヲ出セドモ、其ノ港ハ南浦ト稱シ大船ヲ泊シ難キ所ナルヲ以テ、皆ナ此ノ古今島ニ出シ、爰ニテ大船ニ積入ル、ナリ。斯ク農產地ナルヲ以テ、土民漁業ヲ營ムモノ少ナシ。唯ダ二、三ノ魚帳オイチヤンヲ架スルモノアリ、(魚帳ハ報告第一號中ニ所謂籠ネリニ同ジ)、二三月頃ハ「セガイ」(人ニ依リ或ハ「セガイ」ト云ヒ、或ハ「ソガイ」トモ云フ、鯨ニシンノ小ナルモノナリ)、秋ハ「イナ」及ビ石首魚ヲ捕ルノミ。斯ノ如クナルヲ以テ島ニ在テハ常ニ魚肉ヲ食フコト能ハズ、日本ノ漁船ハ往々入り來ルコトアレドモ、或ハ六、七艘、或ハ八、九艘ニ過ギズシテ其定マリナシ。入り來ル漁船ハ順風ヲ候シ、他ニ往キ去ルヲ以テ久シク碇泊スルモノナク、小屋掛スルモノ、如キハ固ヨリ無シ。魚ヲ賣買スルコトモ亦之レナシト云ヘリ。蓋シ趙ガ任ニ此ノ地ニ來リシヨリ半年ニ過ギズ、故ニ其ノ説ク所未ダ要領ヲ得ザルモノアリ。然レドモ此ノ地ハ船ヲ泊スルニハ良位置タルベキモ、漁場ニ

於テハ未ダ深ク賞美スルニ足ラズ、想フニ鯛、鱸ノ如キハ必ラズ多カルベシト雖モ、此等ハ製造ヲ加ヘ難キ魚ニシテ、生賣スルニ利アリ。然ルニ近傍ニ於テ之レヲ販賣スベキノ地ナキヲ以テノ故ニ本邦漁人ノ來リテ漁スルモノ少ナキナラン。鮑、海鼠ノ如キモアレドモ、海水ノ濁リヲ帶ブルト、水溫ノ低キト、其體ノ小サキト、且ツ濟州島既ニ近キニアルヲ以テ皆ナ彼島ニ赴キ、此所ニテ捕獲ヲ勉ムルモノ少ナシ。唯ダ清國輸出ニ適スベキ鰾(製造シテ鶯爪ト稱スルモノニテ稍ヤ大形ナル鰾)ノ栖息スルアランド察スレドモ、是レ亦來リテ漁スルモノナシ。是レ鰾ハ捕獲後速カニ製造ヲ要スルモノナルニ、近傍ニ定設ノ製造場ナキモ或ハ一因ナランカ。又此近傍ナル詳日島、平日島等ニハ石花菜ヲ産スト云ヘドモ、亦未ダ本邦漁人ノ來リテ採取スル者ナシ、(朝鮮人ハ採テ唐津ニ出シ、唐津ヨリ釜山ニ輸シ、居留日本商人ニ販賣スルヲ常トス)、此ノ島、良好ナル飲料水アリ、一時漁船ノ風波ヲ避クルニハ最モ便宜ノ地トス。土民モ亦甚ダ本邦人ヲ嫌忌スルノ態ヲ見ズ。

濟州島

十一日午前六時半、長直路ヲ發シ、午後三時半、濟州島ノ東端牛島トノ間ニ船ヲ泊ス。此ノ處、海圖ニハ牛島泊地トアレドモ、海底岩礁多クシテ泥沙少ナク、殊ニ潮勢急激ニシテ安ンジ

テ船ヲ泊シ得ベキ地ニ非ラズ。然レドモ他ニ良港ナキヲ以テ強ヒテ爰ニ投錨セシナリ。偶々日本漁船ノ在ルヲ以テ之レヲ招ケバ、長崎ヨリ來レル潜水器械船ナリ。余ハ上陸セント欲シ、之レヲ雇ヒテ漕ギ出シタレドモ、風高ク波荒ク、潮勢亦急ニシテ岸ニハ着キ得ベキモ本艦ニ漕ギ返ランコト難キヲ察シ、中途ヨリ船ヲ返シ本艦ニ歸ヘル、翌十二日一漁船ノ本艦ニ來リ訴フルモノアリ、其ノ言ニ曰ク、我等ハ長崎竹内次郎吉、對州竹内吉重等ノ代理ニシテ、潜水器械ヲ携ヘ漁夫ヲ率キ、鮑、海鼠等捕採ノ爲メ濟州島ニ來リ居ルモノナリ。昨年初冬ヨリ此ノ島ノ「オチヨリンボ」(吾照浦ヲ云フナラン)ニ駐マリ、小屋掛ヲナシ、業ヲ營ミ居リシニ、去ル十二月三日、是レヨリ數里隔リタル旌義ト云フ地ニ在ル朝鮮官吏ト稱シ來リテ、我等ニ退去ヲ命ズル旨ヲ述べ、左ニ謄寫セルガ如キ書面ヲ示セリ。

吾奉承傳教除授旌義大守治民政邊方守直之官也、汝等日本何處之人乎、何月日自何處因何事到此耶。

兩國雖爲通知而此島即薄土也、居民以海採爲業、而又況魚鮫進上所關也、若使汝等來採民失其業、而進上亦爲難處、故自內衙門已有漁採禁斷之令、而日人漁採幕已爲撤送則汝等亦所其知也、令又犯禁造幕何耶、即速毀去毋違約條干我國之法不可違也、即速毀去、而若有漁採意更待我國公之然後可也、設或漁採而造幕即國法所禁也、即爲毀撤

從于中口可也。

此島三邑中汝等何日口入於我境殺人命奪民物則此非相和本意也、尙未報讐則此島人民共所含忿者也、汝等以何面目來居此浦乎、然而汝等既以本月下旬爲限則依汝願許諾以此書納約條也、若過下旬不去則率軍毀幕以此知之可也。

僕等既以本月下旬爲限則趣其限即爲撤幕歸去之意約條書納口。

(文中字ノ讀ミ難キモノアリ□ヲ付シテ填充ス)

此ノ如クナルヲ以テ、我等思考スルニ、既ニ釜山ニ於テ税金ヲ納メ免許ヲ得テ來レル以上ハ、營業上ニ於テ彼等ニ拒マル、ノ理ナシ。又內衙門ヨリ漁採禁斷ノ令アリト言フト雖モ、未ダ日本政府ヨリ何等ノ告示モナケレバ從ヒ難シ。但ダ小屋掛ノ一事ハ固ヨリ明許ヲ得シニ非ザレバ拒マル、モ復タ如何トモシ難ク、殊ニ其ノ頃ハ我等同業ノ人數モ甚ダ少ナカリケレバ、若シ暴ニ小屋掛ヲ取毀サル、ガ如キ事アルモ、衆寡敵シ難カラン。故ニ言ヲ柔カニシ、以テ期ヲ延スニ加カズト思慮シ、即チ之レニ答ヘテ我等ニ退去セヨトナラバ退去モスベケレドモ、本邦ヨリ未ダ親船着セザレバ取崩シタル木材其他諸器具等ヲ積載スベキモノナシ。故ニ親船ノ來ル頃、即チ十二月下旬マデ猶豫ヲ與ヘヨ、若シ尙ホ猶豫シ難シトナラバ、朝鮮ノ船ヲ以テ送り還セヨト云ヘリ。其後十六日、十八日、二十一日、三回マデモ催促ヲ受ケタレドモ同様ニ答ヘ置キタ

リ、按ズルニ前記ノ文書ヲ以テ考フルニ、此文書ハ初發ニ示セシモノニアラズシテ十二月中ノ猶豫ヲ求メタルノ後ニ示セシモノ、如シ。然レドモ今本人等ノ言フ所ニ由テ記ス。又此文書ノ末段僕等云々以下ノ文字彼レヨリ示セシモノニ似ズ、姑ク原書ノ儘謄寫ス、然ルニ今ヤ其期已ニ滿チ、且ツ本邦ヨリノ親船モ昨日既ニ到着シタレバ、今日ニモ退去ヲ迫ルナラン。然レドモ小屋掛ヲ撤去スルトキハ捕リタル鮑、海鼠等ハ製造スルニ由ナク、甚ダ迷惑ノ至リナリ。又強ヒテ之レヲ拒マンニハ必ラズ争鬪ニ及ブベシ。已ニ四、五日前ニモ本邦漁人ニ向ツテ朝鮮人ノ石ヲ抛チ傷ヲ負ハセシ者アリ。當時將ニ喧嘩ニ及バントセシヲ、辛ウジテ鎮靜セシ次第ニテ、今日ニ於テハ漁船ノ數二十餘艘、人員二百名許モアレバ、若シ彼ヨリ強制ノ所業アルトキハ、我ガ漁人ノ氣象トシテ決シテ黙止シ得ズ。事爰ニ至ルトキハ鎮靜セントスルモ得ベカラズ。今幸ヒニ軍艦ノ廻航アリ、其ノ威ヲ藉リテ以テ事ナカランコトヲ希フト云フニ在リ。抑モ此ノ如キ訴ヘハ軍艦ニ於テ關スベキ所ニモアラズ、又 明清ガ與カルベキ事ニモアラズト雖モ、幸ヒニ艦中ニハ朝鮮國王ノ命ヲ齎ラシタル李鉉相ノ在ルアレバ、共ニ上陸セバ李ガ傳フル所ノ命旨ニ由リ、自然ニ事ノ歇ムコトアランモ知ルベカラズト、乃チ艦長其他ト共ニ彼等ガ船ニ乗リ上陸セリ。此ノ李鉉相モ亦乘ラントテ本艦ノ舷頭マデ出デタレドモ、波浪高ク小船ノ簸揚スルコト甚シキガ爲メ、畏縮シテ小船ニ乗り移リ得ズ。止ムヲ得ズ李ヲ本艦ニ留メ上陸シ、其ノ情況ヲ

視察シ、遂ニ村ノ先達ト稱スルモノ四名ヲ拉ヘ、本艦ニ返リテ李ニ紹介セシニ、李ハ王命ヲ傳フルコト所安島、古今島ニ於ケルガ如クシ、又別ニ濟州ノ牧使ニ向ケ外衙門ヨリ下ス所ノ文書ヲ交付シ、其傳致ヲ命ゼリ。察スルニ之レガタメ一時事無キコトヲ得タルナラン。

本艦ハ此ノ地ニ泊スルコト一週日ニ及ビタルモ、風高クシテ時々雪ヲ添ヘ、潮浪亦極メテ激烈ニシテ上陸スルコトヲ得ザリシヲ以テ、吾照浦ノ外ニハ往クコトヲ果サリキ。然レドモ今日マデ屢々人ニ就キ濟州ノ情況ヲ聞クコトヲ得タルモノ、中、其ノ信ズルニ足ルベキモノヲ擧ゲテ概略ヲ記サンニ、此ノ島ノ位置タル北緯三十四度十分餘ヨリ三十分ノ間ニ在リテ略ボ楢圓狀ヲナシ、東西ニ長ク南北ニ短シ。即チ東西ノ長サ凡四十里、南北ノ幅十三里アリト云フ。大陸ヲ距ルコト凡四十八哩ニシテ、屹立セル一孤島ナリ。慶尙島ノ巨濟島、南海島ト共ニ朝鮮三大島ノ稱アリト雖モ、中ニモ此ノ島ハ大陸ヲ距ルコト遠キヲ以テ、風土人情頗ル異ナル所アリ。余等吾照浦ニ上リ土民ノ情態ヲ見ルニ、生計ノ度極メテ低キガ如キモ、其人概ネ軀幹長大ニシテ音聲甚ダ高ク、舉止頗ル活潑ニシテ慍悍ノ氣風ヲ見ル。惟フニ他村ニ於テモ亦然ルナラン。島中濟州、旌義、大靜ノ三邑アリ。其ノ濟州ハ北ニ面シ、牧使ノ居ル所ノ州城トス。旌義、大靜ノ二縣ハ南ニ面シ、旌義ハ東ニ偏シ、大靜ハ西ニ倚ル、島ノ中央漢羅山アリ（一ニ耽羅山ニ作ル）、高サ凡六千五百尺、麓ヲ繞リテ又九鎮アリ、島ノ全體ヲ狀スレバ形覆盆ノ如シト謂フテ

可ナラン。其ノ山裔延イテ海中ニ入ル、地質ハ吾照浦ニ於テ見ル所ニ據テ察スルニ、火山質ニシテ石皆輕鬆、土壤黒色ヲ帯ビタル灰ノ如ク、薄瘠ナル地味ト思ハル。恰モ本邦伊豆七島ノ地質ニ似タリ。而シテ四周共ニ船ヲ泊スルニ足ルベキ港灣ナク、唯ダ今回一行ノ上陸セシ處ハ少シク彎曲ヲナシ、吃水六尺許ノ船ハ障リナク出入スルヲ得ベシト雖モ、入口ニ岩石アリテ最モ注意ヲ要スベキ處タリ。灣ノ奥ノ方ハ水淺ク、干潮ニハ殆ンド底ヲ露ハサントス。灣口ハ北ニ向フヲ以テ、北風ニハ碇泊便ナラザルモ、其他ノ風ハ避クルヲ得ベシ。聞ク處ニ據レバ此ノ地ヲ以テ全島ニ於ケル泊地トシ、此ノ地南ニ面シタル處ニ西歸浦ト云フアリ（海圖中南部トアル處ニ當ル）、西北ニ飛揚島ト云フアリ（海圖ニ楊島トアルモノ是レナラン）ト雖モ、波浪險惡、小船モ尙ホ且ツ安ンジテ繫泊スルコト能ハズト云ヘリ。斯ノ如クナルヲ以テ、自然他方トノ交通モ稀疎ニシテ民心隨テ固陋ナルモノ、如シ。

右ニ述ブル如ク土地薄瘠ナルガ上ニ、人民亦耕耘ヲ勉メズ、糧食ノ如キハ他ヨリ輸入ヲ仰グ、故ニ土民ノ業トスルハ多クハ海物採取ニアリ。其ノ海物ハ鮑、海鼠、石花菜、海蘿、及ビ各種ノ貝類、海藻等ナリトス。元來此ノ島ノ四周ハ皆ナ岩石ナルヲ以テ、此等ノ產殊ニ饒ク、土民ハ裸猿ニテ之レヲ採ル、就中海藻ヲ採ルハ概ネ婦女ノ業トス。本邦漁人ノ爰ニ來ル者モ其ノ目的亦鮑ト海鼠トニ在リテ、凡テ潜水器械ヲ用ヒテ之レヲ捕ル、石花菜、海蘿ハ採ル者ナシ。其

他魚類モ少ナカラザルガ如シト雖モ、之レヲ漁スル者亦甚ダ少ナシ。昨年マデハ本邦漁人ノ潜水器械船ニシテ朝鮮海ニ出稼スルモノ百臺許リナリシガ、昨年秋ヨリ曾テ露領浦潮斯德へ出稼ノ潜水器械彼地ヲ引揚ゲ、朝鮮海へ來リシモノ二十七臺アリ、之レヲ合セテ百二十臺許アリ。其中濟州島周圍ニテ漁業ヲ爲スモノ七八十臺アリ、（此中二十一臺ハ山口縣吉村與三郎、十七臺ハ長崎竹内源吉、十四臺ハ對州竹内吉重等ノ組織セル水産會社ノ所有ニ係リ、其他ハ一人一臺乃至三、五臺ヲ有スルニ過ギズト云フ）、尤モ現今來リ居ルハ二十五臺許リニ過ギザレドモ、陰曆正月以降ニ至ラバ七、八十臺ニ及ブベシト、而シテ九、十月ニ至リテ一先ツ鄉里ニ返ヘルヲ常トス。是レ九、十月以後ハ海上風波荒ク、糧米其他ヲ運搬スルニ便ナラザルニ由ツテナリ。其ノ收穫ヲ聞クニ、鮑、海鼠ヲ合シテ一年三十萬圓ニ下ラズト云フ。漁業ノ利モ亦大ナリト謂フベシ。（此ノ計算ハ漁人ノ說區々ニシテ一モ信ヲ措キ難キニ由リ今唯ダ概算ヲ舉グルノミ、尤モ要用ノ件ニ付尙ホ詳カニ調査シ、追テ報告スル所アルベシ）、然レドモ其ノ製品ヲ實驗スルニ甚ダ濫造ニシテ、海蔘ノ如キハ甚シク腹ヲ割裁シ、霞ヲ肉身ニ貫キテ乾燥スル等、之レヲ本邦著產地ノ精良品ニ比較セバ其價百斤ニ對シ十四、五圓位ハ必ラズ低カラント信ズ。故ニ之レガ改良ヲ獎勵スルハ必要ナルニ似タレドモ、更ニ之レヲ考フルニ、初メテ潜水器械ヲ使用セシ頃ハ鮑ノ如キハ一日ニ生員四百貫乃至五百貫ヲモ採リ得タレドモ、目今ニ至リテハ大ニ減少シ、

百五十貫ニ上ルコト稀ナリ。海鼠ハ未ダ著シキ減少ヲ見ザレドモ、年々幾分ヅ、ヲ減ズルノ傾アリト云ヘリ。元來鮑、海鼠ノ如キハ蠢動極メテ不活潑ナルモノナレバ、潜水器械ニ由ツテ捕獲スルハ容易ナルモ、捕り盡スコトモ亦容易ナリト。之レヲ既往ニ徴スルニ、曾テ千葉縣下上總國中魚落郷小濱ニ於テ鮑ノ新礁ヲ發見スルヤ、潜水器械八方ヨリ集マリ來リ、纔カニ三年ニ滿タズシテ全ク捕り盡シ、終リニ一枚ノ鮑ヲモ得難キニ至リシコトアリ。海鼠ニ於テモ濫獲ノ弊ヲ被リタル例アリ。濟州島ハ周圍ノ大ナル爲メ未ダ捕り盡スニハ至ラザルモ、七、八十臺乃至百二十臺ノ器械ヲ以テ何ノ制限モナク捕獲センニハ、今後三、五年ヲ出デズシテ彼ノ小濱ノ覆轍ヲ踏ムナラン。然ラバ則チ今ヨリ製造ノ改良ヲ促スモ其ノ功ヲ見ルノ日ハ即チ捕盡シテ形ヲ止メザルノ秋ニシテ、竟ニ六日ノ菖蒲タルニ歸セズンバアラザルナリ。

本邦漁人ガ潜水器械使用ノ盛ナルコト此ノ如シ。而シテ濟州人民ガ之レト競争スルコト能ハズシテ、唯ダ本邦漁人ノ到ルヲ嫌忌スルモノハ其ノ愚笑フベキガ如シト雖モ、一面ヨリ願レバ彼等ガ生計ノ資トスル所ノ鮑、海鼠ハ本邦漁人ノ爲ニ悉ク獲ラレ、漸ク減乏セントスルニ至レルコトナレバ、之レヲ嫉惡スルモ亦止ムヲ得ザルモノアリ。其情憫ムベキニ似タリ。其ノ本邦漁人ヲ嫌忌スルノ情態ハ前ニ掲ゲタル文書ニ依テ知ルベシト雖モ、尙ホ他ノ一例ヲ舉ゲンニ、本邦漁人ノ小屋掛ヲ設ケタル地ハ、吾照浦及ビ加波島ノ二ヶ處ノミニシテ、曾テ飛揚島ニモ小

屋掛ヲナセシモ、土民ノ居リ合ハサレタルタメ、今ハ撤却シ、西歸浦ハ水ヲ汲ムヲ許セドモ、小屋掛ヲ爲サシメズ、其他ニ於テハ飲水ヲモ汲マシメズ、強ヒテ汲マントスレバ其水ヲ汚穢ニシ、飲料トナスコト能ハザラシメ、或ハ石ヲ投ズルニ至ルト云フ。今回我が一行ノ吾照浦ニ上陸セシトキ、路傍ニ禁牌ヲ建テタルアリ、其文ニ曰ク、

營門令飭至嚴故若有雜人無事出入者自該洞結縛捉上事是乎所而入禁斷者

壬辰九月 日

領 將 所 花印

依テ村ノ先達ナル者ニ何が故ニ日本人ノ村ニ入ルヲ禁斷セルヤト詰リシニ、彼分疏シテ該禁牌ハ日本人ノ入ルヲ禁斷セルニ非ラズ、朝鮮人タリトモ所謂雜人ノコトナクシテ入ルヲ禁ズルニ在リト云ヘリ。然レドモ海岸ニシテ他ニ通路ナク、日本漁人ノ外入ル者ナカルベキ處ニ於テ之レヲ建テ、而シテ斯卡ル分疏ヲ爲スモノハ遁辭ナランノミ。抑モ朝鮮人、殊ニ濟州島民ガ斯ク本邦人ヲ嫌忌スル原因ニ就テハ種々ノ說アリ。其說ニ曰ク、朝鮮ノ風俗タル賤民ト雖モ衣裳ヲ正ウシ、其股脚ヲ露ハスガ如キハ尤モ惡ム所トス。然ルニ本邦人ガ上陸スルヤ、概ネ股脚ヲ露ハサバルハナク、甚シキハ赤裸體トナリテ徘徊ス。朝鮮人之レヲ賤シミ罵詈スルヲ本邦漁人等怒リテ爭鬪ヲ始メ、竟ニ兇器ヲ弄スルガ如キ事往々之レアルガ故ナリト。又說ニ、朝鮮ノ風俗タル、婦女ハ他ノ男子ニ接見スルコトナキヲ慣法トス。故ニ男子若シ路ニ婦人ニ遇フトキハ

男子ヨリ之レヲ避クルノ例ナルニ、本邦漁人ハ斯カルコトヲ知ラズ、殊ニ濟州島ハ海藻採取ノ如キハ概ネ婦女子ノ業ナルニ、其ノ業ヲ爲ス者ニ對シ股脚ヲ露ハシ、又ハ赤裸體ニシテ言語セントスル業ノ事アルヨリ、彼ノ婦女子ハ皆逃レ去ラザルヲ得ズ。其ノ周章ノ間、或ハ漁具、或ハ收獲物ヲ失フ等ノコトアルガ故ナリト。又一説ニ、濟州島ノ土民ハ古來一種ノ種族アリテ、強大ノ權力ヲ有シ、牧使ト雖モ之レヲ制スルコト能ハズ、現今州ノ吏房タル金膺海ト云ヘルハ即チ其種族ニシテ家資頗ル富ミ、今ノ牧使趙奎遠ガ牧使ノ官ヲ買ハンタメ出セシ所ノ金モ、實ハ膺海其ノ金主ニシテ、其ノ族類ナル巨路居、金履赫、朝天鎮、居鎮、栽浩、金膺鉉等ノ輩ト相黨シ、牧使ヲ挾ミテ威ヲ振ヒ、島中ノ物産ヲ擁シ、其利ヲ壟斷セリ。然ルニ本邦漁人ガ島ニ來ルトキハ、自ラ彼等ガ利ヲ減殺スルヲ以テ無智ノ島民ヲ教唆煽動シ、是レマデ屢々爭鬪ヲ惹キ起サシメ、本邦漁人ヲ放逐セント企テタルナリト。此等ノ諸説皆各由ル所アルガ如シ。然ルニ一昨二十三年島民ノ本邦漁人ト爭鬪シ毆打セラレテ死ヲ致セシ者三名アリ、是ニ於テ乎嫌疑ノ念今ヤ結ンデ解ケザルガ如シ。故ニ尋常ノ手段ニ由ツテハ島民ト本邦漁人トノ間、平和ヲ永遠ニ保タンコトハ到底望ムベカラザルモノナラン。

本邦漁人ノ目下濟州島ニ赴クモノハ概ネ潜水器械ヲ使用シテ鮑、海鼠ヲ捕ルニアレドモ、此ノ他ノ魚類ヲ漁シテ利ヲ得ベキモノ亦少ナカラザルベシト信ズ。聞ク所ニ據レバ、島ノ南面ニ於テハ鱣多ク、豊後佐賀關ノ漁人來リテ之レヲ釣レドモ、彼等ハ固ヨリ島地ニ小屋掛スル等ノ事ヲ爲サズ、其他鱈、鯉、鰕等ノ類モ多ク、鯨及ビ海豚モ時々通行スルヲ望ミ見ルコトアリト云フ。因テ案ズルニ今回島海號ノ濟州島ニ碇泊スルヤ、一週間ニシテ其間一日トシテ靜穩ナルコトナク、錨ヲ下セシ船ニシテ尙ホ甚ダシク動搖シ、傾斜三十二度ニ及ビシコトアリ。是レ潮勢風力ト相鬪フノ致ス所ニシテ、彼ノ臺灣ヨリ琉球ニ沿ヒ北スル所ノ黑潮暖流ノ爰ニ衝キ來ルノ故ナラン。何ントナレバ一日大氣ノ溫度ヲ驗スルニ華氏ノ三十五度ニシテ、海水ノ溫度ハ六十度ニ及ベルコトアリ。夫レ此ノ如キ甚シキ差アルモノハ、黑潮暖流ノ作用ニアラザルナキヲ得ンヤ。故ニ海水ノ蒸發多ク、現ニ碇泊中モ或ル方面ノ遠天ハ晴レタルニ拘ラズ、此ノ地ニ在テハ時々電雪ヲ降シタリ。蓋シ海水ノ蒸發セシモノ、急ニ寒風ニ遭フテ電雪トナレルナリ。而シテ夏季ニ在テハ煙霧常ニ四塞スト云フ。果シテ黑潮暖流ノ影響アリトセバ、鯉ヲ主トシ、其他暖流邊側ニ沿フテ游行スベキ種類ノ魚ハ島ノ南面ニ群來スルコトアルハ理ニ於テ然ラザルヲ得ザルナリ。唯ダ探究セシモノナキニ依リ、人未ダ之レヲ知ラザルナラン。前ニモ述ブル如ク、鮑、海鼠ハ數年ニシテ滅盡スルヲ期スベケレバ、滅盡ノ後ハ本邦漁人ノ爰ニ來ルノ必要ナキニ似タレドモ、前途之レニ代ルベキ利益ノ生ズル見込ナキニアラザレバ、決シテ全然拋擲スベキ地ニ非ラズ。唯ダ此ノ地ノ波浪高ク、潮勢急ナラバ、本邦從來ノ普通漁船ニテハ其利ヲ收メ難

カルベク、宜シク先ヅ漁船ヲ改良シ、然ル後其ノ多獲ヲ庶幾スベシ。是レ目下至急ニ行ハルベキニ非ラズ、當サニ之レヲ永遠ニ期スベキナリ。此ノ濟州島ノ漁業上ニ就テモ亦別ニ鄙見ノアルアリ、前頃所安島ノ件ト共ニ後日報道スベシ。

濟州島ニ産スル所ノ石花菜ハ其ノ性質ニ於テハ上品ナリ、朝鮮人ノ婦女之レヲ採リ釜山港ニ輸送スルモノ年々六、七十萬斤ニ下ラズト云フ。然レドモ島民ノ蒙昧ナル極メテ濫製ヲナシ、中ニハ沙泥ヲ濕シ、或ハ濕氣ヲ帶ビ、動モスレバ腐敗セントスルガ如キモノヲ出シ、其ノ性質ノ佳良ナルニモ拘ラズ、價ハ普通品ノ半バヲ下ルヲ常トス。若シ本邦人能ク之レヲ教ヘ、敢テ彼等ガ業ヲ奪フコトナクシテ却テ利スル所アラシメ、而シテ本邦人亦是ニ由テ益スル所アルニ至ラバ、或ハ島民ガ本邦人ヲ嫌惡スルノ念ヲ解クノ一助トモナランカ。

鰈子島

濟州島ノ西北端ヨリ更ニ北ノ方海上三十哩許ニ鰈子島アリ、全羅道ノ西南隅ニ位シ、要衝ノ地ニシテ亦本邦漁人ノ到リテ漁業ヲ爲ス所ナリ。傳聞ニ據レバ該島ハ鯖、鱒、鱒、烏賊等多ク、鰈ノ漁獲モ亦之レアリ、鮑、海鼠モ少ナカラザルヲ以テ、潜水器械ヲモ使用ス。濟州島ニ次グル好漁場ナリト云フ。未ダ實地ヲ目撃セズト雖モ位置ヲ以テ察スレバ、夫レ必ゾ然ルナラン。

然ルニ濟州島民爰ニ來リテ本邦漁人ノ到ルヲ拒ミ、或ハ錢ヲ貪ボル等ノ惡風アリテ、本邦漁人ノ屢々困却スル所ナリト聞ク、然レドモ船ヲ泊セザルヲ以テ事情ヲ詳カニスルヲ得ズ。

巨文島

十七日風浪未ダ歇マズト雖モ、午後二時半努メテ濟州島ヲ發シ、激浪ヲ冒シテ進行ス。船體ノ傾斜最強四十三度ニ至ル。十八日午前六時下巨文島ニ抵リ、所謂哈密爾敦港ニ投錨シ、上陸シテ鎮ノ衙門ニ到ル。鎮ハ溝竹島ニ在リ、命使趙義文ハ目今青山鎮ニ駐在シ、中軍金鍾權ト云フモノ代理ス。李鉉相ト共ニ之レニ面話シ、濁酒ノ饗ヲ受ケテ去ル。此ノ地ハ巨文島、溝竹、天測ノ三島ヲ以テ成ル、巨文島ハ南北ニ長ク、溝竹島ハ其ノ策ニ對シテ稍ヤ小サク、南ニ天測島アリ、又南ニ別嶼アリ、其ノ中間ヲ哈密爾敦泊地トシ、南北ニ口ヲ開ク、島中袖子里、竹田里、長作里、德興里ノ四村アリ、曾テ英國ノ占據セシヲ以テ著名ナル所ニシテ、地勢朝鮮海ノ要衝ヲ扼シ、且ツ船ヲ泊スルニ極メテ安全ナリ。當時英國人ガ此島ニ來レルトキ、島民ニ米八升、韓錢七十五文ヅ、ヲ與ヘテ、日々人夫百人ヲ雇ヒタル等ノ事アリテ、頗ル島民ノ潤澤トナリシヨリ、今ハ外國人ヲ仇視スルノ情態ナシ。中ニハ訛リナガラ日本語二、三語ヲ解スル者モアリ。此ノ島モ亦多クハ本邦漁人ノ濟州島ニ渡ラントスルモノ來リテ風浪ヲ候スル所ニシテ、

我が一行ノ來リシトキモ漁船四、五艘親船二艘泊スルヲ見タリ。此ノ地ノ海産ハ鮑、海鼠、鯛、太刀魚、鯖、鱈、烏賊、石花菜、海蘿等ニシテ、鯖、鱈ノ如キハ火ヲ焚キ、網ヲ用ヒテ漁スト云フ。太刀魚及ビ鯖ヲ釣ル鈎ヲ一見セシニ、其ノ製造甚ダ良シ。日本人ヨリ買ヒタリヤト問フニ、島民自ラ製セリト答ヘタリ。果シテ然ランニハ朝鮮ニ於テハ漁事稍ヤ發達セル地ト稱シテ可ナリ。此ノ地ハ漁業上濟州島ニ次グ好位置ニシテ、鰈子島ハ見ザリシモ恐ラクハ之レト相伯仲スルノ漁場ナラン。何トナレバ島ノ四周ニ又無數ノ小嶼アリテ、岩礁モ多ク泥沙ノ處モアリ、各種ノ魚介類栖息スルノミナラズ、黒潮暖流ノ影響モ之レアルヲ以テ、前ニ掲グル如ク群來ノ魚アリ、世人ノ嘖々巨文島ヲ唱道スルモノハ決シテ虚稱ニアラザルナリ。殊ニ船ヲ泊スルニ便ニシテ、飲料水モ善ク、薪材モ甚ダ乏シカラズ。故ニ漁業上望ミヲ屬ズベキ好位置タルニ止ラズ、濟州島ニ渡ラントスル漁業者取締等ノ方法ヲ施サンニモ、亦樞要ノ地ト思ハル。又曾テ本邦漁人ノ溝竹島ニ於テ鱈並ニ雜魚ヲ漁センガ爲メ、大敷網ヲ布設センコトヲ計劃シタレドモ果サリシト云フ。但ダ潮勢烈シキガ故ニ定設漁具ヲ布置シテ適當ナリヤ否ヤハ未ダ保シ能ハザル所ナリ。

蛇梁島

十九日午前六時半巨文島ヲ發シ、午後四時下蛇梁島ニ泊ス。上陸スルコトヲ得ザリシヲ以テ人情状態ノ一斑ヲ窺フコトヲ得ザリシト雖モ、軍艦ノ港ニ入ルヲ見テ海濱ニ出デ居ル所ノ島民遽カニ奔走セシヲ望ム。或ハ是レ疑懼ヲ抱キタルニ由ルニハ非ザルカ、蓋シ此ノ地ハ是レマデ軍艦又ハ他蒸汽船ト雖モ入り來ルコト甚ダ稀ナル所ナレバナリ。地ハ巨文島ノ如ク要衝ヲ扼セルニ非ザレドモ、船ヲ泊スルニ足ル。此日鱈鯨ト稱スル下等ノ鯨ヲ岸近ク噴潮セルモノ二頭ヲ見ル、他ノ海物ハ推察スルニ巨文島ト多ク異ナル所ナカルベシ。

右ノ如ク廻航シ二十日午前七時半蛇梁島ヲ發シ、午後三時半船釜山ニ入ル、適々日本郵船會社ノ玄海丸今ヤ釜山ヲ發シ仁川ニ赴カントスルノ際ナリ、該船ニハ今回朝鮮京城駐在ヲ命ゼラレタル大石辨理公使ノ乗組マル、ト聞キ、玄海丸ニ至リ面晤シ、今回巡回中視察セシ所ノ概略ヲ陳述シ置ケリ。爰ニ於テ烏海艦ヲ辭シ釜山ニ上陸セリ。此日經タル所ノ海上巨濟島近傍ノ漁業ニ就キ見ル所ナキニ非ザレドモ、尙ホ調査ヲ遂ゲ追テ報告スベシ。

明治二十六年一月二十四日

朝鮮國釜山ニ於テ 關 澤 明 清

朝鮮近海漁業視察概況

今回朝鮮沿海巡視ニ付テハ咸鏡、江原ノ二道ハ固ヨリ、通漁訂約ノ區域内ナレドモ、元來互寒甚シキ地ニシテ、時亦嚴冬ニ際シタレバ、旅行極メテ困難ナラントノ説アリ。故ヲ以テ東京出發ノ際ハ此二道ニハ赴カザルベキ決意ニシテ、外務大臣閣下ノ訓令中ニモ咸鏡、江原二道ノ事ハ除カレタリ。然ルニ嚮キニ慶尙、全羅、忠清、京畿ノ四道ヲ歴覽シ了リ、今僅カニ二道ノミヲ遺ストキハ、朝鮮海一般ノ漁況ヲ論ゼントスルニ其權衡ヲ得難キノ恐レアルヲ以テ、唯ダ其ノ地勢ノ大體ヲ視察スルノミヲ以テ尙ホ得ルコトアラント考ヘタルニ依リ、一月三十一日釜山ヨリ定期郵便船伊勢丸ニ搭ジ元山津ニ赴キ、二月二日到着シ、其ノ四日ノ夜又同船ニテ元山ヲ發シ、六日ノ朝ヲ以テ釜山ニ歸港セリ。斯カル促迫ナル旅行ナレバ、固ヨリ精細ナル調査ヲ得ザリシハ勿論ナレドモ、在釜山室田總領事ヨリ伊勢丸ノ船長ニ注意ヲ促ガサレ、船長ノ厚意ヲ以テ成ルベク航路ヲ陸岸ニ近寄セ、殊ニ灣曲等アル地ニハ觀望ヲ容易ナラシメタルヲ以テ、

地勢ノ大體ニ於テハ頗ル領會セシ所アリ、依テ元山ニテ見聞セシ所ヲ併セテ左ニ報道ス。

釜山ノ港口ヲ出テ北ノ方慶尙道ニ屬スル地方ニ於テ、漁場トスベキハ機張ノ豆毛浦、蔚山ノ鹽浦ヲ最トス。此ノ間ノ地形、釜山以南ニ比スレバ面目一變シ、島嶼ノ羅列スルナク、岩礁亦少ナシ。殊ニ蔚山ハ一ノ灣形ヲ爲シ、大船ト雖モ繫泊スルニ足リ、海底沙地ノ所多ク、鱈ノ好漁場ト稱ス。其ノ漁期春冬兩度ニシテ、土民ハ專ラ地曳網ヲ以テ捕獲シ、春期ニ在テハ篝火ヲ焚キ、俗ニ所謂焚寄セ漁ヲ爲ス。獲ル所ノ鱈ハ皆干鱈ト爲シテ釜山ニ出シ、日本商人ニ賣却ス。近年日本人ノ爰ニ鱈漁ヲ試ミタルモノアリシモ、歲偶々不漁ニシテ失敗ヲ致シ中廢セシヨリ、復タ再興スルモノナシト云フ。此ノ地ハ尙ホ黑潮暖流支脈ノ岸ニ近ヅクアリ、爲ニ鱈ノミナラズ、他ノ魚類モ敢テ少ナキニアラザルガ如シ。若シ慶尙道中釜山以北ニ於テ好漁場ヲ求メバ、此ノ地ヲ第一ニ推サザルヲ得ズ。而シテ鱈漁ニ於テハ釜山以南ニ在テハ此ノ右ニ出ヅル所ナカルベシ。要スルニ蔚山ハ漁業ニ多望ノ處ナリト謂フベシ。

江原道ニ入りテハ其ノ慶尙ニ接スル處ニ興海ノ江口浦アリ、夫ヨリ寧海ノ丑山浦、平海ノ「フ」ルリツポ、蔚珍ノ竹濱、三陟ノ臨院及ビ江陵、通川等亦皆鱈ノ漁場ナリト云フ。蓋シ江原道ハ一帶ノ山脈北ヨリ南ニ向ツテ走り、海ニ距ルコト甚ダ遠カラズシテ山勢雄峻ナリ。而シテ海岸

ハ獨リ江陵ハ大灣形ヲ爲シ、灣曲濶キニ過ギ、船ノ繫泊ニ便ナラザルガ如キモ、仍ホ大船ヲ容ルベシト雖モ、其他ニハ灣曲甚ダ少ナクシテ前ニ列記セル諸浦モ江陵ノ外ハ只ダ纒カニ小船ヲ容ルベク、大船ヲ泊ス可カラザルガ如シ。其ノ間ニ白砂平遠ノ地アリ、海底モ岸ヲ距ル二里乃至三里内外マデノ間ハ平淺ノ沙地ニシテ、所謂打タ瀬網漁業ノ如キハ最モ爲シ易キ處ナレドモ、是レヨリ遠キ海底ハ急ニ深サヲ増シ、五百尋、七百尋乃至千尋アリ、最モ深キ處ハ千四百尋ノ測器ヲ以テシテ終ヒニ底止スル所ヲ知ラザリシト云フ。元來江原道ノ對岸ナル本邦北海道及ビ兩羽ノ海ハ甚ダ遠淺ニシテ、岸ヲ踐ルコト十五、六里ナルモ仍ホ三、四十尋内外ニ過ギザル處ヲ多シトスレバ、朝鮮ニ於テモ亦然ルナラント豫想セシニ、今實驗スルニ前述ノ如ク正反對ナルニハ頗ル驚訝ヲ契セシ所ナリ。然レドモ深海ニハ又深海ニ應ゼル浮游魚類ノ漁スベキモノ少ナカラザルヲ信ズ。現ニ鱧ハ各海濱ニ群來シ、鯖ノ如キモ小形ナガラ時ニ及ンデハ大群ヲ爲シテ來ルコトアリ。鱒ハ夏中ハ間斷ナク在リテ其數實ニ莫大、捕リテ之レヲ如何トモスル能ハザルノ景況アリ。秋ニ及ベバ鱒亦大群ヲ爲シテ來ル、朝鮮土民ハ之レヲ漁セザルニハアラザルモ、恰モ兒戲ニ類セル漁法ニシテ、日本人ニ在テハ昨年元山居留人ノ中鱒漁ヲ試ミ、相應ニ捕獲アリテ稍ヤ利ヲ得タリト言フト雖モ、是レ固ヨリ試驗ニ過ギズ。鱧ハ二十四年ニハ日本人ノ漁業ヲナセルモノアリシモ、多クハ元山居留ノ貿易商人ガ近年貿易ノ萎靡振ハザルヨリ、傍ラ之レ

ヲ爲セシニ過ギザレバ、其ノ業モ不手馴ニテ爲ニ利ヲ見ルニ至ラズ。爾後追々廢業シ、今ハ唯ダ土民ノミ之レヲ漁スルノ舊ニ復セリト云フ。地勢前述ノ如クナレドモ、元來此ノ海ハ黑潮暖流ノ影響甚ダ窄マリ、春晚ヨリ秋末マデノ間、其ノ流域ヲ擴ムルモノ、如ク、是等魚類ノ群來モ亦之レニ伴フモノナレバ、漁業ハ冬季ニ至リ間斷セザルヲ得ズ。然レドモ此ノ一道ハ勿論慶尙道ニ於テモ釜山以北ハ島嶼ナク、岩礁ナク、潮流ノ急激ナルモノナケレバ、船ヲ行ルニハ極メテ安全ニシテ、且ツ容易ナル處トス。唯ダ夏期ニ於テ時々煙霧ノ四塞スルコトアリ、困シム所ハ止ダ是レノミ。然レドモ爰ニ予ガ疑ヒヲ存セザルヲ得ザルモノアリ、是レ他アシ、或ル漁人ノ說ニ此ノ海上ハ波浪高ク、其ノ力猛烈ニシテ漁船之レニ堪ユル能ハズ、乃チ出稼漁業者ノ少ナキ所以ナリト。又一方ニ於テ航海者ノ說ヲ聞クニ、此地夏日ト雖モ常ニ西北風ヲ吹キ送り、風候濫リニ變更スルコトナク、南風ノ如キハ殆ンド絶無ナリト、此ノ兩說ヲ玩味スルニ頗ル反對セルガ如キ感アリ。唯ダ漁人ガ所謂波浪猛烈ナリトスルモノ、其度果シテ那邊ニ在ルヤ、推測スルヲ得ズ。殊ニ今回ノ航海ハ風波極メテ靜穩ニシテ海面恰モ鏡ヲ拭ヘルガ如ク、乘客中婦女ト雖モ一人ノ船暈嘔吐セルモノ無カリシ程ナレバ、其ノ波浪ヲ起スニ當リテハ如何許ニマデ至ルベキヤ思想モ及ブ能ハザリキ。因テ惟フニ是等ノ邊ニ就テハ更ニ其ノ筋ノ技師ヲ派遣セラレ、海上ノ模様ハ勿論、其ノ水族ニ就テモ周到ニ調査シ、以テ漁業者ヲシテ憑據スル所ニ至ラ

シメンコトヲ希望スル所ナリ。

元山津ハ居留人ノ戸數百五十ニ滿タズ、商況亦近年沈頽セルヲ以テ、本邦ヨリ渡航スル者モ少ナク、居留地ニ於ケル魚介ノ需用ハ其ノ數知ルベキノミ。故ニ居留人中漁業ヲ専ラニスルハ船數唯ダ三隻アルノミ。是レスラ夏期ノミニシテ現今ハ其ノ漁船モ海岸堅氷ノ中ニ閉結セラレタルヲ見ル、朝鮮トノ通漁訂約成リテヨリ免許ヲ請願セシモノ二十三號ニ過ギズシテ、其ノ中二十八業ニ已ニ廢業シ免許證ヲ返還セリ。其ノ人ハ概ネ居留貿易商人ヲシテ爲サシメタルモノニシテ、前ニモ述ベタル如ク、皆江原道各濱ニ往キ鱈漁ヲ爲サシメ失敗セシ徒ナリトス。斯カル状態ナレバ就テ問フベキ漁業者ナク、躬親ヲ出テ探研セント欲スルモ、海岸氷結セルノミナラズ、乘ルベキ漁船モ乏シク、遺憾殊ニ甚ダシトス。然レドモ幸ヒニ昨年潜水漁業ヲ試ミタル長崎縣人中原文眞ト云フ者ノ雇ヒ來レル潜水夫ノ尙ホ滞在セルアリ、固ヨリ潜水夫ハ他ノ漁業者ト趣ヲ異ニスルモノナルヲ以テ要領ヲ得ザル點多カリシモ、海底ノ實況ニ於テハ稍ヤ詳カニスルヲ得タリ。其ノ言ニ曰ク、彼レ潜水者ハ主トシテ鮑及ビ海竄ヲ採ルヲ目的トスルモノナルニ、此邊ノ海ニハ「トコブシ」ハ僅カニ有レドモ鮑ハ一切ナシ、海竄ハ稍ヤ多ク、其ノ質ハ青色ノモノニシテ體甚ダ小サシ。之レヲ曾テ濟州ニテ捕獲セシモノニ比較スルニ、濟州ニテハ樽一挺ニテ海竄ノ數二百三十個位ヲ容レ、干揚ゲ十斤以上ヲ得シコトアレドモ、此ノ地ニテハ樽一挺ニ四百個許ヲ容レ、時トシテハ六百個ニモ及バザレバ樽ニ滿ザルコトアリ、其ノ干揚ゲ平均八斤位ニ過ギズ。其ノ海底ハ淺キハ三、四尋、深キハ二十二、三尋ニ及ビ、概ネ砂地ノ如クナレドモ、牡蠣、淡菜及ビ海膽ニテ海底ヲ充填セラレ、少シク手足ヲ慎マザレバ是等介類ノ爲ニ負傷スルコトアリ、又之レヲ除去シテ海鼠ヲ捕ラントスレバ、海水忽チ濁リテ數尺ノ外ヲモ辨ゼザルニ至ル、故ヲ以テ昨年ノ潜水試業ハ失敗ヲ致セリ。其ノ在ル所ノ魚ハ磯魚ニテハ唯ダ「メバル」アルノミ。他ハ實ニ寥寥タリ。沖魚ニハ鯛、鱧、鱈、鱈、鱈、鱈、鱈ヲ盛ンナリトス。又鱈、鯨、鱈ノ類モ少ナカラズ、蛤及ビ海扇ホマテガイモ少シハアリ、海草ハ若布ハ多ク、昆布ハ咸鏡道北青ノ沖合ニ豆大ノ島アリテ此邦ニ繁茂セルヲ見タレドモ、其他ニテハ目撃セズ。石花菜、海蘿ノ類ハ絶エテ見シコトナシト云ヘリ、是レ元山以北ノ實況ナリトス。

以上ノ所説ハ尙ホ居留商人ノ中ニ、三ノ稍ヤ海事ニ志アルモノ、説トニ依リ考フルニ、咸鏡道、江原道ノ二道ニ於ケル漁業上主要ノ目的トスベキモノハ五、六月頃ヨリハ、鱈、其ノ後ハ鯛、鱈、秋ニ入りテ鱈及ビ鱈、又其ノ前後ヲ通ズルハ鱧ヲ以テ最モ多利ナルモノトスベシ。然レバ凡ソ十月中乃至十一月中旬マデハ間斷ナク漁業ヲ營ムヲ得ベケレバ、漁者ノ手ヲ束ヌル日無カルベキガ、前者潜水者ノ説ニ據レバ、昨年ハ十一月四日以降ハ水溫俄カニ低下シ、潛衣ノ如キハ皆氷凍シテ到底業ヲ執リ難カリシト云ヘバ、此等ノ魚類モ其頃ヨリ翌年五月頃マデハ跡

ヲ海中ニ絶ツナラン。果シテ然リトスレバ冬季ハ爲スベキ漁事ナキカノ疑ヒヲ生ズベキモ、今實地ニ驗スルニ、元山灣ニハ永興ト稱スル大河及ビ德源、赤田ノ二水注入スルアリ、又近傍ニハ安邊河アリ、皆是レ鮭ノ溯上スル所ニシテ、朝鮮土民ハ唯ダ又ヲ以テ突キ捕ルノミニテ、尙ホ一日二、三千尾ノ漁獲アリト云フ。然ラバ本邦ノ精巧ナル漁具ヲ以テスレバ多利ヲ得ベキハ復タ疑ヒヲ容レズ。此地ノ鮭ハ實物ヲ驗スルニ小形ニシテ恰モ北海道根室ヨリ産出セルモノニ似タリ。曾テ京城ニ於テ鮭魚ト稱シ、鮭ヲ市ニ鬻ゲルモノアリ、產地ヲ問フニ皆咸鏡道ヨリ出ストノ答ヲ得タレバ、即チ此物ヲ京城ニ輸セシナラン。又其ノ卵ハ鮭魚卵ト稱シ、朝鮮人頗ル貴重セル所ニシテ、鮭魚ハ此地ノミナラズ是レヨリ以北ノ諸川皆多シト聞ク。學理上ニ於テモ亦然ラザルヲ得ザレバ盛シニ之レヲ捕獲セバ大ニ利益アルナラン。鮭ノ漁期ヲ過グレバ漸ク咸鏡道ノ特産トシテ著名ナル明太魚、即チ越後、佐渡等ニ所謂「スケトウ鱈」ノ期節トナリ、翌年二、三月ニ至ル。加之、前ニモ云ヘル如ク牡蠣、淡菜等ハ沿海到ル處ニ充填シ、殊ニ元山灣ノ如キハ殆ンド北海道ノ厚岸ニ次グリトモ稱スベキ程多ク産スルハ予ガ實際ニ目撃セル所ニシテ、之レヲ採リ清國貿易ニ供スベキ乾蠣ニ製スルノ一事ヲ以テスルモ、冬季ノ作業ハ十分ナルベシ。淡菜モ清國貿易ニ適スルモノニシテ、是レ亦製出スルニ材料餘リアリ。鱈モ亦甚ダ多ク、又此邊ノ河川ニハ氷魚ト稱スルモノアリ、土民氷ヲ穿チテ其ノ間隙ヨリ鈎ヲ下シテ漁ス。其物ヲ見ルニ、形ハ本邦ノ公魚ワカサギニ甚ダ相肖テ、味モ亦似タリト雖モ、詳カニ檢スレバ「サルモン」屬ノ如キ觀アリ。此等學術上ノ點ハ追テ調査スベシト雖モ、兎ニ角冬季漁人ガ手ヲ空ウセザルノ材料ト爲スニ足ル。其ノ他鯉モ亦之レアリ、是レニ由テ之レヲ觀レバ、本邦漁人ガ永ク此所ニ居留シテ業ヲ營マンニ、決シテ曠日ノ患ヒナカルベシ。唯ダ冬季ニ堪ユルノ一事ヲ要スルノ

ミ。

前ニ列舉スル魚類中、明太魚ハ朝鮮ニ於ケル著名ノ産ニシテ、年百萬圓ノ産額ナルベシトノ説モ聞キタルコトアリシニ、今元山津ニ於ケル輸出額ヲ調査スルニ、其ノ價格明治二十三年ヨリ二十五年マデ三ヶ年間ヲ平均スレバ、實ニ一ヶ年二十七萬六千四百八十九圓餘ナリ。此他ニ陸路京城ニ輸スベキモノアルモ、此ノ十分ノ二、三ニ過ギザルベシトノ説ナリ。其ノ名ノ著ハレタル割合ニハ少額ナルニ驚カザルヲ得ズ。尤モ此ノ平均ハ一昨年二十四年ノ不漁ナルニモ由レドモ、昨年ノ稍ヤ豊漁ト稱スルモ、三十四萬三千圓餘ニシテ、本年ニ持越スモノアルモ尙ホ四十萬圓ニ上ラザルベシ。而シテ其ノ需用ハ一ニ朝鮮内地ニノミアリテ、本邦ハ勿論清國ニモ全く不向キノ製法ナレバ、今ヨリ以往需用ノ増加スベキ見込ナキノミナラズ、近來釜山ニ於テハ朝鮮人ガ明太魚ヲ購買スルノ數漸ク減縮スルノ傾キアリ。其ノ原因ハ未ダ確説ヲ得ザレドモ、或ル一説ニハ近年慶尙、全羅二道ニ於テハ本邦出稼ノ漁人多ク、此等皆其漁獲物ヲ土民ニ賣却

スルヲ以テ、土民ハ其ノ新鮮美味ニシテ且ツ廉價ナル魚ヲ喰フヲ得ルガ爲メ、祝祭其他必需ノ場合ニ在テハ明太魚ヲ用ユルモ、元來澹泊無味ニシテ枯槁セルモノナレバ、自然ニ需用ヲ減ゼシナラント。此說或ハ幾カラシカ。兎ニ角、明太魚ハ本邦漁人ノ手ニテ捕獲ヲ試ミントセバ、前途需用ノ減縮スベキモノトノ慮ヲ抱キ、其ノ製法ニ於テ別ニ一ノ新機軸ヲ出シ、本邦内地カ或ハ支那ノ需用ニ供スベキ考案ナカルベカラズ。

明太魚、即チ「スケトウ鱈」ニ因ミ一ノ疑團ノ生ゼシモノアリ、是レ此ノ海中ニ眞鱈ノ在ルコトナシト云フニアリ。元來鱈ハ寒地ノ深海ニ沈栖スル性ヲ具フルモノニシテ、暖流ヲ逐フテ周回スルモノニアラズ。然ルニ此レヨリ遙カニ南ニシテ且ツ暖流ノ影響アル釜山ニ於テハ、現ニ鱈ノ栖息セルコトハ已ニ第一號報告中ニ述ブルガ如シ。又此地ト對セル本邦北陸地方ニモ鱈ノ漁獲アリ。北陸ノ地タル緯度ヨリスレバ此地ヨリモ稍ヤ南ニ位シ、尙ホ暖流支脈ノ注グアリ、是レニ由テ推ストキハ論理上此地ハ尤モ鱈ノ捕獲アルベキ筈ナルニ、絶エテ之レナシト謂フモノハ、予ガ甚ダ解セザル所ナリ。今若シ強ヒテ臆測スルトキハ、鱈ハ深海ニ在ルモノナルニ、此地ハ海岸ニ、三里ハ頗ル淺底ニシテ其ノ以外ハ急ニ深キ爲メ、鱈ハ其處ニ在リテ岸ニ近ヅカズ、土民ハ脆弱ノ船ヲ以テ二三里以外ノ深海マデ出漁スルコト能ハザルヨリ、之レヲ捕ラントナサズ、本邦漁業者ノ偶々此地ニ來ル者モ、多クハ山口縣、其他九州人ニシテ、元來鱈ノ何タルヲ知ラズ、殊ニ冬季ハ到ルモノ稀ナレバ、敢テ探究スルコトナク、遂ニ唯ダ漠然トシテ鱈ハ北海ニ産セザルモノトシテ看過セルニハアラザルカ。抑モ鱈ハ西洋諸國ニテハ漁業中ノ最漁業トモ稱スル程ニシテ、大ニ鱈ヲ貴重シ、需用甚ダ廣ク、又清國貿易ニモ供スベク、且ツ向來遠洋漁業ノ計劃上ニ就テ尤モ忽諸ニ附スベカラザルモノナレバ、他日技師ヲ派シ調査セラル、ノ機アラバ、此點ニ向テハ最モ注意ヲ要スベキ所ナリ。又咸鏡道ハ八道中殊ニ海岸線ノ長キ所ニシテ、前述ノ各魚類ハ其ノ一道ノミナラズ、江原道及ビ慶尙道ノ最北部マデ通在スルモノ多シ。而シテ其地僻陋、人民稀疎ナレバ、本邦漁人爰ニ出稼ギスルモ、其ノ漁獲物ヲ土民ニ賣却セントスルモ多クノ購買者ナカルベク、又外國輸出品ト爲シ、或ハ本邦内地ニ送ラントスルニハ、一タビ開港場へ出サザルヲ得ズ。然ルニ釜山以北ハ元山通航ノ定期郵船アル外ハ、他ニ沿海各地渡航ノ便ナク、若シ其漁船ヲ以テ直チニ開港場ニ積ミ送ラントスレバ、漁業ニ日ヲ曠フスルノ恐レアリ。朝鮮船ヲ雇ハンカ、脆弱ニシテ十中二、三ハ破船スルカ又ハ貨物ヲ損スルノ慮アリ。是レ從來漁業者ノ爲メ前進ノ路ヲ遮斷セラレタル一大原因ナリ。然ルニ釜山港ニ於テ富有ノ名アル商人大池忠助等ノ發意ニテ、元山津以北、永興、咸興、北青、長沙地、端川、吉州ヲ經テ明川ニ抵ル小汽船ノ渡航ヲ開カントシ、今ヤ朝鮮政府ノ允許ヲ請願中ナレバ、本年夏期ヨリ開業スベキ心算ナリト云ヘリ。是レ其旨意近來魯國ニ於テ浦潮斯德ヨリ潜カニ咸鏡道各地ニ

通船ヲ爲シ、密貿易ヲ試ムルモノアリ。爲ニ本邦商人ニ大ナル妨碍ヲ與フルヲ以テ、之レヲ防ガントスルニ在リテ、必ズシモ漁業上ノ爲ニセシニアラズト雖モ、抑モ此ノ舉タル頗ル賛成スベキ事ニシテ、其ノ業ノ永續ヲ望マザルヲ得ズ。而シテ此ノ舉能ク永續スルニ於テハ、漁業者ガ其ノ漁獲物ヲ開港場ニ送ルノ路初メテ開ケ、爲ニ着々其業ヲ進ムルコトヲ得ベキナリ。

爰ニ元山津居留ノ商人間ニ於テ最モ厭フベキ弊害ヲ生ゼリ。即チ江原道ヨリ産出スル干鰯ニ向ヒ購買ノ競争ヲ爲スコト是レナリ。従前ハ土民其ノ産出セル干鰯ヲ以テ元山ニ送り、日本商人ノ購買ヲ請ヒタルニ依リ、居留商人ハ坐ナガラ價格ヲ制スルコトヲ得タルニ、近來貿易ノ振ハザルヨリ起因シ、各自産出地ニ向テ出買ヲ始メ競フテ高價ニ買入ル、コト、ナリ、其極今ヤ地元ノ買價ト大阪市場ノ相場ト敢テ差異ナク、之レヲ競買スル所ノ商人ニ於テハ計劃上利スベキ所ナク、唯ダ其ノ斤量ニ於テ土民ヲ瞞着シ、是レニ由テ利ヲ見ルガ如キ實況ナリト云フ。斯ノ如キハ速カニ釐革セザル可カラズ。宜シク組合若クハ會社等ノ組織ヲ以テ規約ヲ嚴ニシ、商業ノ永續ヲ希圖スベキナリ。又釜山港へ向ケ朝鮮船ニテ積ミ送ル干鰯ハ、中途ニテ船ヲ岸ニ寄セ貨物中ニ砂ヲ混ジ、潮水ヲ汲ンデ灌キ掛クルモノアルヲ屢々目撃セリ。聞ク所ニ據レバ朝鮮人ガ干鰯ヲ製スルニハ、皆山野ノ莎草上ニ撒布シ、乾燥スルヲ習慣トスルヲ以テ、砂ノ混ズルナク、其品佳良ナルモ、斯ク中途ニテ惡計ヲ施スガ爲メ再び手入ヲ爲サレバ本邦ニ輸送スル

コト能ハズ、然ラザレバ腐敗スルニ至ルト云フ。此ノ惡計タル根元朝鮮人ガ自ラ造意セルニアラスシテ、居留日本人中ノ一、二ノ奸商此ノ計ヲ爲セシヨリ、終ヒニ朝鮮人ニモ傳播セルモノナリト云ヘリ。毎々ナガラ覺エズ人ヲシテ嘆聲ヲ發セシム。是レ亦宜シク取締方法ヲ設ケ、居留ノ商人ノ團結ヲ以テ斯カル惡品ハ買入ヲ爲サルカ、若クハ非常ニ價ヲ下シ、其ノ精品ニ向テハ拾當ノ價ヲ與へ、玉石混淆セシムルコトナク、以テ此弊ヲ杜絶スルノ策ヲ講ズベキナリ。

釜山以北、江原、咸鏡ニ於テ鯨族ニ富メリトハ久シク耳ニ熟スル所ニシテ、學理上ニ於テモ亦然ラザルヲ得ズ。故ニ今回ハ實地ニ其ノ狀況ヲ目撃シ、併セテ其ノ鯨ハ如何ナル種類ナリヤヲ確カメント欲シ、船ノ進行中晝間ハ須臾モ甲板ヲ下ラズシテ凝望セシモ、不幸ニシテ往路ハ一頭ノ鯨ヲモ見ザリキ。船長曰ク、前回ノ航路ニハ數十ノ鯨族群ヲ爲シ噴潮スルヲ見ルコト屢屢ナリシモ、職業異ナレバ種類ヲ識別スルコトヲ得ザリシ。而シテ今回ノ如キ絶エテ鯨ヲ見ザルハ既往ニ稀レナル所ナリト。予歸路ニ於テモ亦頗ル注目セシガ、江原道ノ中部ニ當ル沖合ニ於テ纔カニ一群ノ鯨ノ噴潮ヲ望メリ。噴潮ノ狀ヲ以テスレバ座頭鯨ナラント思ハレタリ。蓋シ鯨族ハ風波稍ヤ強キ時ニ於テ出沒スルヲ見ルコト多キモノナルニ、今回ノ航路平靜ニ過ギタルモ亦之レニ逢着セザリシ一因ナルベシト雖モ、或ハ南行スベキ鯨ハ已ニ去リ、而シテ未ダ北行シ返ヘルノ時期ニ及バザル故ナランモ知ル可カラズ。此ノ海ノ鯨族ノ多キコトハ獨リ船長ノ言

ノ證スベキノミナラズ、衆口一轍ニ出ヅルヲ以テ見レバ、決シテ妄言ナラザルヲ信ズ。唯ダ鯨ハ種類ノ如何ニ依リ價格ニ大ナル差異アルモノナレバ、希クハ其筋ノ技師ヲ派シ再調査アランコトヲ、又朝鮮沿海ニ於ケル捕鯨ハ通漁訂約ニ據レバ、朝鮮政府ノ特許ヲ得ザルベカラズ、然ルニ在元山領事代理官本書記生ノ說ニ、曾テ朝鮮ノ該府使ト談ジ、捕鯨ノ事ニ及ビタルニ、朝鮮ニハ未ダ鯨ヲ捕フルモノナシ、故ニ日本人之レヲ捕リ、相當ノ納稅スルニ於テハ、朝鮮政府ノ益ニシテ、日本人モ亦益アルベケレバ、之レヲ爲サンコトヲ請フモノアラバ、何時ニテモ特許スベシト答ヘタリトノ事ナリ。交渉常ナキ朝鮮官吏ノ言ナレバ、永ク恃ムニ足ラズト雖モ、要スルニ捕鯨ノ特許ヲ得ンコトハ敢ヘテ難事ニアラザルガ如シ。

却說、咸鏡道ニ於ケル人情ノ一斑ヲ聞クニ、之レヲ慶尙、全羅等ニ比スレバ概シテ稍ヤ慄悍ニ近キモ、頗ル淳樸ノ風アリテ亦固陋ナルヲ免カレズ、故ニ外國人ヲ嫌忌スルガ如キコトナキニアラザルモ、亦甚シク妨グヲ爲スニ至ラズ。飲水ヲ汲ム等ニ於テハ未ダ拒ミシモノアラズ、却テ普通人民ヨリモ下等ノ官吏等ガ、人民ヲ煽動シテ妨害ヲ爲スモノ往々ニシテ之レアリト雖モ、是ヲ以テ例ノ聊カナル苞苴ヲ以テ慰藉スルコトヲ得ベキガ如シ。唯ダ本邦漁人等ガ袒裼裸程等ノ醜態ヲ露ハスヲ憎ムコトハ慶尙、全羅ヨリモ更ニ甚シキガ如シト云フ。惟フニ咸鏡、江原方面ハ本邦漁人ノ未ダ多ク到ラザル所ナレバ、今後漁業ヲ此所ニ擴メンニハ其ノ初發ニ於テ能ク其ノ方法ヲ設ケ、彼等土民ガ厭フ所ノモノハ成ルベク避ケ、以テ爭鬪苦情ヲ未發ニ豫防セシコトヲ務ムベキモノナラン。

今前述ノ數項中、目下最モ多利ナルベキモノヲ擧ゲレバ、鱈、鱧、鱖、鱒、鱒、鱒等ヲ以テ漁業上ノ主要品トスベク、自餘ハ其ノ漁期間ヲ補充シ、又ハ向來ニ興起スベキ漁利トス。要スルニ咸鏡、江原二道ハ永遠ニ望ミヲ屬スベキ地ト稱スルヲ得ベシ。

明治二十六年二月九日

朝鮮國釜山ニ於テ

關 澤 明 清

陸奥外務大臣ヨリ大石辨理公使宛私信

拜啓陳者防殺事件談判之成行及ビ今後之ニ對スル方策答何之義ニ付、去ル四日及ビ本日電信ヲ以テ御具陳之趣致閱悉候。朝鮮政府ニ於テ今日マデ已ニ幾年間、牽纏致シ來リ居リ候本件ヲ、尙ホ此上何時マデ其義務ヲ避ケ、事ヲ左右ニ托シテ緩漫遷延致候以上ハ、何トカ之レニ對スル新手段ヲ執ラザルベカラザル義ニハ有之候ヘドモ、去リ迪、今貴官ヨリ御申出ノ方策ヲ其儘實行セントスルトキハ、事體頗ル重大ニシテ、殊ニ第三ノ方策ノ如キニ至テハ、動モスレバ天津條約ニ牴觸スルノ虞レモ有之候ニ付、到底之レヲ實行スルニ當リテハ其筋ニ豫メ閣議ヲ盡シ、又上裁ヲ經ザルヲ得ザル事柄ニ付、本大臣ノ獨斷ニテ可否ノ決難申進義ナルヲ以テ、追而何等ノ訓令ニ及ブマデハ、別ニ何等ノ處置ヲ不被執様去ル四日電信ヲ以テ申進置候次第ニ有之候。左ラバトテ事勢已ニ此ニ及ビ候上ハ、貴官ノ立場ヨリシテハ何トカ一條ノ新方針ヲ執ラザレバ行懸上困難ヲ感ゼラル、事可有之、又朝鮮政府ニ於テ頻リニ其口氣ヲ一變シテ強情ニ我が要求

ニ應ゼザリシハ必ラズシモ他ニ之レヲ教唆慫慂スルモノ有之候半ト被存候。然ルニ過日書信ヲ以テ申進候如ク、過般前任清國公使李經方ヨリ、在天津荒川副領事ニ面話致候次第モ有之、其後又本大臣ヘモ同氏ヨリ特ニ私書ヲ送リテ貴官ト袁世凱ト必ラズ互ニ相協和スルトコロアルベシト申來リ候行懸モ有之候ニ付、此際寧ロ本件ノ顛末ヲ貴官ヨリ明ラサマニ袁世凱ニ打明ケ、同氏ノ助力ヲ藉リ、朝鮮政府ニ向テ迅速ニ本件ヲ完結スルトコトヲ爲勸候モ一手段ニ可有之ト存候。此事ハ昨日伊藤伯ヘハ内議ニ及ビ、同伯モ同意ヲ表シ居候ヘドモ、彌ヨ此手段ヲ決行スルニ至テハ、今一度閣議ヲ可經筋ニ有之候ニ付、何レ後便ニテ貴官ヘ何等ノ訓令ニ及ブコトニ相成ト存候。廟議ノ模貌ニ依リテハ先ヅ此ノ一手段ヲ試ミルコトニ一決致候哉モ難計ニ付、貴官ニハ前信ノ行懸ヲ逐テ、此際何事ヲモ云ハズシテ一層袁氏トノ交際ヲ親密ニナシ被居候様致度候。彌ヨ此ノ手段ヲ實行スル曉ニ及ンデ、袁氏モ我ノ請ヒヲ容レ、爲ニ朝鮮政府ニ説キ勸ムルトコロアリテ本件ノ結局ヲ見ルニ至レバ最上ノ都合、又朝鮮政府ニ於テ袁氏ノ言ヲ用ヒズ、其ノ居中ノ勞ヲシテ無効ニ歸セシムルトキハ、袁氏ニ於テモ同政府ニ對シ惡感情ヲ抱クニ至ルベク、左スレバ朝鮮政府ハ日、支兩國ニ對シ惡感情ヲ與フルノ結果トナリ、後日本件ニ關スル我が政府ノ行爲上、幾分カ清國トノ葛藤ヲ防ギ候事モ可有之、故ニ若シ我が政府ガ前述ノ手段ヲ執ルコトニ決定シ、其旨本大臣ヨリ訓令ニ及ビ候時ハ、貴官ハ袁氏ヲシテ我が好侶タルノ地位

ニ立タシメ候様十分御盡力有之度、右廟議決定ノ事ニハ無之候ヘドモ、豫メ貴官ノ御心得マデ申進置候。敬具

明治二十六年四月六日

陸 奥 宗 光

在 朝 鮮

大 石 辨 理 公 使 殿

防穀令問題ニ付大石公使ノ報告及ビ 外務大臣提出閣議案並ニ訓令案

附大石公使電報

防穀損害賠償事件ニ付テハ、大石辨理公使着任以來前任公使梶山鼎介ノ後ヲ承ケ、引續キ朝鮮統理衙門ニ向テ談判ヲ重ネ居候處、本月四日同公使ヨリ左ノ通り電報有之候。

防穀償金事件ノ完結ニ關シ、過ル三十日間強硬ナル談判ヲ爲シタルニモ拘ラズ、趙督辦ハ已ニ口頭ヲ以テ協議決定シタルトコロニ違反シ、去ル三月十日附書信ニ陳述シタル如ク、先方ガ一タビ撤回シタル書柬ヲ三回マデ送付セリ。尤モ本官ハ其ノ都度之レヲ拒却シタリ。又督辦ハ其他種々ノ談判事件ニ關シ、決シテ公然ノ答辯ヲ與ヘズ、且ツ相當ノ處分ヲ施サズ、加之、督辦

ハ無責任ニシテ且ツ無禮ナル語ヲ用ヒ、就中本官ガ右ノ書柬ニ公然ノ回答ヲ與フルマデハ、決シテ本官ト面談セザル旨ヲ通知セリ。本官ハ只管平和ノ結局ニ達センガ爲メ、今日マデ忍耐ヲ極メテ有ラユル手段ヲ試ミタレドモ、督辦ノ書柬ニ因テ其開陳スル所ハ皆ナ口實タルニ過ギズシテ、其ノ本意ハ本件ヲ未定ノ儘捨置カントスルニ外ナラザルコトヲ測知セリ。本官ハ督辦ノ斯カル行爲ハ假令兩國ノ和親ヲ破ルモノトセザルモ、我國並ニ我ガ國民ノ名譽ニ對シ、容易ナラザル侮辱ヲ加フルモノナリト思惟スルガ故ニ、彼ノ政府ニ對シテ下ニ記スル處ノ手段ヲ施サシコトヲ希望ス。即チ（第一）彼ノ國王殿下ニ謁見シテ七日間ニ其政府ノ決答ヲ得ルヲ要スルコト。（第二）相當ノ時日内ニ謁見ヲ許サズ、又ハ一週間ヲ經過スルモ右決答ヲ與ヘザルトキハ、本官ヲ召還セラル、コト。（第三）必要ノ場合ニ於テ仁川及ビ釜山ノ税關ヲ占領センガ爲メ、至急ニ右兩港ヘ軍艦ヲ派遣セラル、コト、電報ヲ以テ訓令アラシコトヲ乞フ。

斯ク朝鮮政府ニ於テ今日マデ已ニ幾年ノ間牽纏致居候本件ヲ、尙ホ此上何時マデモ事ヲ左右ニ托シテ其ノ義務ヲ果スコトヲ遷延致候以上ハ、何トカ之レニ對シテ新手段ヲ執ラザルヲ得ザル義ニハ有之候ヘドモ、去リ迪、今直チニ同公使ヨリ申出候方策ヲ實行セントスルトキハ、事體頗ル重大ニシテ、其ノ第三策ノ如キハ動モスレバ天津條約ニ牴觸ヲ來スノ虞レモ有之候。然

ルニ前任清國公使李經方ハ、東京駐在ノ時ヨリ頻リニ日清連合シテ朝鮮ヲ誘導スルノ必要ヲ説キ居リシノミナラズ、近頃在天津荒川副領事ニ向テ、日、清、韓三國ノ協同セザルベカラザル所見ヲ述べ、彼方ヨリモ袁世凱ヘ大石公使ト協和スベキ旨ヲ可申送ニ付、宗光ヨリモ大石公使ヘ其ノ意思ヲ通ジ置キ吳レ度旨面話セシコトモ有之、其ノ後又李氏ヨリ特ニ宗光ヘ私書ヲ送リテ、大石公使ト袁世凱ト必ラズ互ニ相ヒ妥協ナルベント申來リ居リ候行懸モ有之候ニ付、此際一ノ手段トシテ大石公使ニ訓令シ、同公使ヲシテ本件ノ顛末ヲ洩ラサズ袁世凱ニ打明カサシメ、因テ以テ同氏ノ助力ヲ藉リ、朝鮮政府ニ向テ具サニ利害ノ在ルトコロヲ陳ジテ迅速ニ本件ヲ完結スルノ是ナルコトヲ勸メサセシムルヤウ相試ミ度、然リ而シテ若シ袁氏ニシテ大石公使ノ求メニ應ジ、朝鮮政府ニ説キ勸ムルトコロアリテ、本件ノ結局ヲ見ルニ至レバ、是レ誠ニ最上ノ都合ニ可有之、又朝鮮政府ニ於テ袁氏ノ言ヲモ容レズ、其ノ居中調停ノ勞ヲ空シクセシムルトキハ、袁氏ニ於テモ同政府ニ對シ惡感情ヲ抱クニ至ルベク、左スレバ朝鮮政府ハ日、清兩國ニ對シ惡感情ヲ與ヘシ結果トナリ、多少清國ト葛藤ヲ防グニ足ル都合モ可有之、又萬一袁氏ニ於テ大石公使ノ求メヲ拒絕スルコトアルトスルモ、詰リ今日ノ地歩ニ立チ歸ヘルマデノ事ニ有之候。就テハ別紙ノ通り大石公使ヘ訓令致度ト存候間、閣僚諸公ノ御決議ヲ仰ギ度、然シテ袁氏ニ於テ若シ我ガ求メニ應ジ、朝鮮政府ニ向テ諄々勸告致候ハ、同政府ニ於テハ多分其ノ言ヲ

聽納可致トハ信ジ候ヘドモ、若シ彼ノ政府ニ於テ依然頑乎トシテ前議ヲ主張致候カ、又ハ袁氏ニ於テ初メヨリ我ガ求メニ應ゼザル場合ニ於テハ、重ネテ閣議ヲ乞ヒ、將來ノ措置ヲ定ムベク、此段豫メ閣僚諸公ノ承允ヲ乞ヒ置キ候。

大石辨理公使ヘノ訓令案

防殺事件ニ關スル談判ノ成リ行き及ビ今後之レニ對スル方策如何ノ義ニ付、電信ヲ以テ御具陳ノ趣致閱悉候。朝鮮政府ニ於テ今日ニ至ルマデ累年ノ間、事ヲ左右ニ託シテ之レヲ緩漫ニ附シ置キタルニ拘ラズ、尙ホ此ノ上ニモ趨趨逡巡シテ其ノ義務ヲ果スコトヲ避ケントスルニ於テハ、兩國間ニ存續スル友誼ヲ害シ、感情ヲ惡クシ、實際上百事澁滯ヲ來スノ虞レナキヲ保シ難シ、故ニ此際可及丈事端ノ區域ヲ狹小ニシテ、速カニ穩當ナル結局ニ達スルヲ勗ムルハ實ニ日韓兩國ノ利益タルノミナラズ、亦タ東亞全局ノ治安ノ爲ニモ得策ト存候。然ルニ前任清國公使李經方氏、本邦駐在ノ時ヨリ毎ニ本大臣ニ向ヒ日、清連合シテ朝鮮誘導ノ必要ヲ説キ居リシノミナラズ、前便申進メ候通り、近頃天津駐在帝國副領事荒川已次ニ向テ、貴官ト袁世凱氏トノ事ニ付本大臣ヘ傳言モ有之、且ツ其後李氏ヨリ特ニ本大臣ヘ私書ヲ寄セ、貴官ト袁氏トハ必ラ

ズ互ニ相ヒ妥協ナルベキテ信ズト申來リ居候義モ有之候ニ付、貴官ニハ此際袁氏ニ向テ具サニ本件ノ顛末ヲ叙述シ、本件結局ノ如何ニ因テハ繼イデ發起スベキ利害得失ヲ詳陳シ、同氏ノ助力ヲ藉リ、朝鮮政府ヲシテ本件ヲ迅速ニ妥結セシムルヤウ周旋アランコトヲ懇談スベシ。

此ノ訓令ノ趣旨ハ伊藤伯ヨリ李中堂ヘ、本大臣ヨリハ李經方氏ヘ申遣シ置キタルコトニ有之候。

右及訓令候也。

四月六日接電報

四月四日附電報正ニ領承ス。督辦ハ其後從前ヨリ一層無責任ニシテ、無禮ナル二通ノ書柬ヲ寄送セリ。其ノ大意ハ朝鮮政府ハ決シテ條約ノ明文ニ違背シタルモノニ非ザレバ、更ニ責任ナシト雖モ、兩國ノ和親ヲ維持スル爲メ、且ツ日本商人ヘノ惠與金トシテ五萬一千圓ノ金額ヲ支出スベシト云フニ在リ。實ニ同督辦ノ主意ハ朝鮮政府ヲシテ全ク其ノ責任ヲ免カレシメ、且ツ目下談判中並ニ將來談判スベキ一切ノ事件ニ關シ、口頭ニテモ書面ニテモ本官トノ交渉ヲ絶タントスルニ在リ。彼ノ政府ノ行爲ハ右ノ如ク本官ヲシテ當國在留本邦人ニ對シ、必要ノ場合ニテモ相當ノ保護ヲ與ヘシメズ、且ツ兩國間ノ交際ヲ絶タントスルモノナレバ、此際速カニ果斷

ノ處分ヲ施スハ至極必要ナリ。然ラザレバ單ニ我國ノ名譽上ニ塗抹ス可ラザル汚點ヲ留ムルノミナラズ、又タ目下談判中ノ事件ヲ決定スル最良ノ機會ヲ失フ可シ。更ニ何分ノ訓令ヲ待ツ。

元山防穀損害要償事件

本件ニ關シテハ過般御訓令ノ趣旨ヲ奉ジ、趙督辨トノ間ニ本件ニ係ハル一切ノ往復ヲ姑ク相停メ、切ニ御訓令相待居候際、去ル十七日帝國軍艦八重山號入港、翌十八日松岡參事官入京、携帶ノ御訓令ニ接到シ、並ニ同官ヘノ御口達等一々無滯領承致候。右御訓示ニ對シテハ多少拙官ノ意見モ有之候ヘドモ、此ノ期ハ全ク之レヲ置キ、御訓示ノ通り一々服膺シ充分結果ヲ收ムベキ目的ヲ以テ着々從事可致候。然ル上委細ノ模様ハ其ノ都度申報可致候間右様御了承相成度候。將又當國政府部内ニ於ケル今日マデノ模様ノ探問致候處、趙督辨ハ本月十二、三日ノ頃統理衙門ノ高等官ヲ會合シ、賠償額ニ關スル協議ヲ開キ、結局前督辨閔種默氏ガ擬定シ、償還ヲ明言シタル金六萬餘圓ノ額ハ何處マデモ朝鮮政府ニ於テ負擔セザルベカラズトノ事ニ議論一致イタル由ニ有之候。又タ本件起初ヨリ暗々裡ニ運動ヲ試ミ、非賠償論ヲ主唱シタル閔應植氏ハ此ノ機ニ投ジテ大ニ趙督辨ト結托シ、同氏ガ主張スル金額四萬餘圓ヲ維持シ、設ヘ我ト衝

突スルニ至ルモ勉メテ此額ヲ動かサザルベシトノ手段ヲ執リ、且ツ趙督辦ノ地位ヲ鞏固ナラシメント計リ居候様子相見え申候。今同氏ガ本件ニ關シ王妃ニ呈シタル建白書、並ニ國王ニ呈シタル防禦策ナルモノ入手致候間貴覽ニ供シ候。尤モ右防禦策ト題スル文中、朝、清結約云々ト有之、果シテ何等ノ根據可有之ヤ否ヤ疑ハシク存候。目下事實探索中ニ有之候間追テ何分ノ儀判然可致候、此段報告旁申進候也。

明治二十六年四月二十日

辨理公使 大石正巳

外務大臣 陸奥宗光殿

(譯文)

元山防穀損害ノ未ダ賠償ニ至ラザルヲ以テ、聖慮ヲ煩ハサル、臣等同心會議ノ時常ニ決定スルコト能ハザリシ折リシモ、督辦ニ於テ一、二ヶ處ニ夜往シテ其策略ヲ秘密ニ傳來シ、終リニ彼レヲシテ忿心ヲ發セシムルノ手段ヲ施シ、彼ヨリ先ンジテ自カラ事端ヲ起シ、軍艦ヲ率キ來ツテ爭辨ヲ爲サントスルニ於テハ、主客ノ勢ヒ防禦ノ策ハ向日錄奏進達セシ如ク、前後ノ需費ト損害ノ賠償ハ敗戰國ニ於テ負擔償辨スベキハ當然ノ法ニシテ、之レ英國ガ各國ノ賠償ニ依テ土地ヲ勒奪シ富國強兵ヲ爲ス所以ノモノナリ。秋毫ト雖モ聖慮ヲ惱マサル、コトナク、督辦ニ一切ノ外權ヲ專任セラル、ニ於テハ、國家自カラ泰平ナルベシ。

中宮殿下二十三日書奏

中宮殿下 答書

所奏眞實然ラン、然レドモ卿ノ奏言ノ如クセバ甚ダ奇恠ニシテ、極メテ危殆ナル事勢ト云ハザルベカラズ。外論ヲ偵聽シ時勢ヲ尋察スレバ、日本政府ハ敢テ我國ヲ薄待シ、敢テ凌冒スルノ意ナシト云フ。朝、日兩國ハ唇齒ノ國ニシテ格外ニ友誼ヲ厚クセザルベカラザル筈ナルニ、卿ノ所奏此ノ如クナルニ於テハ、安ンゾ知ラン、却テ兩國ノ和誼ヲ損傷セントスル奸臣ノ伏スルコトナキヲ、充分注意ヲ加へ、其内實ヲ仔細ニ探テ後奏言センコトヲ望ム。

二十四日答書下シタマハル。

臣於所奏防禦之策、非一朝一夕之所劃、且非小臣之獨見也、伏乞採納焉。

兵法云、彼雖強而我雖弱、自有主客之勢、我國雖扁小、昔者唐太宗損目、壬辰之亂倭兵六百萬、不能保一甲、外寇之敗歸、十番八九、是乃無他、山川險峻、人多忠勇、可以以用奇兵之地、且以形勢言之、長待精兵二萬餘名、商隊二十餘萬、僧軍數三萬、民兵數百萬、馬軍鐵騎五千餘名、將士三千餘員、足可爲防禦外寇、而水軍雖姑未備、中國鏡甲戰艦數十隻、浮在海上、朝電夕至、已定密約、辨無水陸之虞、且以中原之形勢言之、幅原廣大國富兵強、以若俄國之強、於天下不敢輕視、而朝清兩國結約兄弟、共守信義、至三百年之久、便同一室、則豈無忌器之嫌、且以天下大勢言之、舉兵爭詰、各自有名、會同相通、受諾可否、然後始乃動兵、日本政府雖有犯境之意、不敢容易也、北道賠償、雖不報給、必無兵爭之慮、且報償之與否、在於兩國之強弱云、故督辦之近日處事、萬々穩當也、外議如是、則臣等敢以奏達事理、伏乞垂察焉。

二月二十七日錄上

東學黨動靜

明治二十六年四月二十五日接受セル電報ニ依レバ、東學黨事件ハ去ル土曜日、即チ暴發ノ恐れアリシ日ニ於テモ至極平穩ナリシ、目下同伴ニ付最早何等ノ氣遣ヒナシ。

前信報告後、該宗徒ノ舉動ハ至極靜謐ニ有之、只ダ該徒ニ反對スル儒學派ノモノ過般來切リニ駁撃ヲ試ミ、連合シテ建白書ヲ提出スルモノナド續々有之、之レガ爲メ寧ロ東學黨ト云ハンヨリ此等反動黨ノ運動ニ連レ、却テ京城ノ人心安穩ナラザル傾キニ有之、幾多ノ流言臆說此間ニ簇出致シ候ヘドモ、必竟スルニ其根由トモ云フベキ東學派ノ舉動ハ何等滋事ノ兆候無之ヲ視レバ、不日人心鎮定ニ歸スベキ事ト存候。本月十四日國王殿下ノ勅諭一タビ下リ、内外官廳ヲシテ本學首領ヲ捕獲シ嚴刑ニ處シ、殘黨ハ曉諭解散セシムベシトノ命アリシ以來、左右捕廳ハ勿論、各地方官モ銳意之レガ拿獲ニ從事致居候。本月十七日何モノ、所爲トモ知レズ、我領事

館ノ前壁ニ別紙ノ如キ貼紙ヲ爲シタルモノ有之、右ハ全ク一時ノ惡戯ニ過ギズ候ヘドモ、此際此ノ如キ事アリテハ我居留者ノ安堵ヲ缺キ、營業上妨害不少候ニ付、嚴重ノ取調方、一面ハ書東ヲ以テ統理衙門ニ申込ミ、一面ハ國分書記生ヲ左捕廳ニ派シ、大將申正熙氏ニ直接面談爲致候處、折柄申大將ハ東學黨ノ就縛者ニ對シ審問ヲ開キタル場合ニテ、同書記生ガ其席ニ於テ聽レタル顛末ハ左ノ如クニ有之候。

申曰ク、汝等宗徒數萬人、或ハ云フ數千人、京城ニ商會シ疏願セントノ目論見ヲナスト聞ク、

京城豈ニ一兵ノ能ク汝等ニ當ルモノナシトセンヤ、汝等何ゾ思ハザルノ甚シキ。

東曰ク、決シテ此ノ如キ無謀ノ舉動ヲ爲スノ意ナシ、或ハ何カノ誤傳ナラン。云々

申曰ク、汝ノ巨魁全州ニアルモノヲ呼ビ寄セ得ベキヤ、否。

東曰ク、吾等一度電報ヲ全羅道全州ニ致シ、上京スベシト云ハバ渠レ必ラズ直ニ來京スベシ、決シテ回避セザルナリ。

申曰ク、然ラバ左様致スベシ。去リ乍ラ汝ノ言ノ如ク若シ巨魁ノ來京セザルニ於テハ汝ノ首級ニツナシ、必ラズ身首所ヲ異ニセン。

東曰ク、勿論吾ガ言語若シ違ハバ斬首ニ甘ンゼンノミ。

右ニテ申大將ノ審問ハ一ト先ツ終リ、該宗徒ハ捕卒ニ引立テラレ獄舎ニ繋ガレタリ。是ニ於

テ同書記生ハ貼紙ノ寫シヲ出シ、申大將ニ示シタルニ、同氏ハ捕校ヲ呼ビテ之レヲ示シ、並ニ當日日本館當直巡捕ハ何故ニ此ノ惡戯者ヲ捕獲スル能ハザリシヤヲ責問セシム（東學派上疏ノ舉アリテ以來人心不穩ノ傾向アルヲ以テ、同氏ハ注意ノ爲メ當夜我公使館附近ニハ巡捕三名ヲシテ間斷ナク譏察セシメタリトノ事）尙ホ同氏ガ同書記生ノ問ニ答ヘタル所ニ據レバ、京城内外トモ多少東學派ノ留宿スルモノアリ、或ハ京城住人ニシテ東學派アレドモ、孰レモ其進退靜穩ニシテ敢テ回避スル如キ舉動無之、今就縛者ノ言ニ據レバ官署ノ尋問ノ筋アラバ何時ニテモ出頭スベシ。敢テ巡捕ヲ派スルヲ煩サズト云フ。其主張スル說モ二派ニ岐レ、一說ニハ詳倭ヲ逐斥スベシト云々シ、一說ニハ地方政事ヲ改良スベシト云々スルガ如キ、所謂一說ハ言語過激ニ涉リ、一說ハ吾々が善治者ヲ求ムルノミ、他外國人ト何ゾ涉ラント云フニアリト。又タ其首領ト覺シキモノハ全羅道ニ三、四名アリトノ事、要スルニ目下ノ有様ニテハ渠等ハ暴行ニ訴ヘ其希望ヲ果サントマデノ勇氣無之、去レバ自カラ鎮靜ニ歸スベシ。何卒此際在京日本居留人等モ猥リニ雜說ニ動カサレザル様致度シ云々トノ事ニ有之タル由、並ニ同大將ハ右張紙以來一層嚴密ニ巡捕ヲシテ我が公館附近ヲ巡行セシメ、張紙ノ當日ニ於ケル當直捕卒三名ハ不行届ノ廉ヲ以テ棍治各二十二處シタリト傳聞致候。此頃我が領事館ヨリ城外各所並ニ全羅、忠清ニ派シタル探偵者ノ報告ニ據レバ、孰レモ當地ニ風説スル如キ事實無之シテ、至極平穩ナリトノ事ニ

有之候。尤モ當地ノ人心ハ風聲鶴唳、何事モ其說針小棒大ノ觀アリテ、多ク事實逕庭候事有勝ニ有之、殊ニ内部ノ兵力微弱ナル爲メ何カ些少ノ出來事アルモ、政府部内ハ蒼皇警備ヲ整フルガ如キ事往々有之、現ニ這回ノ出來事以來東西北門外ニ各三百名ノ兵丁ヲ繰出シ、日々練兵ヲ爲スガ如キ、國王行幸ヲ延期シタルガ如キ、王宮附近ニ於テ發火演習ヲ爲シタル如キ、一々亦タ人心ヲシテ不安ヲ抱カシメタル一原因ト被存候。我ガ商估モ此際數多ノ風說ニ惑ハサレ、大ニ恐怖ノ念、憂慮ノ色ヲ顯ハシタルモ、折柄帝國軍艦八重山號ノ入港ト云ヒ、我ガ領事ノ周密ナル諭解ト云ヒ、孰レモ人心安堵ノ圖ニ遭ヒ、今ノ程ハ稍ヤ平常ニ歸セントスル傾向ニ有之候。

明治二十六年四月二十日

在京城

大石正巳

外務大臣 陸奥宗光殿

日本商旅關展見

(二十六年四月十七日帝國領事館ノ墻壁ニ貼付シタルモノ)

蓋自太極肇判兩儀位焉人於其間劃爾境界有國三綱定矣、五倫成矣照而爲世處之中土彝倫之宗謂之人沒知之類謂之夷狄、是故中國之文通於遠夷聖人之化被於絕域天道至公維喜是蔭維惡是罰爾雖遐裔品受略一亦知否乎、既處人道則各治國圍各保生產永保區域上供下育可也、妄以貪婪之心據于他邦攻擊爲長殺戮爲本誠何心哉竟何爲哉、在昔壬辰之禍爾於我國有何不容之過盡國而來敗軀而歸我國之慘逼寧忍何睹吾於爾有不忘之讐、汝反於我有何未忘之恨哉、汝之殘命尙有難赦之罪何頑瞬息之命覘覘我輩哉爾不聞乎、東國之聖乎西山之訓洒溟之術今猶禰矣石窟道矣止鞭旬之由玉臺之雲能辟死圍之元吾師之德廣大無涯置汝於普濟之圍汝聽吾否害吾否。天已憎之師已戒之安危之機爾其自取毋有噬臍吾不再言急還爾域

癸巳三月初二日子時

朝鮮國三師員 羽艸

朝鮮ニ派遣セシ松岡參事官電報

(二十六年五月五日接受)

種々内偵ノ上、袁世凱ハ本來我が政府ニ向ツテ好意ヲ懷カザリシヲ發見セリ。

在朝鮮露國公使ハ此事ニ關係セザルモノ、如シ。

大石ハ今ニ至リ其ノ外交上ノ無經驗ヲ嘆ズル模様ニ見受ケラル。

大石ハ初メ其從來ノ舉動ニ對シ、今更袁世凱ニ依頼スルコトハ頗ル困難ヲ感ゼシモ、閣下ノ口頭ヲ以テ傳ヘラレタル訓令ノ趣ヲ小官ヨリ再三説明シタル後、漸ク大石ハ其ノ力ノ及バン限リヲ勘メタリ。其商議ノ結果ハ大石ヨリ已ニ電報差出セリ。

又大石ハ國王ニ特別謁見ヲ請フモ許サレザルベケレバ、川上參謀次長拜謁ノ序ヲ以テ、防穀事件ニ關スル事由書ヲ國王ヘ奉呈スル積リナリト云ヒ居レリ。

小官ハ次ギノ郵船ヲ待テ歸朝スベシ。

參謀次長朝鮮國王殿下ニ謁見

明治二十六年五月六日接到セル大石辦理公使ノ電報ニ依レバ、昨日參謀次長國王殿下ニ拜謁ノ節、我が最後ノ書簡ニ對シ満足ナル回答ヲ與ヘラル、様督辨交渉通商事務ニ訓令アランコトヲ本官ヨリ殿下ニ面請シ、殿下ハ之レヲ肯諾セラレタリ。但シ王命モ其效ナカルベク、隨テ満足ニ本件ノ完結ヲ見ルコトハ期シ難キコトナルベシ。

伊藤伯ヨリ李中堂へ宛タル英文信函 轉交ニ關スル件

伊藤伯ヨリ李中堂へ宛テタル英文信函轉交ニ關スル電訓本月四日午後接到候ニ就キ、翌朝同中堂秘書官羅豐祿氏ト協議シ、同日午後五時李中堂ヲ訪問致シ、同秘書官共都合主客三名着席ノ上、伊藤伯信函ヲ李中堂ニ手交シタルニ、中堂ハ直チニ羅秘書官ヲシテ漢譯セシメ、逐一聞取ラレ申候。

中堂云ク、日韓間ニ於テ防穀事件起リ久シク結局ニ至ラザル趣ハ京城駐在官袁氏ヨリ屢々報告有之候ヘドモ、本件ハ左程重大ノ問題トモ覺エザリシ故、詳細ノ成行ハ確ト記憶不致候ヘドモ、朝鮮政府ガ日、韓兩國ノ條約ニ背キ、漫リニ防穀令ヲ發シタルハ、畢竟其曲タリシコト同政府ニ於テ既ニ承認シ居ルハ、彼ヨリ相當ノ償金ハ拂フベシトノ申出ニ依テ相知リ候得共、事態政治上ノ問題ハ曲直判明致シ居ル様ニ信ゼラル、ナリ。然レバ其原因ヨリ生ジタル日本商人

ノ被損害高ノ多寡ニ關シテハ、最終ノ國際談判ヲ爲ス程ノ事件トハ不存、之レヲ直言スレバ今日ノ場合ニ相成リタルモ、幾分カ大石公使ノ手段圓滑ヲ缺キタルトコロアリシニ基因スルヤウ聞キ及ビ候。兎ニ角貴國ト云ヒ、朝鮮ト云ヒ、就レモ隣邦ノ間柄ナレバ、余ハ常ニ其交際親密ニシテ和平ヲ傷ケルコトナキヤウ希望致居ル次第ナレバ、本件ニ關シテハ疾クニ袁世凱ニ訓令ヲ下シ、日、韓ノ間ニ在テ友邦ノ義務ヲ盡シ、局ヲ圓滑ニ相結ブヤウ爲取計候ニモ係ハラズ、遂ニ此ニ臻リタル以上ハ、我が(中堂)頁友伊藤伯ノ希望ヲシテ空シク水泡ニ歸セシムルニ似リト雖モ、實ニ此先キニ盡力ノ途ヲ見出不申候。御承知ノ如ク朝鮮ハ貧弱國ノコトナレバ、同國政府ガ自ら調査ヲ遂ゲテ相當ノ償金額ト定メタル六萬弗ノ外ハ、恐ラクハ支拂ノ方法ナカルベシ、旁々乍遺憾此旨貴領事ヨリ發電アリタシ。而シテ最終談判ノ義ハ必ラズ斷行相成ラザルヤウ希望スル旨モ電傳ヲ乞フ云々、懇請有之候ニ付、小官ハ本日ハ獨リ伊藤伯ノ信函ヲ閣下ニ進達スルノ訓令ヲ受ケタルノミ、其外一切關係セザル儀ニ付、如何様トモ伊藤伯ノ希望通り電信ヲ以テ直接御回報ヲ煩ハサルヲ得ザル旨相答ヘ、且ツ云ク、前陳ノ如ク小官ハ本件ニ關シテハ何等陳述スベキ義ニ無之候ヘドモ、今般伊藤伯ガ閣下ヘ向ヒ從來ノ成行ヲ電報シ、殊ニ朝鮮政府ヘ要求シツ、アル金額中ヨリ、利息丈ハ刪減スベシトノ心意ヲ表示セラレタルハ、朝鮮政府ニ對スルヨリ寧ろ閣下ヘ第三者トシテ朝鮮政府ニ勸告方ヲ囑托スル爲メ、一步ヲ讓ラレタ

ル次第カト推測致候得者、伊藤伯ノ私信中ニアル如ク、遂ニ事纏ラザレバ最終ノ手段ヲ取ルノ止ムヲ得ザルニ至ルベキハ昭々トシテ明カナリ。元來本件ハ僅カニ在韓本邦人民一部分ノ損害金ヲ争フテ大事ヲ惹起サントスル如ク閣下ニ於テ御考へ成サレ候様相察候得共、是レハ決シテ然ラザルベシ。金額ハ少數ニ似タリト雖モ、其背約ノ處置アリシハ彼レト自ラ平和ヲ破ラントスルモノニシテ、國際ヲ重ゼザル結果ナリト云ハザル可カラズ。且ツ勢ヒハ恐ルベキモノナリ、本件斯ク久シク談判落着セザル行掛上、平和ヲ維持シ難キ場合ニ切迫セルモノ、如シ。伊藤伯ノ苦心察スルニ餘リアリ。蓋シ同伯ハ閣下ヲ敬愛スルガ故ニ、本件ニ關シ懷ヲ披キ閣下ノ盡力ヲ希望セラレタル義ト察スルヲ以テ、閣下ニ於テモ輕々看過セズ、御再考ノ程切ニ希望スル旨相述候處、是ニ於テ辭ヲ正ウシテ云ク、伊藤伯ニ對シテハ固ヨリ盡力ノ勞ヲ避クル念慮無之候ヘドモ朝鮮政府ノ内情ニ就キ公平ノ考察ヲ下セバ、亦タ其主張スルトコロ強チ不當ニモアラザル如クナレバ、之レヲ強フルコト能ハズ、去リ乍ラ今一應同政府ニ向ツテ伊藤伯ノ希望通り勸告ノ義、袁道臺へ電訓可致、又利息ノ金額丈ケハ日本政府ニ於テ御刪減可相成トノ特旨モ同政府へ内報ニ及ビ可成速カニ程能ク事情完結スルヤウ取計可申ニ付、此旨貴領事ヨリ同伯へ回電相成度ト改メテ申出デラレ候。

以上李中堂ヨリ小官マデ内話ノ次第ヲ其儘電報スルハ不都合ト相信候ニ付、小官ハ伊藤伯ノ書信ニ對スル返翰ヲ當席ニ於テ認メラレ候ハ、欣然依頼ニ應ジ可申旨相述候處、直チニ羅秘書官へ起草ヲ命ジ、同秘書官ハ一應英文ヲ以テ李中堂談話ノ趣意ヲ書キ綴リ、之レヲ意譯シテ中堂へ讀聞カセ候末、小官へ向ヒ可然取計方依頼アリ、依テ篤ト熟讀シタルニ、文體ニ攄テ同秘書官ノ筆記セシコトニ相成候ニ付、小官ハ李中堂署名ノ返翰タルベキヤウ注意シ置キ、且ツ談話ノ時刻長キニ過ギ、已ニ點燈後ニ及ビ候故、何分ノ事追テ承知可致旨相約シ總督衙門ヲ退キ申候。

翌日即チ本月六日午後羅秘書官別紙李鴻章伯ヨリ伊藤伯ニ宛タル英文返翰一通ヲ持參シ、猶ホ同中堂ヨリ發電方依頼ノ義口演相成候ニ付欣諾致シ、本月七日電信ヲ以テ右返翰ノ全文及御轉致候。

李中堂ト談話中小官ハ過日浙江溫處道ニ榮進セシ袁世凱氏ハ何ツ頃京城ヲ出發可相成都合ナルヤ相尋ネ申候處、右ノ任命ハアリタルモ當分ノ内ハ仍ホ京城ニ駐在セシメ候旨李中堂ヨリ確答有之候。

明治二十六年五月九日

在天津 荒川 巳次

元山黃海道防穀事件結局ニ關シ 請訓ノ件

本件ニ關スル去ル三日ノ電訓ヲ奉ジ、翌四日「アルチメータム」ヲ當國政府ニ送文スルト同時ニ、川上陸軍中將引見ノ際、本件ニ關スル當時ノ狀態一斑ヲ大君主ニ奉明シ、猶ホ言盡サル處ヲ上奏センガ爲メ更ニ謁見請求ニ及ブベキ趣ハ既ニ先般申進置候ニ付、委曲既ニ御領承相成候儀ト存候。其後拙者ハ別紙寫ノ通り謁見請求ニ及ビ候ヘドモ、別紙ノ如キ回答有之、到底「アルチメータム」ノ期限以內ニ於テ奉明相叶申間敷ト存候ニ付、拙者ハ只管當國政府ノ内情愈ヨ衰世凱ノ舉動ニ注目致居候處、去ル七日以來屢々忠清道觀察使ヨリ東學黨ノ運動ヲ電報致候爲メ、政府部内ノ動搖一方ナラズ、我「アルチメータム」ハ如キハ反テ措イテ問ハザル姿ニ有之、全ク去ル十三日ノ貴電中、李中堂ヨリ伊藤伯ニ回電シタルト同様ノ有様ニ有之候。然ルニ去ル十四日國分書記生當時當國漫遊ノ河野、鈴木兩議員ト共ニ大院君ヲ訪問シタルニ、在京權在衡ハ如何ナル筋ヨリ聞キ込ミタルモノニヤ、日本ハ兵ヲ動かサントスルノ舉動アル趣、其前日當國政府ニ電報致候爲メ、政府部内ハ又モヤ非常ノ動搖ニテ、同夜ハ諸大臣等大關ニ集合シ、徹夜ノ評議ニ及ビ候處、趙督辦ハ飽クマデモ四萬餘圓ノ說ヲ固執シタレドモ、是レニテハ事端ヲ生ゼシムル外ナシトノ說多數ニテ、趙督辦ヲ不取敢退職セシメ、更ニ延期ヲ乞フトモ、又開談スルトモ、別人ヲ以テ之レニ充ツルコトニ決シ、同夜直ニ趙ヲシテ辭表ヲ差出サシメタル後、十三日ニ至リ先年外務協辦タリシ南廷哲ヲ以テ督辦ニ任命致候。爾來當國政府ハ連夜大臣會議ヲ開キ、種々評議ヲ盡シ居候ニ付、拙者ハ諸方ニ手ヲ廻シテ政府部内ノ内情探偵致候處、趙秉稷、趙秉式、閔應植等ハ日本政府ノ要求ヲ以テ不當トナシ、趙督辦ノ四萬餘圓ヲ以テ賠款ニ充ツベシトノ說ヲ唱へ、且ツ我が政府ハ決シテ兵ヲ動かサズ、又兵ヲ動かスモ更ニ怖ルベキ事ナシト飽クマデモ非増額說ヲ主張シ、且ツ拙者ト本件ヲ議スルハ不得策ナレバ、宜シク人ヲ東京ニ派シ、之レヲシテ本件ヲ議了セシムベシトノ意見ニ有之候。之レニ反シテ閔泳達、閔泳韶、閔泳駿（在東京權ノ電報以來說ヲ變ジタルモノ、如シ）金宏集、鄭範朝、趙秉世等ハ日本ハ決シテ前後ヲ顧ミズ不條理ノ要求ヲ爲スモノニアラザル旨ヲ述べ、且ツ事體ノ輕視スベカラザル點ヨリ、今日兩國ノ和親ヲ破ルハ兩國ノ不利益ナレバ、日本政府ニ議シ、其ノ最モ讓與ヲナスノ點ニ於テ妥ニ本件ヲ結了スベシトノ說ニ有之、五、六日來ノ勢ヒ寧ロ増額說多數ヲ占

メ、來ル有様ニ立至リ候。尤モ此ノ兩派ノ裏面ニ立入り其内部ヲ窺フニ、非増額派ニハ李善得、具禮等ガ、俄、佛ノ使臣ト相結托シ、徒ニ我ヲ妨グントスル外ニ有力ナル袁氏ノ後援有之、袁氏ハ先キニシテハ拙者ノ依頼アリ、後ニシテハ李中堂ノ内命アルニモ拘ハラズ、閔應植等ヲ補助シ「日本恐ル、ニ足ラズ、自分ハ李中堂ニ電報シテ直ニ兵艦五、六隻ヲ仁川ニ呼ビ寄スベキニ付、憂慮スルニ及バザル」旨ヲ諸大臣等ニ語り、猶ホ大君主ニモ申上ゲタル由ニ有之、去ル十五日威海衛ヨリ清艦濟遠、經遠二隻來仁致候モ、全ク同人ノ飛報ニ基キ候儀ニ有之候。又同人ハ去ル十五日拙者ヲ來訪ノ節、當國諸大臣ノ中ニハ猶ホ趙督辦ノ四萬餘圓說ヲ固持スルノミナラズ（趙秉稷、閔應植ヲ指ス）或ル外國人ノ如キハ（李、具等ヲ云フカ）二三萬圓位ニテ事足ルベシト云フ者アリ、又甚シキニ至リテハ或ル日本人ノ如キハ（雨森ノ意カ）之レヲ自分ニ委任スルニ於テハ、二萬位ニテ慥カニ本件ノ始末ヲ付クベシト云フ者アル位ナレバ、今日ハ到底之レヲ議了スルコト困難ナルベシ、又當國政府ノ考ヘニテハ、新二人ヲ東京ニ派シ之レヲシテ本件ヲ議セシムル積リナリト云々ト相語り候。拙者思フニ此談話ハ寧ロ當國政府ノ意向ニアラズシテ、袁、李、具等ノ考ヘニ可有之ト存候。

然ルニ又増額派ニハ中人以下ニテ金嘉鎮等ガ破綻ヲ憂慮シ、先ヅ趙秉式ヲ流罪又ハ死刑ニ處シ、一面謝意ヲ我レニ表シ置キテ後、金額ノ減少ヲ請求シ事ヲ結了センコトニ奔走シ、頻リニ閔泳駿等ヲ説クニ此等ノ事ヲ以テスルノ外、大君主ニハ寧ロ賠償額ヲ増加シテ本件ヲ平和ノ間ニ結了センコトヲ希望アラセラレ候爲メ、當初非増額派ノ勢ヒ強固ナリシニモ拘ハラズ、追々増額說ノ勢ヒ増シ、遂ニ要求損害ノ元金凡ソ九萬二千餘圓ヲ賠償スルコトニ決定シ、猶ホ去ル十六日國王宗廟へ行幸ノ節ニモ、南督辦ヲ召シ、速カニ之レヲ賠償スベキ旨教示アラセラレ候場合マデニ立至リ候。

右ハ大院君、金嘉鎮等ガ、或ハ國分書記生ニ、或ハ他ノ本邦人ニ直語シタルモノト、他ノ探偵ヨリノ報道トヲ對照シテ事實ナリト思料スル處ノ概要ニ有之、當國政府モ最早本件損害ヲ賠償スルコトニ決定シタルモノト存居候處、去ル十六日午後十一時頃ニ至リ、南督辦ハ差備官高永釋ヲシテ別紙寫ノ如キ照覆ヲ差越シ、本件ハ之レヲ東京ニテ處辨セントスル趣申越候ニ付、拙者ハ之レニ對シ、當國政府ハ既ニ權在衡ニ訓令ヲ與ヘタルモノナルヤ、又之レヲ與ヘントスルモノナルヤ、又我が政府ハ之レニ同意シタルヤ否ヤ不分明ナルノミナラズ、我が政府ガ我が使臣ヲ以テ「アルチメータム」ニ對スル當國政府ノ決答ヲ聞カシムルモノヲ、我が使臣ヲ差置キ別ニ餘人ヲ以テ之レニ答ヘシムルハ交渉際ノ例規ニ反スル旨ヲ以テ強ク其不都合ヲ難詰ニ及ビ之レヲ突返シ候處、差備官ハ直チニ之レヲ受取り歸館致候ニ付、早速其概要ヲ糺シ翌十七日早朝ヲ以テ右ノ趣電稟ニ及ビ候次第ニ有之候。

右ハ前陳ノ通り拙者ガ得タル朝鮮政府ノ意向ト矛盾シタル致シ方ニ有之、頗ル其意ヲ得ズ候ヘドモ、拙者ノ推察ニテハ非増額派ガ其勢ヒヲ失ヒタルヲ遺憾ニ思ヒ、更ニ無權力ナル南督辦ニ迫リ、強ヒテ右ノ照復ヲ送交セシメタルモノト存候。現ニ南督辦モ初メヨリ拙者ノ到底之レヲ受理セザルヲ察シタルモノニヤ、當夜統署ヨリ人ヲ差備所ニ待タセ置キ、拙者ノ棄却スルヲ待テ直ニ之レヲ受取ラセ候様子ニ有之候。

然ルニ翌十七日ニ至リ統署ニ於テ拙者ト面議シタキ旨督辦ヨリ申來リ候ニ付、拙者午前十一時頃統署ニ至リ候處、督辦ノ申分ニハ當國政府モ愈ヨ本件ニ關シ我ガ政府ニ回答スベキコトニ決定シタルモ、今一應金額ノ點ニ於テ拙者ト評議致度趣ニ有之候ニ付、拙者ハ數時間ヲ費シテ彼ヨリ賠償ノ金額ヲ發言セシメント致候ヘドモ、例ノ朝鮮流ニテ容易ニ其決意ヲ申出デズ、且ツ黃海道ノ分ニ付テハ更ニ兩國ヨリ人ヲ派シテ實地取調ニ從事シタキ旨ノ挨拶致候ニ付、拙者ハ之レニ對シ彼等ノ談判此ノ如ク長年月ヲ經過シタル今日、當國政府ハ最早取調ヲ喋々スルノ時ニアラズ、此際宜シク相互ニ可及丈ノ讓合ヲナシ、一切ノ交渉案ヲ處辨シ了リテ以テ益々兩國ノ交情ヲ溫ムベシ、就テハ拙者ヨリ先ヅ口ヲ開キ、其ノ方便ヲ可申出トテ、九萬八千圓ヲ以テ元山防穀ノ損害ニ充テ、内六萬圓ヲ一ヶ月以内ニ於テ現金拂トナシ、殘額三萬圓ヲ三ヶ年賦トシ、別ニ二萬圓ヲ以テ黃海道防穀ノ要償ニ充テ、今ヨリ四ヶ年賦ニテ之レヲ辨濟スベキコト

ヲ以テシ、且ツ右發言ハ我ガ政府ノ意ニアラザルモ、拙者ハ現職ヲ擲テ我ガ政府及ビ被害商民ニ說キ之レヲ成立セシムル義ニテ「アルチメータム」ノ期限經過以後永キ猶豫ヲ許サザルニ付、當日即チ十七日中ニ確答スベキ旨申候處、種々事情ヲ陳ジ、政府ノ評議ヲ經、大君主ノ裁可ヲ乞フノ時間ヲ要スレバ、翌日マデ待チ吳レ候様申候ニ付、拙者ハ昨日午前七時マデニ確答スベキ旨ヲ約シ相分レ候。

然ルニ昨朝七時約ノ如ク督辦來館致候ヘドモ、矢張前日同様ノ申分ヲ繰返スノミニ有之、頻リニ輕減ヲ申立候ニ付、拙者ハ此際一切ノ交渉事件ヲ始末セザルハ彼我ノ不利益ナレバ、更ニ昨日ノ額ヲ減少シ、元山分ニハ九萬圓、黃海道ノ分及ビ昨年八月五日附机密第八十六號中記載ノ雜件ニ對シ三ヶ年賦ヲ以テ二萬圓ニテ拙者盡力スベキ旨申候ヘドモ、引受クベキ様子相見エ不申、最早妥結ヲ失ヒ候モノト認メ候ニ付分袖致サントスル際、貴大臣閣下ヨリ去ル十七日附ノ長電ニ接シ候ニ付、拙者ハ直チニ我ガ政府ノ決心ヲ開陳致候處、督辦ニモ大イニ驚キタル様子ニテ、早速政府ノ大臣トモ評議可致趣ヲ以テ、午後四時マデ猶豫再願致候ニ付、拙者ハ確ク約シテ相分レ候處、午後五時過ニ至リ南督辦ヨリ別紙照覆ヲ接到致候。然ルニ其文書中ニ金額十一萬圓ハ明細記入致候ヘドモ、辨償ノ方法ニ至リテハ俟再熟商妥訂云々ノ文字有之、拙者ガ本件結了ノ條件トシテ發言シタルモノト異ナルノミナラズ、或ハ後日之レヲ辭柄トシテ辨償ノ

期ヲ延バサンモ難斗ト存候ニ付、拙者ハ直チニ統署ニ至リ其改刪方ヲ申入レ候處、兎角辭ヲ左
右ニ托シ容易ニ之レニ應ゼズ候ニ付、拙者ハ茲ニ斷然我が決意ノ動カスベカラザルヲ示シ、彼
我ノ談判此クマデニ運ビタルニ、辨償法ノ一點ニ至リテ協議ノ整ハザルハ誠ニ惜ムベキコトナ
レドモ、拙者ハ不得已本日ヲ期シテ歸朝ノ途ニ就クベシトテ、兼ネテ準備シ置キタル京城出發
ノ告知書ヲ差出候處、督辦モ大ニ狼狽シタル様子ニテ、償還ノ方法ニ付テハ早速右照覆ト相離
レテ別ニ回答スベキニ付、強ヒテ二、三日ノ猶豫ヲ請求致候ヘドモ、拙者ハ斷然之レヲ拒絶シ、
何等申出ヅルコトアレバ本日正午拙者出發前ニ報ゼラルベシ、若シ之レナキニ於テハ其節右照
覆ヲ返戻シテ歸朝スベシトテ袂ヲ拂ヒ歸館致候。

本日ハ拙者愈ヨ發京ノ積リニテ午前九時頃ヨリ人馬ノ準備ヲナシ、十二時ノ至ルヲ待チ居候
處、差備官等ニハ我が舉動ノ歸朝ヲ示シタルニ驚キ、一面此ノ趣ヲ統理衙門ニ報ズルト同時ニ、
轎夫馬卒ヲ叱シ差備官ノ許可ナクシテ我が一行ヲ送ルベカラザル旨ヲ嚴命シ、只管暫時ノ猶豫
ヲ請願シテ止マズ、漸ク二時半頃ニ至リ別紙ノ啓文ヲ送越シ候處、支拂ノ方法ニ至リテ猶ホ拙
者ノ發言ト符合不致候ヘドモ、右照覆別ニ啓文ヲ發スルマデニハ南督辦モ非常ニ盡力シテ、政
府ノ諸大臣等ニ遊説シテ且ツ當國政府ニテ實際右等巨額ノ金員ヲ支出スルハ不少困難ニ有之、
旁々之レヲ今日直チニ處分シ了ハラザレバ反覆表裏常ナキ政府ハ、今後如何ナルコトヲ申出デ

候モ難斗、左候テハ此後幾年ヲ經過スルモ結局ヲ見ルコト能ハザルベシト相考ヘ候ニ付、貴大
臣閣下御意見ノ程ハ承知不致候ヘドモ、拙者ハ直チニ之レヲ我が政府ニ電稟スベキ旨ヲ督辦ニ
回答シ、一面其趣ヲ貴大臣閣下マデ電報致候次第ニ有之候。

本件ニ關シテハ昨年來閔應植ガ閔家ノ古老タル勢力ヲ濫用シ、袁世凱ガ大國ノ威勢ヲ藉リテ
我ヲ妨ゲタリシガ爲メ速カニ妥協ニ至ラザリシモ、聖明ナル大君主殿下ニハ國交ヲ重ゼラレ、
遂ニ和交ヲ保ツノ一點ニ於テ百ノ俗論ヲ斥ケラレ、勅裁ヲ下シテ右ノ如ク處辨セシメラレ候。
尤モ本件提出以來數年間其結了ヲ見ザリシガ爲メ、我が被害商民ノ困弊ヲ増加セシメタルニモ
拘ハラズ、拙者ガ其ノ要償ノ金額ハ勿論其一部ト雖モ今日直ニ之レヲ得ルコト能ハズ、漸ク數
年ノ年賦ニテ之レヲ辨償セシムルマデニテ拙者ノ力能ク彼等ヲ満足セシムルコト能ハザルハ拙
者ノ深ク慙愧スル處ニ有之候。依テ拙者ハ茲ニ特ニ當國政府ノ事情ヲ陳ジ、貴大臣閣下マデ上
申ニ及ビ候間右開陳ノ事實御洞察之上、右照覆並ニ啓文ニ對スル拙者ノ應答御承認相成候様致
希望候。

明治二十六年五月十九日

辨理公使 大石 正巳

外務大臣 陸 奥 宗 光 殿

元山黃海道防毅事件結局ニ關シ請訓ノ件

防穀事件落着南督辨ヨリ差出シタル 賠償金額拂方取極ニ關スル書簡

啓敬者、案查元山、黃海防穀兩懸案、及已四月黃海道防穀損害、並該道重稅、捕廳生蔘收沒三案、並上項二案、其五案、均在十一萬銀元額內、分別償還一事、於我曆四月初三日、業經照會在案、至分期償還一節、本督辨與我政府熟商妥訂、將北款九萬元內六萬元、由我曆四月初五日起、限三ヶ月籌償、下餘三萬元、限五ヶ年排還、黃海道防穀重稅三款、及生蔘沒收等款二萬元、限六ヶ年、分別歸還、以妥懸案爲要、專北函佈、尙望貴公使查照轉詳可也、此頌日安。

癸巳四月初四日

南 廷 哲 頓

大三輪長兵衛談話

(六月十八日大阪府内報)

大石公使今回ノ防穀談判、快ハ即チ快ナリ、日本ノ利益ハ即チ利益ナリ、然レドモ其快ヤ或ハ書生若クハ個人ノ快ニハアラザルカ、其利益ハ一、二商人ニ取テノ利益ニアラザルカ、苟クモ一帝國日本ノ上ニ於テノ國利ト威嚴及ビ重量ト云ヘル方面ヨリノ觀察ニ於テハ、余ハ實際目撃セシ同公使ノ舉動及ビ同國政府並ニ各駐在公使等ノ感情ニ徴シテ、其不利ナリシコトヲ斷言スルニ憚ラザルナリ。

然ルニ日本人士ハ誤謬多キ新聞ノ報道ニ誤マラレテ同公使ヲ歡待スルハ兎モ角、永ク朝鮮公使タラシメント冀望スルガ如キハ既ニ其事態ノ眞象ヲ誤マレルノ證據ナリ。

抑モ該件ノ起ルヤ、清國公使袁世凱ハ常ニ其帷幄ニ參シテ朝鮮政府ノ後援ヲナシ(本邦新聞

ニ袁世凱ハ中立セル如ク記載スルハ誤ナリ。防殺事件ノ爲メ日本商民ニ實際ノ損害ヲ與ヘタルハ三萬許ニ過ギズ。故ニ之レヲ以テ飽クマデ主張シ、若シ日本公使尙ホ之レヲ聽カズシテ過當ノ要償ヲ爲シ、談判ノ爲ニ破裂シ、一朝軍艦ヲ朝鮮海ニ泛ブルニ至ルモ清國政府ノ在ルアリ、何ノ憂フル所之レアラント堅ク執ツテ動カザリシ。

然レドモ朝鮮政府ハ既ニ前公使ノ時ヨリ六萬圓ノ要償ニ應ズル旨ヲ約シタルヲ以テ、新公使ニ對シテ其ノ以下ノ談判ヲ爲スハ德義ニ背クモノナリトテ、尙ホ梶山公使ノ時ト同一ノ金額ニ依テ談判ノ局ヲ結バンコトヲ望ミタリ。然レドモ大石公使ハ最モ強硬激烈ノ言辭ト舉動トヲ以テ之レニ對シテ一步モ假借スルノ色ナク、益々進ンデ己レガ意ヲ貫カントセリ。斯ノ如クシツツ談判徐々ニ進ンデ結局二萬八千圓ノ差マデ押迫マリ、此金額ニテ双方一步モ譲ラズ、公使ハ旗ヲ卷イテ公使館ヲ引拂ハントシ、朝鮮官吏モ亦最早此上ノ術ナシ、戰端ヲ開クモ已ムヲ得ザルナリトノ危急ニ迫リシナリ。

茲ニ朝鮮當時ノ内情ヲ見ルニ、清公使ハ勿論、各國公使ニ於テモ大石公使赴任以來ノ舉動ハ、兎ニ角沈靜閑雅ナラズ、輕躁狂暴、一國公使トシテ在外スルモノ、舉動トシテハ從來斯カル人物ヲ認メタルコトナシトシ、之レヲ怖ル、ニアラズシテ之レヲ侮斥シ、殆ンド一介ノ狂書生ヲ以テ遇シ、誰レ一人トシテ眞意ヲ以テ交際スルモノナク、之レヲ忌避スルコト蛇蝎ノ如シ。隨

テ朝鮮官吏等モ皆之レヲ疎斥嫌忌シ、成ルベク面晤應答ヲ絶タントスルニ至レリ。彼ノ談判ノ終局ニ及バントスル頃ハ、諸大臣悉ク公使ノ面會ヲ謝絶セリ。是レ公使ガ國王ニ面接シテ陳辯スルノ止ムヲ得ザルニ至リシ所以ナリ。

殊ニ駐劄公使等ノ所見トシテ、日、韓談判金額ノ差違ハ僅カニ二萬八千ナルニアラズヤ、然ルニ大石公使ハ此ノ僅々ノ金額ニ對シテ殆ンド狂態ヲ裝フテ晝夜奔走スルハ何ノ意タルヲ知ラズ、日本ノ公使ハ斯クマデ局量狹少、瑣事ニ狂スルモノ乎トノ冷評ヲ加ヘ、且ツ日本近時千島艦ハ英國一商船ノ衝突ニ會ヒ、其軍艦ヲ覆没シ、其兵士數十ヲ海底ニ沈メナガラ、之レニ對シテハ纔カニ領事ニ向ツテ民事訴訟ヲ起スニ止マリ、僅々二萬八千圓ノ金額ノ爲ニ公使館ヲ撤シテ軍艦ヲ送フントスルガ如キ其ノ權衡ヲ得タルモノナルカ、是レ小國ニ強ニシテ大國ニ弱キモノニアラズシテ何ゾヤトノ非難ハ噴々トシテ一般ニ傳唱セラレタル所ナリシ。故ニ朝鮮官吏ハ此等各國ノ說ニ誘ハレ、不知不識ノ間ニ強硬ノ說ニ傾キ、大石公使ヲ侮蔑シテ一介狂生ノ說ヲ以テ遇スルニ至レリ。

幸ナル哉獨リ國王殿下ハ此說ヲ斥ケラレ、苟クモ先進國タル日本ノ要求ニ對シ、朝鮮國力ノ堪ヘザルモノナランニハ兎モ角、如何ニ朝鮮ハ貧弱國ナレバトテ僅々二萬八千圓ノ金額ノ爲メ隣交ヲ破リ、事ヲ干戈ニ訴ヘントスルガ如キハ最モ好マザル所ナレバ、速カニ其求メニ應ジ終

局ヲ告ゲヨト勅セラレタリ。國王ノ一詔在廷諸臣モ之レヲ拒ムニ由ナク、終リニ無事ニ結了シタルモノナリト云フ。

勢ヒ斯ノ如キ故ニ大石公使ノ去ルヤ、各國公使一人トシテ告別シタルモノナク、韓廷諸官吏亦タ然リ、唯ダ機敏ナル清公使ノミ一タ公使館ヲ訪ヒ、大石公使ニ面會セズシテ告別ノ意ヲ表シタルノミ。

大石公使ハ家什一モ遺サズ携ヘテ歸朝シタルハ全ク再航ノ意ナキヲ以テナリ。假令政府之レヲシテ再ビ赴任セシメントスルモ、内外ノ情勢此ニ至テハ公使タルモノ豈ニ其任ニ居ルベケンヤ。然レドモ公使ガ任ヲ去ラザルベカラザル理由トシテハ自ラ之ヲ言ハズ、單ダ政府ノ處置ヲ非トシテ曰ク、余ガ談判中ニ於テ伊藤總理ハ李鴻章及ビ袁世凱ニ電報シテ仲裁ノ勞ヲ執ラシメントセリ、既ニ朝鮮ノ後援者タル清國ニ向テ仲裁ヲ依頼スルガ如キハ何事ゾ、政府大臣等ノ對外主義ハ殆ンド寡婦者ノ番頭ヲ使役スルガ如ク、一時ハ非常強硬ヲ唱ヘテ之レニ從ハシメ、一朝其言フ所ニ依リテ進マザレバ忽チ挫折シテ軟弱ノ主義ニ變ズ、在外公使タルモノ豈ニ其任ヲ全フスベケンヤ、是レ大石公使ガ表面上ノ宣言ナリ。

要スルニ今後ノ事タル、政府モ該公使ヲシテ去ラシムベク、縱令政府之レヲ去ラシメザルモ公使自ラ去ラザルベカラザルノ境遇ニ瀕セリ。

對韓政策閣議私案

朝鮮事件ハ當初大鳥公使ノ赴任ニ臨ミ、籌畫セラレタル所ノ廟算ニ比スレバ、外交上ニ於テモ軍事上ニ於テモ荐リニ局面ノ變遷ニ遭シ、歩々深入遂ニ今日ノ形勢トハナレリ。而シテ目下ニ施スベキ政略ニ至テハ、隨時廟議ノ決定スル所アルヲ以テ、其成議ニ遵ヒ之レヲ遂行スベキコトハ固ヨリ論ヲ待タズト雖モ、將來朝鮮ヲ如何ニスベキトイフ問題、即チ本件ノ最後ノ大目的ハ如何トイフ問題ニ至テハ、第一ニ帝國政府ハ朝鮮ノ内政ヲ改革スル爲メ、又其ノ獨立ヲ永久ニ保全スル爲メ、竟ニ清國ト交戦セザルヲ得ザル場合ニ立到リ、現ニ尙ホ交戦中ニ在レバ、到底日清間最後ノ勝敗ヲ見ルノ日ニ非ズレバ、實際ニ起リ來ルベキコトニハ無之、然レドモ今ニ於テ此問題ニ對スル一ノ方針ヲ確定シ置クコトハ、自今帝國政府ガ執行スベキ外交上及ビ軍事上ノ措施ニ關シ、頗ル緊切ノ關係ヲ有スルノミナラズ、大鳥公使ヨリモ本問題ニ付政府ノ方針ヲ伺ヒ來リ居レバ、本大臣ハ茲ニ左記ノ考案ヲ具シ、以テ像メ廟議ノ確定スル所ヲ聽カムコ

トヲ望ム。

甲 帝國政府ハ既ニ内外ニ向テ朝鮮ヲ一ノ獨立國ト公認シ、又其内政ヲ改革セシムベシト聲明セリ。就テハ今後清國ト最後ノ勝敗相決シ、而シテ我輩ガ冀望スル如ク我ガ帝國ノ勝利ニ歸シタル後ト雖モ、依然一個ノ獨立國トシテ全然其ノ自主自治ニ放任シ、我ヨリモ之レニ干涉セズ、亦タ毫モ他ヨリノ干涉ヲモ許サズ、其ノ運命ヲ彼ニ一任スルコト。

但シ此ノ方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ズ。

一 朝鮮ノ如キ久シク紀綱廢頹、萎靡不振、官民共ニ獨立ノ志尙ニ乏シキ國柄ニ在リテハ、假令一時他ノ刺戟ニ因リ、其内政ニ多少ノ改革ヲ加ヘタリトモ、永久ニ維持シ又時ニ應ジテ之レヲ改進セシムルコトハ甚ダ疑ヒナキコト能ハズ、若シ然ルトキハ帝國政府ガ今回大兵ヲ派出シ、巨額ノ軍費ヲ使用シタル結果ハ竟ニ水泡ニ歸スルヲ免レザルベキカ。

二 若シ斯ノ如ク朝鮮ガ自ラ獨立ヲ保持シ難キコトヲ知リナガラ、其將來ノ命運ヲ全ク彼ニ一任スルトキハ、或ハ恐ル他日清國ハ再ビ其ノ隙ヲ窺ヒ、間接ニ直接ニ朝鮮國政ニ干涉シ、或ハ現在ノ政府ヲ顛覆シ、事大黨ト稱スル閔族一派ノ徒ヲ以テ更ニ政府ヲ組

織セシメ、恰モ日、清交戦ノ以前ノ如キ清、韓ノ關係ヲ再現セシムルコトヲ。而シテ一旦此ノ如キ場合ヲ生ズルトキハ、帝國政府ハ其ノ經歷上袖手傍觀シテ全ク清國ノ所爲ニ一任スルコト能ハザルハ敢テ言ヲ待タザルガ故ニ、必ラズ再ビ之ニ對シ爭論セザルヲ得ザルニ至ルベク、而シテ斯カル爭議ハ到底樽俎ノ間ニ圓滑ナル妥局ヲ結ブコトハ極メテ得難キコトナレバ、其極終ヒニ再ビ日、清兩國間ノ平和ヲ破ルニ至ラザルヲ得ザルベシ。是レ恰モ日清兩國ガ朝鮮ニ關スル戦争ノ歴史ヲ再演スルニ過ギザルベク、然ルトキハ今回ノ盛舉ヲシテ殆ンド徒勞ニ歸セシメ、兒戲ニ終ラシムルノ恐レナキカ。

乙 朝鮮ヲ名義上獨立國ト公認スルモ、帝國ヨリ間接ニ直接ニ永遠ニ若クハ或ル長時間其ノ獨立ヲ保翼扶持シ、他ノ侮ヲ禦グノ勞ヲ取ルコト。

但シ此ノ方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ズ。

一 朝鮮ノ獨立國タルコト、及ビ其ノ疆土ヲ侵略スルノ意ナシトノコトハ、帝國政府ガ從來各國政府ニ向テ公言シタル所ナレバ、今假令間接タリトモ彼ノ半島ノ一王國ヲ以テ帝國ノ勢力ノ下ニ屈服セシムルトキハ、遂ニ他外國ノ非難ト猜忌トヲ招キ、或ハ之ガ爲ニ無數ノ葛藤ヲ生ズルノ憂ヒナキカ。

二 帝國政府ハ以上ニ述べタルガ如キ困難ヲ顧ミズ、朝鮮ヲ保護國ノ如ク取扱ヒ得ルトス

ルモ、他日或ル事變ニ關シ、清國、露國其他朝鮮ニ利害ノ關係ヲ有スル邦國ヨリ朝鮮ノ獨立ヲ侵害スルコトアルニ際シ、帝國ハ獨力ヲ以テ終始同國ノ外患ヲ防禦シ之レヲ保護スルヲ得ベキカ。

丙 朝鮮ハ其ノ自力ヲ以テ其ノ獨立ヲ維持スルコト能ハズ、又我ガ帝國ニ於テモ直接間接トヲ問ハズ、獨力ヲ以テ之レヲ保護スルノ責ニ任ズルコト能ハズトスルトキハ、嘗テ英國政府ガ日、清兩國政府ニ勸告シタルガ如ク、朝鮮領土ノ安全ハ日、清兩國ニ於テ之レヲ擔保スルコト。

但シ此ノ方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ズ。

一 帝國政府ニ於テ其戰勝ノ勢ヒヲ以テ清國政府ト協議センニハ、開戦前ニ於ケルガ如ク、同國政府モ頑冥固陋ノ說ヲ主張セザルベシト雖モ、彼ノ儀式的宗屬問題ハ到底之ヲ拋棄セザルベシ。而シテ我ニ於テモ開戦前ニ於テハ曾テ英國政府ニ明言シタル如ク、彼レ若シ屬邦論ヲ提起セザレバ、我亦必ラズシモ獨立論ヲ主張セザルベシトイヒシト雖モ、戰勝ノ後ニ至テハ清國ガ朝鮮ニ於ケル關係ニシテ實利上ト名義上トヲ論ゼズ、苟クモ帝國ガ朝鮮ニ於ケル關係ヨリモ優等ナル觀アルコトハ、到底帝國ガ寛容耐忍スルコト能ハザル所ナルベシ。故ニ或ハ斯カル無用ナル爭議ノ爲ニ遂ニ又議破ル、カ、否

ラザレバ談判遲延シテ長ク交戰國ノ情形ヲ繼續スルニ至ラザルカ。

二 假リニ清國政府ハ我ニ屈服シテ宗屬關係ノ問題ヲ提起セザリシトセンカ、日、清兩國ニテ朝鮮疆土ヲ保全スルニ付テハ、勢ヒ日、清兩國ヨリ朝鮮ノ政務ヲ補助スベキ監督官若クハ委員ヲ派遣セザルベカラザルノミナラズ、或ハ互ニ多少ノ軍隊ヲ駐屯セシムルノ要アルベシ。然ルニ日、清兩國ガ朝鮮ニ對スル利害ノ關係ハ常ニ相ヒ反對スルノミナラズ、日、清兩國政事家ノ主義モ常ニ氷炭相容レザルヲ以テ、兩國政府ガ朝鮮ニ對スル意見往々衝突シテ一致ニ歸セザルニ至ルコト必セリ。其ノ極竟ニ第一疑問ニ於ケルガ如キ結果ヲ生ゼザルカ。

丁 朝鮮ガ自力ヲ以テ獨立國タルコトハ到底望ムベカラザルコトトシ、又帝國ガ強力ヲ以テ之レヲ保護スルコトヲ不利ナリトナシ、又日、清兩國ニテ其ノ獨立ヲ擔保スルハ竟ニ彼此協同一致ヲ得ベキ望ミナシトスルトキハ、朝鮮ヲ以テ世界ノ中立國ト爲サンコトヲ我國ヨリ歐米諸國及ビ清國ヲ招誘シ、朝鮮國ヲシテ恰モ歐洲ニ於ケル白耳義、瑞西ノ如キ地位ニ立タシムルコト。

但シ此ノ方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ズ。

一 朝鮮國ニ最モ利害ノ關係厚キモノハ日、清兩國ニシテ、今回ノ交戦ノ如キモ亦タ日、清

兩國間ノ利害ノ衝突タルニ過ギザレバ、此ノ戰爭ノ結果ヨリ生ズル所ノ名譽ト利益トハ固ヨリ他ノ歐洲各國ヲシテ分受セシムルノ必要ナク、又之レヲ分與セントスルハ、諺ニ所謂犬骨折テ鷹ノ餌食トイフガ如ク、帝國ノ失フ所、得ル所ニ超過スルノ觀ヲ呈シ、頗ル帝國人民ノ満足セザル所ナルベシ。況ンヤ帝國政府ハ大兵ヲ出シ巨額ノ軍資ヲ費シタルノ結果、何ノ得ル所モナシトセバ到底世論ノ攻撃ヲ免レザルベキカ。

右ノ如ク考察シ來レバ、甲、乙、丙、丁ノ四問題ハ、何レモ一利一害ヲ存スルモノニシテ、若シ一度其ノ擇ブ所ヲ失スレバ頗ル禍害ヲ後世ニ遺スノ恐レナキ能ハズ。然レドモ朝鮮ニ關スル將來ノ位置如何ヲ考フレバ、遂ニ此ノ四策ノ外ニ出デザルガ如シ。而シテ其ノ何レノ方策ニ歸着スルヲ問ハズ、日、清交戰最後ノ勝敗相ヒ決シタルノ後ニ非ザレバ相起ラザルノ問題ナリト雖モ、廟算ハ豫メ此ノ内ノ一ニ付確定スル所ノモノニアラザレバ、今日外交上ノ操縦ニ於テモ又軍事上ノ行動ニ於テモ、頗ル緊要ノ關係アリ。故ニ豫メ廟謨ヲ確定シ置カレンコトヲ望ム。而シテ以上ニ到舉スル四方策ノ外尙ホ閣僚諸公ニ於テ高明ナル考案アラバ、固ヨリ其ノ方策ヲ聽カンコトヲ冀望ニ堪ヘズ。

右乞閣議。

井上公使ヨリ西園寺侯宛電報要略

明治二十八年七月二十七日發

目今露國へ對シ惡感情ヲ起サシメザルコト、先日予歸朝ノ節、内閣ニ於テ縷述シ、内閣ニ於テモ同說ナリシ。昨日ハ歸任シタルニ付露公使ヲ訪問シ、種々談話ノ内ニ、露公使ハ近來日本ノ新聞紙ガ濫リニ虛說訛傳ヲ掲載シテ、單ニ同公使ヲ中傷スルコト甚シキノミナラズ、引イテハ兩國ノ關係ニモ重大ナル影響ヲ及ボスヤモ計ラレズ、實ニ相互ノ爲メ、又政府ノ爲メ、充分嚴重ニ新聞紙ノ取締アラシムコトヲ望マシク思フトテ、其ノ虛說掲載ノ一例トシテ、七月十六日發兌ノ讀賣新聞ニ譯出シタル神戸「クロニクル」記事ヲ示サレタリ。依テ予ハ體能ク辯解シ置キタレドモ、今日ノ場合ニ斯カルコトアルヤ深ク注意セザルベカラズ。故ニ今後一層新紙ノ取締ヲ嚴ニシ、外交ニ關スル記事ハ特ニ謹慎ヲ加ヘシムルコトニ致シ、對韓將來ノ方略ハ柴、佐々

等ニ内話シ、全ク同意シ居ルニ付、野村内務大臣へ御話ノ上、右兩人ヲシテ新聞記者ニ説諭ヲナサシムルコト便宜ナラン。猶ホ過グル二十五日内謁見ヲ爲シ、二時ヨリ夜ニ入り九時頃マデ、ジユン／＼ト事情ヲ君主、王妃ヨリ細密ニ聞キ取り、餘程都合宜シク、疑惑モ氷解スルナラン。就テハ王妃ノコトヲ稱賛シテモ妄評ヲ下サルヤウ最モ御注意ヲ乞フコト又佐々、柴等ニ盡力セシムル手段最モ必要ナリ。臨時議會ハ何時開カル、ヤ。

朴泳孝逃走問題

(明治二十八年七月九日午後一時四十五分發)

朴ハ乘込ミタル御用船富士川丸ニテ昨八日午前四時出帆、釜山ヲ經、馬關ニテ檢疫ヲ受クル筈、自由黨熊本縣人田中賢道及ビ其ノ書生二名モ同行ス。

仁川 山座圓次郎

(明治二十八年七月十日午前九時三十分發)

九日發井上公使ノ電報二通ヲ落手ス。予ハ初メヨリ朴派ノ過激手段ヲ執ルコトヲ戒メ、頗ル苦心シタル程ナリ。顧問官ノ内ニモ今日トナリテハ朴派ヲ保護スル者ナシ。唯ダ朴氏逃亡ノ日、民間ニ激昂ノ模様アリシモ之ヲモ防ギ止メタリ。依テ御安心相成リタシ。朴ノ餘類ハ李圭完、申應熙逃亡シ、其他ハ依然出勤シ、淺山、恒屋モ同ジク出勤セリ、徐光範モ亦無事出勤セリ。

佐々木留藏ハ報知新聞ノ通信員尾崎行雄ノ子分ト自稱シ、性質正シカラズ。日本人ニテ之レト交ル者ナシ。同人ハ朴泳孝ニ因テ韓廷ニ雇ハレンコトヲ求メ、痛ク退ゾケラレタル爲メ深ク朴ヲ怨ミ居レリト云フ。金宏集入閣ノ件ハ内ニ盡カシ居レドモ、朴定陽ハ腰ヲ据ヘテ動カズ、國王モ亦之ヲ動カスヲ好マセラレザル様子ニ付困リ居レリ。(杉村)

(明治二十八年七月十日午前九時三十分發)

朴泳孝隱謀發覺事件ニ付其後ノ探偵ニ依レバ、兪吉濬ハ其ノ事ヲ豫知シ、密書ヲ金宏集ノ許ニ飛バシ、二三ノ同志ト計畫ヲ定メ、沈湘薰ヲシテ佐々木某ノ筆談書ヲ國王ニ呈セシメ、遂ニ金宏集ヲ呼ビ入レテ處分ヲ擔當セシメラレタルコトト信ゼラレタリ。兪吉濬前後ノ舉動ニ付テ考フルモ、彼等ノ計畫ニ相違ナキガ如シ。

本月八日拙者御機嫌伺ヒノ爲メ參内シ、且ツ金宏集ヲ尋ネタリ。同氏ハ再勤ニ意アル如キモ、朴定陽ハ依然トシテ出勤シ、國王ニモ俄カニ之ヲ替ユルヲ好マセラレザルガ如シ。同日王妃ヨリ閔氏ノ地方ニ在ル者ヲ呼ビ寄セラレ、又昨九日ノ御前會議ニ於テ國王ヨリ自今勅任官ハ予一人ノ隨意ニ任免スベシト御沙汰アリタル處、魚允中ノ外一人モ抗議スル者ナク、謹ンデ御受ケシタリト云ヘバ、將來ノ事甚ダ案ゼラレタリ。昨日鄭秉夏、安馴壽等飛報シテ、此際井上公使

早く歸任セラレザルトキハ、再ビ昨年以前ノ狀ニ復スベシトテ深ク恐レヲ懷キ居レリ。(杉村)

(明治二十八年七月十日午前九時三十分發)

朴泳孝ノ密謀ニ加ハリタル日本人三名程アル由申出デタルニアラズ、去ル七日三名ノ日本人ニ退韓ヲ命ジタルモ、右ハ何レモ此度朴泳孝ノ密謀發覺ニ際シ、當政府部内ノ混雜ニ乗ジ、種種ノ惡事ヲ働ク恐レアルニ依リ退韓ヲ命ジタルモノニシテ、其ノ密謀ニ關係アリト認メタルニアラズ。尤モ其内佐々木秀雄ナル者ハ、朴泳孝ノ密謀ヲ他ヨリ聞キ知り、之ヲ或ル韓人ニ告ゲタルモノニシテ、同人ガ日本公使館ニテ取調ベラ受ケタル節申立テタル所ニ據レバ、或ル有力ナル顧問官モ亦タ朴ノ密謀ニ加ハリ居ル趣キニ付、杉村トモ相談ノ上、今尙ホ取調中ナリ、委細ハ書面ヲ以テ已ニ具報セリ。(京城、内田定槌)

(明治二十八年七月十日午後十二時三十分發)

七日發電報ヲ以テ尙ホ凡ソ二十名許リ退韓ヲ命ズル筈云々ト申出デタルハ、去ル四日發電訓ニ基キ、少シニテモ今後地方ノ安寧ヲ害シ、又ハ風俗ヲ壞亂スルニ至ルベキ懸念アルモノヲ此際悉ク處分スル主意ニ出デタルモノニシテ、素ヨリ此等ノ者ガ今回朴泳孝ノ密謀事件ニ關係ア

リト認め、之ニ退韓ヲ命ズル次第ニアラズ。然シ猶ホ取調ベノ上、若シ右ノ密謀ニ與リタルモノナルヲ發見シタルトキハ、直ニ逮捕ノ上相當ノ處分ヲ行フ筈ナリ。而シテ顧問官ガ果シテ此ノ密謀事件ニ關係セシヤ否ハ杉村ト協議ノ上極内々取調中ナリ。(内田)

(明治二十八年七月十一日午前七時二十分發)

京城ノ風説ニ據レバ彼等ノ隱謀ハ事實ニシテ、星顧問關係アルガ如シト、又韓廷ノ黒幕ハ、「リゼトラ」ナリト云フ、御參考マデ。(仁川、山座)

(明治二十八年七月十一日午前十一時二十分發)

昨日入港セシ富士川丸ハ風波ノ爲メ未ダ碇泊中、朴ハ早川誠一郎、申ハ吉田一郎、李ハ古城^{セツヤウ}辰雄ト變名シ居レリ。露國軍艦「チルニロフ」及ビ水雷艇五艘今朝入港ス、右ハ芝罘ヨリ浦鹽へ進航ノ途次風除ケノ爲ニシテ、明後日出港ノ筈ナリト云フ。(釜山、加藤領事)

(明治二十八年七月十一日午前十一時四十分發)

佐々木秀雄ハ井上公使來着セラル、マデ留置キノ筈ナリ、當國人民及ビ我が居留民ハ最早激

昂ノ模様ナシ。(京城、内田)

(明治二十八年七月十一日午後四時四十一分京城發)

追々探偵シタル所ニ據レバ、朴泳孝ヲ陥ル、計畫ヲ立テシモノハ愈々愈吉濬ニシテ、金宏集、沈湘薰、「コウケイクン」等ト兩三日前ヨリ密議シタルモノ、如シ。昨日及ビ今日トモ沈湘薰ハ内々人ヲ派シ、自分ハ王命ニ依リテ無餘儀該密議ニ加ハリタルコトヲ辯解シ、且ツ日本公使館ノ助力ニ依リテ内部大臣タランコトヲ望ム旨ヲ述ベタリ。昨今ノ模様ニテハ總理大臣以下ノ位地ハ一方ニハ閔黨ヲ入レント欲シ、一方ハ「ハリウ」黨ヲ入レント欲シ睨ミ合ヒノ姿ナリ。大院君ハ内々人ヲ派シ、今日ノ如ク王妃跋扈シテハ國家滅亡スベシ。昨年ハ日、清兩國ノ大勢ニ暗ク事ヲ誤リタルモ、今度ハ萬事日本公使ノ意志ヲ受ケ、王妃取抑ヘ方ニ盡力シタシト申越セリ。魚允中、金允植等モ亦内心大院君ヲ利用セントスル考案アリ、又同君ヨリ岡本へ李載冕ヲ宮内大臣トセバ、不充分ナガラモ王妃ヲ制スルヲ得ベキ旨申越セリト。但シ大院君ノ事ニ付イテハ余ハ常ニ之レヲ抑ヘ置ク方針ヲ執レリ。今朝井上公使ノ來電ニ接シ直チニ内謁見ヲ申込ミタリ。(杉村)

(明治二十八年七月十二日午後七時三十五分發)

此度朴泳孝密謀事件ノ證據トシテ、當國政府ニ差押ヘアル佐々木秀雄ト或ル韓人トノ筆談書類ニハ、星、岡本、恒屋、淺山、外ニ三名ノ日本人モ亦同謀者トシテ記載シアル趣ナルガ、日本公使館ニテ今日マデ取調べタル所ニヨレバ、未ダ佐々木ノ話ニヨリ外ニ此等ノ日本人ガ朴泳孝ノ密謀事件ニ加ハリタリトノ證據ヲ發見セズ、併シ此等ノ人々ハ矢張り去ル九日發ノ電訓ニ基キ、司法上ノ手續ニ依リ日本公使館ニ引致シテ其ノ事實ノ有無ヲ取糺スベキヤ、又ハ井上公使ノ來着セラル、マデ之レヲ見合ハスベキヤ、至急電訓ヲ待ツ、杉村ハ公使ノ來着ヲ待ツ方ヨロシカラント申ス。(京城、内田)

(明治二十八年七月十三日發)

朴密謀事件ニ關係ノ證據ナキ星、岡本等、司法上ノ手續ニヨリ取糺方ハ井上公使着任マデ見合スベシ。又此際危險ノ虞レアル者ハ退韓處分スベシ。(東京、西園寺)

(明治二十八年七月十六日午後一時三十分發)

今日マデ取調べタル所ニヨレバ、朴ハ唯ダ王宮ノ護衛兵ヲ交代セシムル爲メ過激手段ヲ以テ訓

練兵ヲ推シ入レントシタルモノニテ、王妃暗殺ヲ企テタルニ非ザルガ如シ。而シテ右ニ付テハ星、恒屋、淺山、及ビ朴ト同行シテ歸朝シタル熊本縣人田中賢道ナルモノ其ノ謀リゴトニ預リタル疑ヒアリ。(京城、内田)

(明治二十八年七月十六日午後二時四十五分發)

昨十六日宮内協辦金宗漢其職ヲ免ゼラレ、米人「リゼンドル」宮内顧問トナレリ、井上公使ヘ御通知ヲ乞フ。(杉村)

(明治二十八年七月十九日午前五時五分發)

今朝仁川安着、明朝入京ス、杉村ニ面會セリ、先ヅ無事ナリ。(仁川ニテ、井上)

(明治二十八年七月十九日午後一時二十分發)

貴電落手、三浦子ニ左ノ電信ヲ傳ヘヨ。

今日困難々々ト云フ時ハ何事モ處スル能ハズ、人ノ説ヲ聞キ自家ノ決心ヲ變ズルガ如キハ其意ヲ得ズ、國家ノ爲メ盡スベキ時ナリ、是非約束セシ通り決行アラムコトヲ敢テ忠告ス。

至急返電アリタシ。(仁川井上、東京野村子へ)

(明治二十八年七月十九日午後六時五分發)

三浦ノ事ハ一切閣下ノ御意見ニ委カスベシ。但シ彌ヨ赴任スルトキハ通常一般ノ公使タルヨリ以外ノ條件忤ヲ附セザルヤウ御注意アリタシ。且ツ井上歸朝ノ時日確定ノ上ナラデハ、無論三浦赴任スルコトハ規則上許サルベシ。右西園寺侯へ。(大磯、陸奥)

(明治二十八年七月十九日午後六時十五分發)

高田栖岸ヲ調べシニ、朴泳孝ハ王妃ガ露國公使ト結托シ、事アル日ハ君主ヲ擁シテ露國ニ遁レントノ底意アルヲ知り、兵力ヲ以テ王妃ヲ害セントスルノ風説アリ、近日何ニカ「コトセ」アルベシ、此事ヲ知ルヤト佐々木ニ問ヒタルニ、佐々木ハ只ダ「ソウカ」ト答ヘ分カレシト云フマデナリ。別ニ深キ考ヘナキモノ、如シ。書面直グ發送ス。(京都府知事)

朝鮮密使露領浦港ニ入ル件

頃日朝鮮一官吏陸路露領ニ入り「ボシエツト」ヨリ浦港へ密行候趣聞キ及ビ候ニ付、其ノ何處ヨリ何ノ爲ニ來港セシヤ、彼レ是レ穿鑿致候得共、極メテ秘密ヲ守リ、如何程搜索ヲ凝ラスモ乍遺憾更ニ其ノ要領ヲ得ザルノミナラズ、姓名サヘモ秘シテ告ゲズ、然ルニ最初當港來着ノ節、當市警察署長出迎ヘノ上、丁寧ノ待遇ヲ爲シ、特ニ市廳ノ客室ヲ以テ其ノ寓居ニ充テタルニ、彼レ爾來閉居、肯テ外出セズ、依テ察スルニ、右官吏ノ來港ハ最初ヨリ談合スル所アルモノニシテ、決シテ地方官等ノ漫遊ケ間敷事ニアラザルハ瞭然ニ有之、殊ニ同人ハ密書ヲ齎ラシ來リ、之レヲ沿海州軍務知事ニ致セリト云ヒ、又軍務知事ハ兩三日前突然黑龍沿道總督所在地「ハッロフスク」府へ出發相成候處、其用向キハ全ク右朝鮮官吏來港ノ爲メニテ、彼レハ知事ヨリ報告ニ接セバ、直ニ歸途ニ就クベシトノ内報モ有之、而シテ該官吏ノ身柄等ニ就キ暗ニ搜リ得タル所ニ據レバ、官位顯著ナル人物ノ様ニモ被想、又今ヨリ三週日前京城ヨリ當地ニ向ケ

發足セシ縉紳アリトノ風説ヲ耳ニシ在レバ、露領「ボシエツト」マデ陸行セシモノト做シ、日數ヲ繰レバ丁度其風説ニ符合スルガ如ク、畢竟同人ノ渡來ハ樞要ノ事件ヲ委任セラレタル密使ニシテ、或ハ夫ノ王妃及ビ露公使「ウエーバー」氏等ノ共謀ニ出デタル隱險手段ノ端緒ニテモアルニ非ザル哉、餘リ漠然ノ報告ニシテ隔靴搔痒ノ嫌ヒヲ免レズ候得共、曩者朝鮮内閣ニ波瀾起リ、朴詠孝等逃亡ノ事アリ、或ハ御參照ノ一助ニモ可相成哉ト存候ニ付、前顯探知ノ儘不取敢及報告候。敬具

明治二十八年七月二十六日

在 浦 潮 港

二 橋 謙

朝鮮ニ關シ露國ト協商スルニ付 井上伯ノ意見

余ハ露國ト談合ヲ付クル件、並ニ其ノ條件ハ專ラ政府ノ決定セラルベキ筋ト思考ス。併シ余一人ダケノコトヲ申セバ、余ハ自分ノ意見ヲ諄々朝鮮國王並ニ王妃ニ吐露シタレバ、今ニ至リテハ大ニ其ノ疑念ヲ氷解シタルガ如シ。又タ目下ノ形勢靜謐ニ歸シ、余ハ餘リ干涉セズ、一般ノ平和ノ爲ニ誠實ニ盡力中ナリ。

露國ト談合ヲ付クル件ニ付、余ノ意見ハ左ノ如シ。假リニ右談合ハ從來露國トノ關係ヲ維持スル爲メ、事情止ムヲ得ザルニ出デタリトスルモ、日露兩國トモ朝鮮國土ノ完全ヲ傷ケザルコトヲ以テ根本的條件ト爲スベシ。之ヲ要スルニ右ノ談合ハ英國ニ於テ如何ナル影響ヲ生ズベキヤ、之ヲ考察スルコト緊密ナリ。右談合ノ目的ハ日露兩國ニ於テ時期ノ來ルヲ待ツノ手段ヲ得ルニアレバ、英國ヲシテ之レニ同意セシメ、事局ヲ傍觀セシムルヤウ説キ勸ムルコトヲ得バ宜

シケレドモ、若シ然ラザルトキハ余ハ英國ノ歡心ヲ失フノ得策ナルヲ見ルコト能ハズ。何トナレバ英國目下ノ姿勢ハ大ニ我ガ對外政略ヲ助クルモノナレバナリ。又露國一國ト談合ヲ付クベキヤ、若クハ他諸國トモ談合ヲ付クベキヤハ同ジク緊要ナル一問題ナリトス。

井上伯朝鮮大君主へ謁見顛末 并ニ寄贈金案文

余歸任以來朝鮮大君主陛下ニ三度ノ内謁見ヲ遂ゲ、何卒シテ兩陛下ノ眞意ヲ探リ得ンコトヲ務メ、並ニ帝國政府誠意ノ所在ヲ縷々陳述シ（常ニ謁見ノ時ハ對話五時間以上ニ及ベリ）且ツ其前兩陛下ニ信用アル韓官某ヲ中間ニ立テ、豫メ兩陛下ノ疑念アラバ一モ包藏スルナク忌憚ナク吐露セラル、様トノ情意ヲ通ジ、務メテ兩陛下ノ懷カレタル御疑ヒヲ霽サンコトニ盡力致候。其大要ハ余ヨリ兩陛下ニ向ヒ「昨年余ハ我 天皇陛下ヨリ貴國獨立ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルコトニ盡力ス可キ旨ノ内諭ヲ奉ジ、赴任已來屢々大君主陛下へ内謁見ヲ遂ゲ、又内閣諸大臣ニモ面會シテ内政改革ノ規模ヲ相立テンコトヲ勸告致シ、遂ニ二十ヶ條ノ建議ヲ内奏シ、其末王妃ノ政治ニ容喙セラレタル弊ヲ論ジ、過激ニモ之ヲ下戾シ、忠告ハ口ヲ閉ンコトヲ申出デタリ。然ルニ陛下ハ強ヒテ下附ヲ拒マレ、内閣大臣等ハ誓約ヲ記載シ來リ、纔カニ其結末無事ヲ告グル

ニ至リ、爾後事々物々忠實ニ勸告ヲ務メタリシハ兩陛下御記憶アルナラン。而シテ貴國ニハ古來ヨリ私黨軋轢ノ弊習アリテ、各々自家ノ黨務ヲ張ランガ爲メ猜疑離間其間ニ行ハレ、改革ノ實行ハ姑ク舍キ、諸大臣ハ其心ヲ安ジテ政務ニ從フ能ハザル有様ナル故、余ハ深ク立入りテ其ノ弊習ヲ矯正セント試ミ、多少政事上ニモ干涉ヲ爲シタリ。然ルニ又一方ニハ余ノ干涉過強ニシテ恰モ一國ニ二人ノ主權者アル姿ナリトテ陰ニ之ヲ攻撃シ、或ハ之ヲ兩陛下ニ讒言シタル者之レ有リテ、兩陛下ニモ一時之レニ迷ハレタルヤニ漏聞致シ候ニ付、余ハ斯ノ如キ有様ニテハ余ノ忠言ハ却テ貴國ノ惡感情ヲ惹起シ、兩國ノ交際ニ妨害アラシコトヲ恐レ、暫ク手ヲ引キ傍觀ノ姿ニ任セ置キタルハ兩陛下ニモ御記憶ノ事ト存候。然ルニ本使ガ忠告干涉ヲ加ヘタル結果如何ト云フニ、政府内黨派ノ軋轢ハイヤガ上ニモ甚敷、内閣員ハ一日寧處スル能ハズ、轉ジテ大君主ノ大權ト内閣ガ主張スル權限並ニ各大臣間ノ權限ニ互ニ衝突ヲ起スニ至レリ。故ニ今日ハ幾分カ舊狀ヘ立戻リ、内政改革ノ目的ヲ遂グルヲ得ズ、隨テ 天皇陛下ノ恩召ヲ達スルヲ得ザルニ付、余ハ實ニ憂悶ニ堪ヘザルナリ。余熟慮スルニ、今日マデノ如ク兩陛下ヲ初メ貴國諸大臣ガ、我が政府ニ向テ御信用ナクテハ、我 天皇陛下ノ希望セラル、内政改革モ、獨立ノ鞏固モ到底行ハルベキ道理ナキニ因リ、此際先ヅ兩陛下ノ恩召ヲ慥メタル上、將來忠實ニ勸告ヲ試ムルカ、又ハ傍觀ノ地ニ立ツカノ所見ヲ定ムルヲ必要ト存ゼリ。就テハ兩陛下ガ余ガ是レマデ

貴國ニ對シタル行爲ニ付キ御疑惑ノ廉有之候ハ、何卒御腹藏ナク御申聞相成候様致度、左候ハ、逐一拜聽ノ上辯明スベキハ之ヲ辯明シ、事情ニ暗キ所ハ謹ンデ拜聽シ、然ル後余ノ意見ヲ具陳スベシ」ト奏上シタル處、國王、王妃ニハ明治ノ始メヨリ今日ニ至ルマデノ日韓交渉ノ事歴ヲ詳叙シ、且ツ明治十七年變亂ノ始末、防穀ノ談判並ニ昨年我兵王宮ニ侵入シタル件ニ付疑惑ヲ懷カレタル廉々具サニ申述ラレタリ。而シテ其中王妃ノ申述ベラレタル要領ヲ摘メバ「今ヨリ二十四五年前、貴政府ハ森山茂ヲ釜山港ニ派シ、國書ヲ當時ノ東萊府使鄭顯德ニ致シ轉達ヲ求メタルニ付、同府使ハ之ヲ京城ニ傳達シタリシニ、恰モ大院君執政ノ時ナレバ、同君ハ專ラ斥和說ヲ主張シ、文體例ニ背クト云フヲ辭柄トシ、同府使ヲシテ其ノ國書ヲ返却セシメタリ。東萊府使ハ其命ヲ奉ジタルモ之ヲ達スル能ハズ、國書ヲバ自分ノ手許ニ預リ、政府ニ向ツテハ日本使節ハ國書ノ舊例ニ違フヲ詰責セラレ、辭窮シ國書ヲ撤回シテ歸國シタリト報國セシカバ、大院君大ニ悦ビ、甚ダ得色アリシ。然ルニ當時閱計鎬（閱致祿ノ養子ニシテ王妃ノ義兄ニ當レリ）ハ若シ國書ヲ拒絕スルトキハ、必ラズ日本ノ怒リヲ招キ、後害ヲ醸スノミナラズ、日朝ハ唇齒ノ國柄ニシテ、相共ニ提携セザレバ將來開明ニ導ク能ハザルコトヲ察シ、之レヲ内奏シ、大院君ノ兄李最應ト謀リ、窃カニ今ノ總理朴定陽ヲ釜山ニ派シ、其形勢ヲ觀察セシメタルトコロ、大院君ハ之ヲ探知シ、賣國ノ奴ト稱シ、右兩人ヲ殺セリ（閱ハ明治六年ニ、李ハ十五年ニ

殺サル、其後閔奎鎬世道トナリ、閔計鎬ノ養子閔昌植之ヲ輔翼シ、養父ノ遺志ヲ繼ギ、明治九年中日ト媾和シ、専ラ開國說ヲ執リシ處、大院君窃カニ之ヲ嫉惡シ、壬午ノ年（即チ明治十五年）兵隊ヲ煽動シテ亂ヲ興シ、王宮ヲ圍ミ自身ヲ廢セント謀リシ上、右ノ閔昌植并鎌鎬其他數人ヲ殺シ、且ツ日本公使ヲ逐ヒ其館ヲ燒キ拂ヒタリシ。當時自身ハ常人婦ノ服ニ變粧シ、辛ウジテ亂ヲ忠州ニ避ケタリシガ、大院君ハ死去ト聲言シ、國中ニ令シ喪ヲ發セシメタリ。當時閔泳詔等國難ヲ憂ヒ、趙寧夏等ト謀リ窃カニ在馬山浦ナル清艦ニ赴キ、馬建忠、丁汝昌等ニ密告シ、大院君ヲ制センコトヲ依頼シタルニ因リ、同君ハ終ニ清國ニ拘留セラル、身トナレリ。是ニ於テ自身ハ再ビ宮中ニ還ルヲ得タリ。其後金玉均、朴泳孝ノ徒、相團結シテ開化黨又ハ日本黨ト稱シ、閔氏ヲ攻撃シ、終ニ不幸ニモ甲申（明治十七年）冬ノ變亂ト爲リ、而シテ金、朴等ハ専ラ當時日本公使ニ依頼シ、日本黨ヲ以テ目セラレタリ。降テ昨年王宮ノ變亂ニ及ンデハ、意外ニモ日本兵ハ嘗テ初發ヨリ日本ヲ敵視シタル大院君ヲ推シテ王宮ニ入レ、再ビ政權ヲ執リ、大君主ハ虛位ヲ保ツノミニ至レリ。其後貴下ノ盡力ニ依テ大院君ハ政權ヲ離レ舊體ニ復セラレタリト雖モ、尋イデ官制ヲ設定シ、之ニ從テ内閣ヲ組織シタルニ及ンデハ、内閣ノ權力ハ常ニ君主ヲ壓制シ、凡百ノ政務ハ内閣ノ專權ト一變シ、君主ハ唯ダ其奏聞ニ從テ裁可ヲ與ヘザルヲ得ザルニ至リタルハ實ニ此頃マデノ有様ナリキ。要スルニ日本ト相提携セントシタル閔氏ハ、

却テ日本ヨリ斥ケラレ、而シテ嘗テ日本ヲ排斥シタル大院君ハ却テ日本公使ノ爲ニ推サレタルガ如キハ遺憾ノ次第ナリ云々」ニ付、余ハ之レニ向テ一々辯明ヲ加ヘ、兩陛下ノ御疑惑ヲ解キタル後、我 天皇陛下並ニ政府ノ誠意誠心飽クマデ朝鮮ノ獨立ヲ鞏固ナラシムルト同時ニ、王室ノ安全ヲ圖ルニ在レバ、今後王室ニ對シ朝鮮ノ王族臣民ニシテ不軌ヲ圖ルモノアルトキハ、日本政府ハ兵力ヲ以テモ王室ヲ保護シテ貴國ノ無事安寧ヲ謀ルベキニ付、御安心遊バス可シト斷言シタル處、此ノ一言ハ著シク兩陛下ニ感動ヲ與ヘタル様子ニテ、御安心ノ色外ニ顯ハレ候。此頃恰モ朴泳孝ハ日本人ヨリモ信用ヲ失シ、足ヲ止ムル能ハザルニ付、米國ニ赴クトノコト朝鮮公使ヨリ電報アリタルニ因リ、益々安心セラレ、余ノ申出デハ一々信用シテ聽キ入レラル、ヤウ推察候ニ付、余ハ兼テ御内話ニ及ビ候通り、脈搏ノ善キ頃合ヲ見計ヒ、暗ニ「我が政府ハ昨年兵亂ノ爲メ貴國平安、黃海、忠清ノ各道戰地トナリ、秋穫減少、政府ノ財政困難ノ一因ト爲リ、且ツ王室財計ノ基礎鞏固ナラザルヲ深ク慮リ、實ハ内々寄贈金ノ詮議ニ及ビ、本年秋開カルベキ臨時議會ニ之ヲ提出スル運ニ成リ居レリトノ意味ヲ示シ、且ツ右ノ詮議ニ及ビタルハ全ク余ハ先般歸朝シテ貴國王室ノ屢々混雜ヲ生ゼシ原因及ビ内情、王妃ノ賢明並ニ是レマデ不幸ニ遭遇セラレシ次第、其他各黨派ノ怨恨ヲ懷キ復讐的政治ヲ爲スノ現情等ノ真相ヲ 天皇陛下ニ奏上シ、并ニ政府諸大臣ニ説明シタル結果ナリト陳奏シタル處、兩陛下ハ貴下ノ誠意ヲ以

テ我國ノ真相貫通シ 天皇陛下並ニ貴政府ハ斯クマデ我國ノ事ヲ思ハル、ヤト、且ツ喜悅シ且ツ安心セラレタル様子ニテ、一回ハ一回ヨリモ打解ケラレ、是レマデ秘シ置カレタル我國トノ關係モ追々相洩サレ、將來余ノ陳奏スルコトハ必ラズ確守スベシト明言セラル、ニ立チ至リ候ニ付、是レニテ兩陛下ガ帝國政府ニ對セラル、御疑惑ハ漸ク霧散シ、隨テ余ニ對スル御疑念モ相霽レタルモノト被推察候。尤モ兩陛下ハ常ニ深宮ニ在シテ、左右近侍ヨリ群少ノ雜人多ク、機ニ投ジ、折ニ觸レテ浮説ヲ進メ、兩陛下ヲ蠱惑スルノ恐レアレバ、余嘗テ明言セシ如ク、今日ノ狀態ヲ永ク持續センコトハ何分保證難致候得共、積日ノ盡力ニテ斯クマデニ内情ヲ打明カシ、將來余ノ言ヲ確守ス可シト明言セラレタル程ナレバ、ヨモヤ俄カニ這般余ノ歸任シタル目的ニ向テハ一段落相附キタル姿ニ有之候間一先ツ御安心相成度候。

就テハ先般歸朝中閣議内定ノ上、余ヘ訓令セラレタル金圓寄贈ノ事ハ、愈ヨ前議ノ通り相運ビ候ヤウ致度、且ツ余ノ意見書ニハ貳百萬圓乃至三百萬圓ト申立候得共、實際三百萬圓ナケレバ將來ノ割振り方不充分ナルノミナラズ、其ノ金高モ三百萬圓ト内密ニ昨日謁見ノ節兩陛下ニ相洩シ候ニ付、必ラズ三百萬圓ト御取極メ相成度、然ルニ右寄贈ノ名義其ノ當ヲ得ザル時ハ、俄國ヲ始メ他ノ各國ハ必ラズ疑議ヲ其間ニ容レ、外交上ニ面白カラザル影響ヲ來スカノ恐レ有之候ニ付、名義ノ撰擇方ニ付充分御詮議相成度、余ノ考ヘニテハ別紙案文ノ趣意ニテ可然ト存

候、將又該寄贈金ノ使用方法ニ付、余ハ左ノ意見ヲ有シ居リ候間、愈ヨ寄贈ノ際ニハ條件トシテ王宮及ビ政府ト内約致シ置キ可申考ヘニ御座候。

一、凡貳百萬圓

右ハ京城、仁川間ニ於ケル鐵道建築ニ使用ス可シ。同金高ノ内百萬圓ヲ以テ王室所屬ノ株金ト爲ス可シ。同事業ハ固ヨリ朝鮮政府ニ屬スト雖モ、其ノ建築ニハ必ラズ我が技師主タル職工且ツ入用ノ材料中多クハ我國ヨリ仰グ可シ。尤モ木石材料ハ當國品ヲ用キ、人夫モ可成丈當國人民ヲ使用セシムベシ。練化石ノ如キモ亦之レヲ當國內ニテ製造セシムル考ヘナリ。

一、凡五拾萬圓

右ハ當年度及ビ來年三月マデノ政府經費ノ不足ヲ補充ス可シ。

一、五拾萬圓

王宮財産ニ宛テ殖利ノ方法ニ從ヒ永久ニ之レヲ保存スル方法ヲ設ク可シ。

一、前掲鐵道建築費ヲ元資トシテ兌換紙幣ヲ發行シ、同時ニ機關銀行ヲ創立セシメ、何時ニテモ交換スル嚴重ナル制度ヲ立テ、以テ紙幣ノ流通ヲ圖ラシメザルヲ得ズ、國內ニ於ケル物品買入並ニ賃銀等ハ總テ紙幣ニテ支拂ハシメ、自ラ紙幣流通ノ端緒ヲ開クニ

至ル可シ。然ルトキハ貳百萬圓ノ元資ヲ以テ少ナクモ貳百六十萬圓（三割増シ）ノ紙幣ヲ發行スルヲ得可シ。

一、日本銀行ヨリ借入レタル三百萬圓ノ高ヲ返濟期限ヲ十五年乃至二十年ノ年賦ニ延期スルコト。

一、客年我が軍隊ニテ架設シタル仁川ヨリ京城ヲ經テ釜山ニ達スル電線ハ、兒玉陸軍次官ヨリ聞ク所ニ據レバ、其ノ架設費十四萬圓乃至十五萬圓ノ由ニ付、之レニ雜費ヲ加算シ概算二十萬圓トシテ別ニ貸金ト爲ス可シ。

右寄贈金處分ニ關スル余ノ意見概略御承知マデニ申進候。要スルニ日韓兩國ノ交情ヲ親密ニシ、之レヲ悅服セシメントスルニハ、所謂「一日暖レ之、十日寒レ之」ノ愚ヲ學ブヲ相避ケ、時ニ之レノ冷却セザランコトニ注意シ、時機アラバ之レニ投ジテ交縁ヲ深クスルヤウ特ニ注意シ、六、七年間平和ヲ維持スルコト專要ニ存候ニ付、寄贈金ノ儀ハ幾重ニモ詮議ヲ盡サレ、臨時國會ニハ必ラズ御提出相成候様致度候。

明治二十八年八月六日

特命全權公使 井 上 馨

以書東致啓上候。陳者上年日清兩帝國ノ間ニ興リタル貴國獨立ノ問題ヨリ、施イテ同兩國ノ開戦ト爲リ、之レガ爲ニ貴國平安、黃海、忠清諸道ノ内、或ハ兩兵交戦ノ場ト爲リ、或ハ兵馬往來ノ衢ト爲リ、其衝ニ當リシ市邑概ネ居民ハ離散シ、田野ハ顧ラレズ、遂ニ秋穫ノ時機ヲ失ヒ、加之、南道各地亢旱ノ災、東徒ノ亂アリテ政府ノ收入減縮シ、財政ノ困蹙ヲ致シタルハ、帝國政府ノ深ク之レヲ明察シテ均シク痛苦ヲ感ズル所ニ有之候。今ヤ日清兩帝國ノ和議既ニ調ヒ、貴國獨立ノ問題確定シタリト雖モ、兵亂ノ餘弊未ダ回瘳セズ、政府財政ノ基礎未ダ立タザルガ如シ。依テ帝國政府ハ目下貴國困難ノ事情ヲ洞察シ、謹シデ茲ニ我
天皇陛下ノ諭旨ヲ奉ジ、日本銀貨參百萬圓ヲ貴國政府ニ寄贈シ、聊カ其ノ損傷ヲ填補スル費途ニ充テント欲ス。唯ダ同寄贈金ハ前陳ノ趣旨ニ出デタルニ付、願クハ之ヲ以テ貴王室財計ノ基礎ト爲シ、且ツ以テ國家有利ノ事業ニ投ジ、上下ノ便益ヲ圖ラレンコト、帝國政府ノ深ク希望スル所ニ有之候。依之特ニ茲ニ照會得貴意候。敬具

年 月 日

大日本帝國外務大臣

大朝鮮帝國外務大臣閣下

井上伯朝鮮大君主へ謁見顛末并ニ寄贈金案文

對韓政策ノ訓令ヲ待ツノ議

三 浦 梧 樓

元身ヲ戎馬ノ間ニ委シ外交ノ術ヲ識ラズ、又久シク閑散ノ地ニ居リ世界列國政治ノ趨勢ニ疎シ。然ルニ今般身自カラ計ラズ、政治家ノ最モ難局ト爲ス所ノ朝鮮ニ職ヲ奉ジテ駐劄シ、内ハ韓國ノ大改革ヲ負擔シ、外ハ列國ノ外交家ト競争セントスルハ、任重ク責大ニ、私カニ寒心スル所ナリ。曾テ聞ク、久シク漢城ニ駐在スル一我外交官ハ客ニ語テ曰ク、我が政府、公使ヲ更迭スル頻繁ナリ、而シテ新公使ノ來ル毎ニ各自互ニ其執ル所ノ方針ヲ異ニスルヲ以テ、予ガ如キハ徒ニ前年施行セシモノヲ再三再四復習スルニ過ギズ、豈ニ充分ノ成功ヲ望ムベケンヤ、嘆息ニ堪ヘザルナリト。此言恐ラクハ從前我對韓策ノ不確定ノ證言ニ非ラザルナキヤ、想フニ我が公使ノ効ヲ舉グル能ハザリシハ、京城ニ派遣スル其人ニ乏シカリシニ非ラズシテ、國是未定

ノ爲メ對韓策ナル堤防ハ隨テ築キ隨テ休シ、隨テ破レ隨テ復シ、實ニ前年ノ事業ヲ復習スルガ如キ外觀ヲ呈スルニ非ザルナキヤ。然レドモ外交ニ熟練ナル井上伯ノ如キ、内外ノ名望ヲ有セシメバ外交ノ妙ナル臨機應變能ク機會ニ投ジ、國威ト利益トヲ保全スルコトヲ得ベキモ、梧樓ノ如キ、才疎ニ識淺ク、外交ニ經驗ナキモノハ、帝國ノ確乎タル對韓ノ國是ヲ奉ジ、其ノ方針ニ率由スルニアラザレバ、恰モ航海ニ羅針ナク、暗夜ニ月星ナキガ如ク、危險謂フベカラズ。況ンヤ航路ノ彼岸ヲ知らズ、徒ラニ風位ニ隨フテ漂流スルハ長ク堪ユル所ニ非ザルノミナラズ、遂ニ不測ノ禍ニ沈マンニ於テオヤ。若シ夫レ征清ノ役前ノ如ク、清國トノ交渉ノミナラシメバ遷延數年ヲ經過シ、前途ノ方向ヲ定メズ、暫ク晴雨ヲ窺ヒ風位ニ隨テ動搖スルモ猶ホ能ク禍ヲ轉ジテ幸ヒトナスコトヲ得ンモ、去歲戰勝以來、天下ノ耳目頓ニ一變シ、帝國ノ勢ヒヲ猜忌スルモノ日ニ多キヲ加ヘ、殊ニ清國ヲ凌駕スル一大強國ノ朝鮮ノ内政ニ干涉シ、一着ヲ誤レバ挽回其期ナキ恐ルベキ潛勢力顯ハレ來ラントシ、東洋戰雲ノ餘風歐洲ニ波及シ、風雨陰晴トシ難ク、天候ハ寧ロ雲脚ノ將サニ急ナラントスルヲ豫期スベキノ形勢ナリト、果シテ然ラバ風雨ノ失馳ヲ見ルベキハ鷄林半島タルハ火ヲ觀ルヨリモ明カナリ。故ニ豫メ三條ヲ陳列シテ以テ將來ノ訓令ヲ乞フ所以ナリ。願クバ更ニ審議シテ不拔ノ對韓方針ヲ國是ト定メラレンコトヲ。

第一條 去歲征清ノ主義ニ則リ、朝鮮ヲ同盟ノ獨立王國ト認定シ、將來我が獨力ニテ全國

ノ防禦及ビ改革ヲ負擔スルノ責任スル方針ヲ執ルベキヤ。

第二條 我ガ獨力ニテ朝鮮獨立改良ノ責務ヲ避ケ、又保護及ビ占領ノ雄心ヲ抑制シ、歐米列國ノ公平ナルモノト相謀リ、共同保護ノ獨立國トナスノ方針ヲ執ルベキヤ。

第三條 早晚必ラズ一二強國ト紛擾ヲ生ズベキハ最モ親易キ趨勢ナレバ、大難事ノ起ラザル今日、寧ロ斷然決意一強國ト高麗半島ヲ分割占領ノ方針ヲ執ルベキヤ。

右三條中第一ハ最モ公明正大ノ方策ナレドモ難中ノ難事ニシテ、將來内外ヨリ困難蟄集シ、幾多ノ人力ト金力トヲ消費シ、恩威並ビ行ハシムルニハ長日月ノ光陰ヲ要シ、殊ニ一ニ強國ト早晚干戈ヲ交ユルノ決心ナカラザルベカラズ（然レドモ我ガ堪忍全力ヲ始終一貫シテ注射スル數年ナラバ、朝鮮ハ我ガ保護ノ下ニ屬スルノ結果ヲ呈シ、又天下ニ對シ好辭柄ナランカ）。

第二條ノ政策ヤ利益ト責任ヲ關係ノ各國ニ分チ、偏ニ強國ノ兼併蠶食ヲ防禦スルノ意旨ヲ明カニセバ易々タル事業ナルベシ。若シ此ノ方針ヲ採ラバ今日ニ於テ外人ニ先タチ、他日我ガ國人ノ利益ヲ獲取シ易キ準備ヲ務メ置クコト最モ專一ナルベシ。

第三條ノ如ク決心セバ暫ク朝鮮ノ萬事ニ鋒芒ヲ修メ、協議ノ熟スルヤ疾雷耳ヲ掩フノ策ニ出デサルベカラズ。他國ヲ兼併スルハ好辭柄ノ下ニ掠奪ナレバ、占領後ノ勢ヒニ隨ヒ、或ハ〇〇シ、惠恤スベキノミ（想フニ今日ハ露ニ北方ノ不凍港或ハ咸鏡道位ヲ與フレバ満足スベキカ）

梧樓既ニ難局ヲ顧ミズ、命ヲ彼地ニ奉ゼント決心シタレバ、政府ノ方策孰レニ定マルモ元ヨリ茲ニ容喙セントスルニ非ラズ、但シ前三條ノ決定如何ニ由リテ恩惠的、脅迫的及ビ默從的政策ノ必要起リ、寬猛緩急皆之レニ準據シテ定ムルノ外ナシト確信セリ。故ニ要略ヲ書シテ以テ教ヲ待ツ、猶ホ盡サル所ノモノハ、更ニ口頭ヲ以テ陳辯スル所アルベシ。再拜

明治二十八年八月

朝鮮ト露國トノ關係ニ付テ

明治十七年十一月ノ變亂後間モナク、朝鮮國王ヨリ密使ヲ露國浦鹽港地方官ヘ差送り候趣、右密使ハ一ハ權姓ノ者ニテ、曾テ同港ニ寓留致候者、一ハ金鏞元（曾テ日本ニ來リ鑛山學ヲ學ビタル者）ノ兩名ニテ、此頃歸京、地方官ヨリノ返書ハ直チニ國王ノ手ニ納メ候。政府ノ諸大臣ト雖モ一見ヲ許サレザル由、或ル探偵人ヨリ申出候ニ付、猶ホ探索致居候處ヘ、金督辦ヨリ内々人ヲ以テ今般露國ヨリ密書來リ、其ノ文中ニ日清天津條約ニテ、兩國互ニ其兵ヲ引揚グルニ至リタレドモ、其ノ第三ニハ他日若シ朝鮮ニ事アリ、兩國ノ内一方ヨリ兵ヲ出スコトアレバ、先ヅ之ヲ通知シテ後ニ行フトノ條款アリ。右ニ付テ之ヲ觀レバ、日清兩國ハ朝鮮ヨリ現駐ノ兵ハ撤回スト雖モ、朝鮮ニ向テハ事故アルニ隨ヒ何時ニテモ兵ヲ出スノ權ヲ有スルモノナリ。露國モ朝鮮ニ對シテ日清兩國同様隣國ノ事ナレバ、日清同様ノ權利ヲ得ベキハ勿論ノコトニ付、右條約批准了ルヲ待チ、露政府ヨリ日清兩國政府ヘ其意ヲ申込ムノ手筈ナレバ、豫メ朝鮮政府

ニ於テ承知致シ置カレ度トノ語氣有之哉ノ由ニ付、先ヅ下官心得ノ爲ニ密報スル趣申越候。依テ去ル二十日「ハミルトン」一件ニ付督辦ト内話ノ末本件ニモ談及シ、右密使ハ朝鮮政府ヨリ差出シタルモノナル歟、又ハ何人ヨリ差送りタルモノナル哉、又ハ何等ノ目的ヨリ差出サレタル事ナル哉質問致候處、右使人派出ノ義ハ政府ニテハ毫モ與リ知ラザル事ニテ、今ニ至ツテモ其書簡スラ一見モ出來難キ位ノ事ニテ御推察アリタシ（國王ノ所爲ト云フ義ヲ避ケ云フガ如シ）尤モ昨年變亂後ハ人心恟々當政府ニテモ一旦ハ日清必ラズ再ビ當國ニテ接戦スルニ至ルベシト妄信セシ程ニ有之、當時穆麟德ヨリ露國ハ鄰國ノコトナレバ豫メ該國ニ請フテ萬一日清兩國當地ニ戰端ヲ開クノ日アラバ、該國ニ其ノ保護ヲ仰グベシトノ發議有之候得共、衆議一決セズ、終ニ其議ハ廢案ト相成居候。然ルニ内々聞ク處ニテハ、今度歸京ノ使人ハ右ノ目的ニテ浦鹽港ニ到リ、地方官ヲ經テ露政府ヘ保護ノ義ヲ依頼セシ哉ニ相見エ、甚ダ奇怪ノ事ニ有之、穆氏モ之ヲ聞イテハ必ラズ驚キ可申、拙者外務ノ重任ニ當ル身ニテ、其ノ始末サヘ一向存知不申ハ、實ニ當惑ノ至リニ有之趣云々相答候。右ノ談話ニ付愚考致候得バ、右使ハ穆氏ノ發議ヲ聞キ、當時國王自ラ其ノ昵近ノ内官等ト謀リ、密カニ使ヲ送り、露國ヘ保護ノ義依頼致シタル事ト被察候。但シ右ハ穆氏陰ニ其議ニ加ハリ居候哉（穆ハ從來露ヲ援引スルノ内意アリ、且ツ近來ハ金宏集、金允植等ノ威權遂ニ内官ノ爲ニ制セラル、ヲ見テ、專ラ内官ニ媚ビテ呈スルノ迹アリ）

或ハ單ニ國王憂懼ノ餘リ、獨斷ニテ被差遣候義歟、詳細ノ情實判然致兼候得共、朝鮮國ヨリ保護ノ義ヲ露國ニ依頼シタルヨリ、露國ニテ日清天津條約ニ對シ、日清兩國ニ向テ同權利ヲ得ントノ請求ヲナスベシトノ意見ヲ抱キ居候ハ、督辦ノ密談ニテ其端緒ヲ相窺候。

明治十八年五月二十六日

京城 近 藤 眞 鋤

追テ金鏞元ハ從來知音ノ者ニ付、陰ニ呼寄セ浦鹽港行ノ模様相尋候得共、深ク匿シテ其實ヲ告ゲ不申候間、宦官ニ手ヲ廻シ成ルベク右書東ノ寫ヲ得度ク計畫中ニ有之候。

露英兩國使臣ノ態度

今般露國公使館書記官「スパイア」氏俄カニ朝鮮國京城へ派出セラレタルニ付テハ、極メテ其地着ノ上ハ爲スベキ方略モ多少アルベシト信ゼラル。サレバ貴下ハ同書記官ノ舉動ニ常ニ注意セラレ、ナルベク其筋ノ便路ニ就キ其ノ朝鮮政府ニ對シ所言等探問セラルベク、又聞ク所ニ據レバ過般露國ヨリ朝鮮政府ト結約ノ委員タリシ「ゼー、レヂング」氏ハ、今般露國ノ代理公使ニ任ゼラレ、其地ニ駐在スルコトナリタル由、過般露、英ノ關係生起セシ以來、兩國ニ於テ朝鮮國ニ專ラ注目シ、兩國ノ争ヒニ乗ジテ其利便ノ位置ヲ得ントノ模様見ユ。就テハ英ノ「アストン」氏モ既ニ來着シ、又露代理公使着京ノ上ハ、相互ニ計畫スル處アルベキハ勿論、双方ヨリ我贊助ヲ求ムルノ場合無シトモ限ラザレバ、兩國使臣ヨリ何等申出ヅルトモ、未ダ特ニ訓令無キ旨申述べ、双方ニ對シテハ全く不偏ノ位地ニ立チ、貴下ノ見込ミヲ提出セラレズ、程能ク應接セラレタシ。而シテ其平素談話ノ模様並ニ舉動等ハ不絶報告アランコトヲ乞フ。

明治二十八年六月五日

伯爵 井 上 馨

高平 小五郎 殿

陸軍教師雇入ト魯國書記官ノ事

魯國書記官「スペーア」氏渡韓ニ付テハ、同氏ノ舉動注視候様先般御電令有之候處、同氏金督辨トノ應接並ニ國王トノ問答ハ、先便近藤書記官歸朝ノ節筆記攜帶相成候ニ付、同官ヨリ委詳具報可申上候。右筆記ニモ相見得候通り、「スペーア」氏渡韓ノ目的ハ陸軍教師發達ノ事ニシテ、目下巨文島事件ニ付朝鮮政府周章ノ機ニ乗ジ、此ノ目的ヲ達セントスルモノ、如ク、之レガ爲メ朝鮮政府ノ狼狽一方ナラズ、諸大臣等屢々集會評議ヲ盡シ、或ハ米、魯兩國へ多分教師ノ送遣ヲ謝絶セントノ説モ有之、或ハ陸軍教師ハ既ニ公然米ニ依頼シ、今更食言致シ難キニ付、該教師ハ矢張米ヨリ聘用スル事ト爲シ、更ニ鑛山師ノ如キ朝鮮ノ利害ニ差シ響キナキモノヲ魯ニ依頼シ、以テ成ル可ク魯ノ心ヲ慰メントノ論モ有之、又陸軍教師ヲ米、魯、獨ノ三國ニ割付ケ、各三國ヨリ幾名宛歟雇入候事ニ致候ハ、三國共各其割前ヲ得テ不平ヲ鳴ラス者ナカラントノ議モ有之趣ニ候得共、魯書記ハ魯國一手ニテ陸軍教師ヲ引請ケザレバ甘心セザル趣ニ付、

朝鮮政府ニ於テハ殆ンド當惑致候由ニ御座候。

然ル處、此事タルヤ、客冬金牖元、權東壽、及ビ其他ノ二名浦鹽港ニ出便セルガ其ノ起源ニシテ、今春穆麟德等我國ニ派出ノ序、魯官ニ面會シテ右ノ旨意ヲ辯明シ、隨テ今般魯書記渡韓候事ニ相成候モノニ可有之候得共、金、權等出使ノ節ハ、別ニ公書等携帶致候儀ニモ無之由ニテ、是レガ爲メ同人等ハ慶興關ニ於テ通行被差留、四、五日間逗留ノ後、權東壽ハ前營ノ將官ニ有之候ニ付、銃砲購求ノ爲メ魯領ヘ相越候旨辭柄ヲ設ケ、漸ク通關被差許候程ニ有之、又穆氏ノ魯官ニ依頼セルモ口上ノミノ事ニテ、書面等往復候儀ニモ無之由ニ付、今日ニ於テハ朝鮮ヨリ魯國ノ保護又ハ陸軍教師ノ發遣ヲ依頼セリトノ證據ハ存在不致由、且ツ又魯書記ノ渡韓モ魯政府ノ公書ヲ携帶候儀モ無之、僅ニ東京在留魯公使ヨリ穆氏マデ報告有之候哉ニ相承候得共、是レ亦穆氏ノ口上ノミニテ明白ニ其書東ヲ相示候儀ニモ無之候ニ付テハ、朝鮮政府ニテハ右等ノ事實ニ據テ魯書記ノ攻撃ヲ避ケントシ、去ル二十四日別紙筆記ノ通り應接有之候由ニ候得共談判結局ニ至ラズ、魯書記ハ諾否ノ決答ヲ待テ其去留ヲ決セントマデ申暮シ候ニ付、遂ニ又昨日統署ニ於テ沈舜澤、金宏集等集會督辨及ビ協辨等ト魯書記ヘ返答振ニ付評議致候趣ニ御座候。尤モ右陸軍教師ノ儀ニ付テハ、朝鮮政府ニ於テモ各使臣ノ意見探偵致居候趣ニ御座候處、米代理ハ元ヨリ自國ヨリ教師派遣ノ依頼相受居候ニ付、魯國ヨリモ教師聘雇相成候テハ兵術ニ岐

ニ分レ、實用上ニ於テモ不可然旨ヲ以テ魯教師ノ聘用ヲ抗論致候趣ニ有之、獨理事ハ兵術ノ一途ニ歸スルハ元ヨリ可望事ナレドモ、既ニ教師ヲ米ニ頼ミ、又之ヲ魯ヨリ招カザルヲ得ザル儀ナレバ、更ニ又之レヲ獨ヨリモ聘シ、三國其ノ權衡ヲ得バ孰レモ其權力ヲ擅用スルヲ得ザルベシトノ説ニ有之、又清理事ハ成ル可ク魯國外ノ國ヨリ雇入レシメントノ趣意ニ有之趣ニ付テハ、右諸説ノ内何レヲ採用致候哉、昨日統署ノ會議ニ於テ自ラ評論有之候儀ニ可有之候間、追テ探偵ノ上詳細御報道可申上候。

明治二十八年六月三十日

於漢城 高平小五郎

追テ穆氏ハ魯書記渡韓已來此擅行ノ爲メ殆ンド其身位ヲ安ンゼズ、辭職ノ決心ニ有之趣ニ御座候處、魯書記ノ使命愈ヨ果サル節ハ、同氏ノ威權益々衰ヘ、遂ニ退職可仕トノ説ニ有之候。

魯國書記官使命不調ノ顛末

魯國書記官「スベール」氏朝鮮政府ニ向テ魯國陸軍教師聘用ノ儀要迫ノ模様ハ、先便ヲ以テ及具報置候處、諸大臣等爲之屢々集議ヲ盡シ、遂ニ魯公使「ウエツバル」氏渡韓ノ上ヲ以テ商論ニ可及旨魯書記ニ返答仕候事ニ議定相成候趣ニ有之候處、朝鮮政府ニテハ尙ホ右様返答候トモ、魯書記ニテ其後何等ノ手段ヲ以テ要迫致候哉モ難計ニ付、種々苦慮仕候趣ニ有之、清國陳樹棠等へ及協議候哉ニテ、去ル一日同國副總辦譚慶來館ノ上相談ノ趣モ有之候得共、陸軍教師ノ儀ハ兼テ御達示相成居候通り、天津條約ニ牴觸セザル上ハ何國ヨリ聘用相成候トモ異議不被爲有御旨意ニモ有之、且ツ此事ハ米、英、魯ノ三國ニ連繫シ、至極「デリケート」ナル事件ト相心得候ニ付、唯ダ妥當ノ處分相成、朝鮮ノ後害ニ不相成様希望ノ旨相答候ノミニ有之候。然ル處、去ル二日統署ニ於テハ愈ヨ前述議定ノ通り、魯書記ニ決答仕候趣ニ有之、其夕刻譚慶來ヨリ別紙ノ通り應接筆記送り越シ、魯書記愈ヨ東歸ノ決心ニ有之候様相見え候ニ付、此夜如

藤書記生ヲ清署ニ送り、朝鮮政府ノ後圖如何ヲ探問爲致候處、此上ハ朝鮮政府ニテ一書ヲ東京在留魯使ニ送り、魯書記渡韓以來ノ顛末并ニ教師一件ノ行衛ヲ辯明候趣意ニ有之旨譚氏相答へ候趣ニ御座候。其翌三日魯書記來館、兼ネテ使事成リ難キ時ハ歸任可致旨魯公使へ申立置候處、今般許可ヲ得候ニ付、來八日ノ便船ニテ歸任候ニ付告別ノ爲メ相尋候旨申聞ケ、隨分早々敷暇乞ヒノ致方故、或ハ別ニ來意有之モ難斗被存候ニ付、同官ノ内意探問候積リニテ、拙者ヨリ御差支ナケレバ今般統署へ御談判ノ概況承り度旨申聞候處、魯書記相答候ニハ、今春穆氏貴國ニ渡來ノ節、書面ヲ我ガ公使「ダビドフ」氏ニ送り、近々日清兩國撤兵致候様相成可申ニ付テハ、其後ハ朝鮮ニハ兵力無之、國內ノ鎮壓ニ差支候ニ付、魯國ヨリ士官四人、下士官十六人被差送候ハ、國王及政府ニ於テモ相悦ビ可申旨申出候ニ付、我ガ公使ハ自分一個ニテ決答致兼候得共、尙ホ我ガ政府へ上申ノ上、追テ何分ノ儀可申送旨穆氏へ相答置キ、早速穆氏依頼ノ趣意ヲ政府へ上申相成候處、今般我ガ皇帝御允諾ノ通知有之候ニ付、拙者ハ右士官等來韓ノ諸用意相調へ候積リニテ渡韓候次第ニ有之、然ル處、金督辦ハ既ニ陸軍教師ヲ米政府へ依頼セル旨ヲ以テ、我國ヨリハ陸軍士官ノ代リニ鑛山師相雇度トノ申分有之候得共、滿洲ニハ金鑛ハ累々到ル處ニ有之候ニ付テハ、遠ク朝鮮ニ來リ鑛山ヲ開採シテ何ノ益ヲ得ベキ哉、抑モ我國ニテ陸軍教師ヲ此ノ國ニ送ラントスルハ、朝鮮ハ接壤ノ國故、此ノ國內ニ我ガ士官アレバ境界ノ警休ヲ左

程嚴重ニスルヲ要セザル爲ニ有之、殊ニ朝鮮ヨリ依頼モ有之候ニ付、態々皇帝ニマデモ奏上シテ裁可ヲ得タル次第ニテ、此ノ事ハ我が國中ハ不及申、世間ニモ充分知レ渡リタル事ナルニ、今更此ノ朝鮮ヨリ教師ヲ他國ニ依頼セリトテ謝絶セラレ候テハ黙止致シ難ク、此ノ上ハ東歸ノ上、此ノ顛末ヲ政府へ上申シ、「バレーション」ヲ要求セズ候テハ不相濟旨ヲ以テ、魯書記ハ斷然歸任ノ決心ニ相見得候ニ付、拙者ハ別ニ贅言ヲ盡サズ、其ノ歸裝等ノ儀ニ付依頼ノ事件モ有之候ニ付、快然引受ケ程能ク應答相別レ候儀ニ有之候。然ル處此ノ事件タルヤ、今後朝鮮政府ノ處置振ニ據リテハ、魯政府ニテハ何等ノ感覺ヲ起シ、何様ノ返報ヲ致候哉モ計リ難ク、殊ニ目下巨文島一案モ未ダ決着不仕候ニ付テハ、魯國ニテ更ニ其ノ擧ニ倣フノ處置アルモ未不知、隨テ我國ノ利益ニモ關係仕候儀ト存候ニ付、彼レ是レ苦慮仕居候處、此夕譚氏又來館、事既ニ此ニ至リ候テハ別ニ致シ方無之儀ニ付、昨夜モ加藤氏ニ相咄シ候通り、朝鮮政府ヨリ一書ヲ在東京魯公使ニ送り、程能ク辯明置候様、實ハ拙者ヨリ金督辨ニ勸告致候儀ニ有之候得共、貴下ニ於テ更ニ良案有之候得バ教示相成度旨申聞候ニ付、拙者ニ於テハ公使ヨリ訓示モ拜受致居不申候ニ付、苟クモ此等ノ議ニ與リ、妄リニ魯國ノ疑念ヲ招キ候テハ不都合ト存候得共、若シ又巧ミニ此ノ事ノ彌縫ヲ成就シテ、魯國ノ憤意ヲ慰ムルヲ得バ、獨リ朝鮮ノミ凶害ヲ免レ候儀ニ無之事ト相心得、一先ヅ譚氏ノ相談ニ乘リ、種々評議相遂候得共、最早破談後ノ事ニ有之、格

別奇策モ無之、僅ニ拙者ノ發議ニテ朝鮮政府ヨリ魯公使へ送ル可キ書翰ハ態々相當ノ使節ヲ以テ差送り候事ニ協議相成リ、夫レヨリ譚氏ハ直ニ金督辨方ニ相越候處、金督辨モ同意致候趣キニテ、其翌四日譚氏又來館、右使節ニ齎往セシムベキ書翰ニ有之旨ヲ以テ、別紙ノ通り金氏ノ立案、譚氏修正ノ筆案ヲ差出シ、愚見相尋候ニ付、拙者ハ斯クマデ深入致候義迷惑ニ存候得共、愛相方々聊カ修正ヲ加へ、且ツ使節我國へ渡航候上ハ、通辯者ハ清國公使館又ハ朝鮮人懇意ノ我が國人ニ就テ相雇候事ニ評決致候處、譚氏ハ朝鮮使節ノミニテ今般ノ使命成就候儀無覺束被存候ニ付、徐公使へ一書ヲ送り、其ノ保助ヲ請求シ、尙ホ貴國外務卿トモ御相談相遂ゲ、朝鮮使節ニ對シ、貴我中差支無之程ノ助力ヲ被與候様申遣度ニ付テハ、拙者ヨリモ閣下へ可然上申致候様申聞候ニ付、拙者ハ此ノ事件ニ付帶訓不致居候得共、朝鮮ノ將來ヲ憂慮シ、使臣ノ位置ヲ離レテ御相談ニ與リ候儀ナレドモ、金督辨ノ頼談モ無之、妄リニ我が外務卿ニ朝鮮使節保助ノ儀上申候儀難相成旨ヲ以テ辭退仕候儀ニ有之候。其後譚氏ハ右脱稿ノ草案ヲ金督辨方へ持テ往キ、別紙ノ通り更ニ修正相加へ、愈ヨ國王ノ裁可ヲ受ケ候許リノ手筈ニ相運ビ候處、去ル五日譚氏ノ報告ニ據レバ、國王ハ使節發遣ノ事ヲ非付シ、書翰ノミ差立候事ニ相成、前述ノ計畫都テ畫餅ニ相成候次第ニ有之、譚氏モ亦徐公使へ送書ノ儀ヲ差控候趣ニ御座候。然ル處昨六日金督辨來館、在東京露公使、清公使并ニ近藤書記官へ書面差送度ニ付轉送致シ吳レ候様依頼仕

候ニ付、露、清兩公使宛ノ分ハ取次致候儀相成兼候得共、定期郵船ノ出發モ幸ヒ相迫リ居候ニ付、本館ニテハ我ガ公信差立ノ序ヲ以テ各國使臣ノ書信ヲモ仁川郵便局マデ繼送致候得バ、右同様取計候儀ハ不苦旨相答候處、此夕金氏ヨリ別紙ノ書面ヲ以テ前述魯、清兩公使並ニ近藤書記官宛書翰各通差越候ニ付、魯、清兩公使宛ノ分ハ郵送仕候得共、右來書中ノ別書封入有之、即チ金氏ヨリ拙者ニ對シ露教師一條ノ辯解並ニ調停ヲ我ガ政府ニ上請候様依頼申越候。書面ニテ二、三時間前金氏來館ノ節ニハ一言モ談及無之事件ニ付、假令其ノ内情ハ憫ムベクモ公際ノ禮儀ニ達セザル甚敷次第ニ有之、且ツ魯書記破談後ノ處置振ハ、自國ノ隨意ヲ以テ決定致候上、右様ノ依頼有之ハ不都合ノ儀ト相心得候ニ付、今朝川上御用掛ヲ送り、右ノ書面ハ拙者ニ於テ我ガ政府ヘ對シ公然轉稟致兼候旨ヲ以テ金督辦ニ返却仕置候。尤モ内々右様ノ御依頼アリシト申スコト丈ケハ閣下ヘ御内報可仕候得共、閣下ニテ如何ノ御意見被爲有候哉計リ難キ旨金氏ヘ相通ジ置キ候。且ツ又近藤氏宛書翰ノ儀モ、本件ニ付差送り候儀ニ有之候ハ、拙者ハ我ガ政府ノ代表者ニ付、同氏ニ於テハ返答モ致シ兼ネ候儀ニ可有之、投簡ニ預リ反テ缺禮候様ニ相成候テハ、同氏ノ爲メ不都合ニモ有之候ニ付不被差遣方可然、尤モ私信ニ有之候ハ、欣然相取次可申旨金督辦ヘ申遣シ候處、返答ノ有無ハ頓着不致候ニ付、是非共繼送致吳レ候様依頼申越候ニ付、其儘同氏ヘ轉送致シ置キ候間、何レ書中ノ趣意ハ同氏ヨリ具狀相成候事ト存候。一體魯書

記ノ請求一件ハ、當初ヨリ充分ノ手續ニ相成居不申儀ニハ有之候得共、朝鮮政府ニテ斷然拒絕候事ニ相成候ハ大ニ米代理ノ反抗ニ基キ、清理事ノ異論モ亦其原因ニ可有之被存、而シテ清理事ハ魯書記渡韓已來穆氏ノ過失判然相顯レ候ニ付、此機ニ乘ジ同氏ヲ斥ケントシタルモノ、如ク被存候得共、其ノ事墓々敷相運ビ不申、露書記ハ斷然東歸ノ事ニ決心致候ニ付、其ノ後害ヲ恐レ數日間相談テ拙者ヲ來訪シ、事ノ彌縫ヲ相謀候得共、何事歟（穆氏ヲ斥ケテ露國ニ謝スル事カ）金督辦ト協議相調兼候事有之、遂ニ手ヲ引キタルモノ、如ク被存候。右ニ付今般金氏ヨリ魯公使ヘ相送り候書面ノ趣意モ、譚氏ハ承知不致、反テ拙者ヨリ金督辦ニ問合セ吳レ候様申越候得共、拙者ハ金氏ヨリ調停依頼ノ書面返却仕候程ノ仕儀故、其意ニ應ジ兼ネ候儀ニ有之候。詰リ此儀ハ此儘ニテ相濟申問敷ニ付、魯書記官東歸後、魯國ニテ何等ノ處置ニ出デ候哉、當國三港領事及ビ浦潮港貿易事務官等ニテ聞キ及ビ候儀モ有之節ハ、速カニ本省ヘ電報ニテ及御通報候様通知仕置候。

明治十八年七月七日

俄參贊來朝鮮外署問答

乙酉五月初八日（我六月二十日也）

彼曰來此已過十日

大君主尙未引見不知何故

我曰貴官未有請故我

大君主尙未有命

彼曰已托穆參判代稟

我曰吾未及知之

彼曰來駐已久未得面

君甚鬱且有所達之事幸代稟從速 引見俾定去就甚望

我曰當稟知矣

彼曰其間遙來說話多不真實我面

君須要辨明

我曰不知是何語而甚驚訝也

彼曰穆參判不有所言乎

我曰今見穆參判而來未聞其詳細

彼曰吾到貴邦無相親之人穆參判既是衙門官員故一切事宜已細及之耳、去年徐穆兩使來

日本俄公使館語云中日將撤兵我

大君主致意於貴國要延教師訓練本國之兵

我曰此有公文否

彼曰穆使屢致此意我照其所言電報我國政府至達于大皇帝

我曰彼時在天津修約之前何以預知撤兵乎

彼曰日本已有此議刊諸新聞無人不知

我曰日本雖有此議我國未及聞知

彼曰前年我公使之來

大君主諭以兩國親密之意且穆參判以貴衙門協辦爲副大臣而來其言甚重豈可不准信乎、且去年冬

貴國派員送于海蔘威請以保護一事我國政府安得不信之乎

我曰派員所議與穆參判所言本署均未聞知亦未曾親承

上諭想我

大君主亦所不知也

彼曰穆參判以巨文島事入日本長崎時有我國電信朝鮮政府若要用我國教師電信朝鮮政府若要用我國教師則當起云

我曰此亦未聞穆參判雖係同僚相好事要秘密故想不及說明于我

彼曰此則未可知耳我奉大皇帝命來申交好專爲保護貴國之意也、先與穆參判商論以詳文述其意穆參譯以漢文遍未政府諸公繼當入鑑干

大君主聞貴督辨一閱譯文卽往中國公館商議果有之否

我曰譯文我得見稍晚此是大事不可率爾獨對故往議於中國公館

彼曰此是兩國秘密相議之大事何故言及於中國乎

我曰此事之祕密相議亦所未知事大則不可諱須光明正大公聽並觀庶無後悔也

彼曰朝與俄毘連甚近貴國貧弱與我國締交親密則歐羅諸國自不敢侮雖有理外來侵我政府無不設法善處貴國與中國相好吾亦知之我國與中國相好我國若與貴國親密則斷無爲害於中國之理

我曰貴國我相好中國亦所樂聞豈有見害之疑耶

彼曰貴國疑我國貧其土地不欲親近此殊不然我國空地尙多未墾何故貧貴國之土地乎、苟

有貧心英國之不有照會來估巨文貴國亦奈何我國何憚而不爲哉實無此意勿過聽人言也

我曰以貴國之大我國有何可欲而爲估奪之許哉貴國必不然我國亦已知之

彼曰貴國已請教師於美國果然否

我曰有之

彼曰貴國之請美教師已經多月尙不來到其國無君須民會議定從令七八朔後姑可來到此不可遲待也

大君主面諭美公使今難謝止

彼曰此不難辨貴國欲延俄師而碍於美國之先請應由政府知照美國自然無事亦不害於兩國交好之誼

我曰教師之請於貴國臣子之私談也請於美國

君上之親諭也輕重迥殊先後不同所以難處

彼曰美國最遠勢不能有益於貴國貴國何其與美國厚而與我國忽然耶

我曰遠近之勢固所知之然美國最先修好故事多相議所以請教師一事亦先於貴國也弱國不能守信何以自立

彼曰若貴國定邀美師則是恕待我也雖明日我當面程告于我皇帝及政府公使亦不必來嗣後必有大相碍之事

我曰此非我擅便之事

彼曰我於各國未嘗毫讓斷不能受其輕侮貴國教師必用俄人乃已貴國雖欲不用亦不可得

我曰既請美師又請俄師其可同心訓練乎

彼曰若審請美師則俄師斷不能共事

我曰何故

彼曰我國爲貴國雪力保護漸成富強之效方爲我國之能事若與美師分教則不足言勞所以不欲并立非有他意請勿致疑也且美師地遠不及到俄師必先到則美使自然退歸且不必因此失好美國不足均

我曰我非畏美國惡失信義於他邦耳

彼曰我國教師之來無關於他國而聞中日兩國最爲疑忌何耶

我曰此亦未之聞知

彼曰聞今日中日兩使進 宮得贊成延致美師之計信否

我曰此貴官之過聽也日使初十日當國故今日

陸辭中使則未聞進見也

我曰公言過矣豈有親好之國而不欲近其人乎

彼曰貴督辦須速稟斷定不要延緩

我曰稟明則不難而此係大事以難速定

彼曰利害便否知之不難須費一時刻可判事貴速斷何用延緩此係大利害慎之慎之

我曰須與政府諸大臣爛商不可造次議定

彼曰譯漢文已經入 鑑否

我曰已經入 鑑云矣

彼曰貴督辦見譯文時與穆參判有何所言耶

我曰吾見譯文始知教師之事吾謂穆參判曰此大事中俄朝之國壤地毘連往日朝與中國無事

不議今不可於此事秘諱須議及於中國請究確定爲妥吾議如是耳

彼曰吾言如有不信可斷吾頸因以手割頸卽起告別

魯參贊見王（六月二十二日也）

彼見王曰派官來保護者係我政府好意

王曰現已雇請美國人贈信促之已將三月今不能失信於人以廢前言

彼曰何不絕彼而取信於我國以踐約請之事

王曰所謂約請者予所不知何人爲之耶

彼曰穆君贈書於我國政府

王曰予毫不知之若有書煩取來示予

彼曰諾

王曰有欲言者幸與外務議之

後彼與外務所商議者略與此同

金督見穆麟德曰此事肇於君主故至今日必須君往商辦 穆曰我向彼不過言以兩國撤兵之後諸教官來則多幸也云々

彼答曰此美舉也云々肇始如斯今若我去言之恐彼 金曰此非始我所與知君善處之

聞今日金召穆欲再告以前事云

乙酉五月十二日上午十一點鐘俄羅斯參贊官士貝耶再來外署談草

寒暄畢。彼曰昨日往見中國陳總辦問、我國派送教師於朝鮮中國頗不願意、否陳曰豈有是理貴國朝鮮之事吾所不干將來撤兵以後朝鮮請來何國教師由朝鮮自主非他人所可知也以此觀之中國之人亦不以俄教師之來爲非貴廷有何疑難乎、我曰此事中國人原不欲涉聞昨日公與陳總督言及中國人沮止俄教師之來此言聞於我云我何嘗有此言耶。彼曰非謂公有是言也公每以此事向中國人商論中國人必懷不願云耳。我曰向日進 宮之時有甚諷旨。彼曰昨蒙 大君主賜顏甚庸感謝 上諭以日後事當由衙門妥辦多謝多謝。我曰此事非欲持難既自政府先請美國教師今忽謝却於理未穩。彼曰若忽於俄而厚於美則必有不好境矣以貴國意揣之美俄之中何者爲安平。我曰貴美兩國均是同盟豈有親疎但請於美者自有明白公文貴官之來初無公文今此談辨亦是私談是以難之。彼曰雖有公文而美國尙未有答也穆公來時雖未知其言爲公爲私而係是衙門之官則其言安得不信乎。我曰美國雖無公文而已有回寄自談公使館知照本署貴國政府回寄尙無信蹟穆公之言不過泛論而已昨見穆公問之初不以 大君主命意言之不過自己之設詞而已云耳。彼曰穆公不是泛論也有往復俄

政府之文字。我曰我國只以先後輕重言之初非有厚薄於其間。彼曰不用美師想無爲害百若不用俄師則爲害甚大何不諒之。我曰事理所在不可專言利害也。彼曰貴國欲親美乎親俄乎一言可決願聞明教。我曰鍊兵教師我既先請於美國謝罷甚難貴國如欲爲我國利益之事則鍊兵之外豈無他事乎。彼曰恕於美則無害而若恕於俄則有目前之患矣。我曰我國目下急務非但訓兵也財政耗繼甚於戎政我國素多礦師幾人請導開採之法俾爲富強之基則友誼從而愈密比鍊兵更有貴效高見以爲何如。彼曰鍊兵一事以外他事都不必提以貴督辦之言觀之吾早已回去而向日進。宮既承。溫諭故此留連耳。我曰公言如此今日辨談更可論此非自衙門獨斷之事須更商稟干政府諸公聽候可否而已。彼曰公須速商干政府諸大臣不肯聽施之意成票給我爲妥。我曰容俟商稟可否問奉復矣然兩國政府談辦公事初無公文一紙貴官之來亦無憑據甚是難處。彼曰不必有憑據也自彼得堡受。皇命而來事々可以相議也。我曰受。皇命即是憑據也須以明文相示。彼曰公文有無不足輕重公使來時自當有公文耳。我曰公使則自當有公文而今則無之不可以公文相往復也。彼曰以言諾之有何不可。我曰可否問非我獨斷之事當爛商更復矣。彼曰日前英使來署之時以巨文島事有言而衙門不許云聞甚可喜。我曰方欲自衙門照會各館耳向聞英領事之言只要暫往藏煤竊聞英國與貴國爲難我於此時雖暫住藏煤豈可許之乎決無是理也。彼曰若貴國許之則甚不可且

有後慮若不得已爲力所屈而見奪則亦當參量耳。我曰萬無聽施之理此一疑俟各國公議而已。彼曰力盡而被估斯無論已若由貴國先許則大不可矣。我曰非但不欲自給彼雖欲以多貨貨請買斷不可准。彼曰此島不是大去處今雖被估討還非難。我曰斷無自我先許之理。彼曰如此甚好。彼又曰此次雖無公文憑據而此不必自貴衙門疑難也貴國若聽施則我之所言我政府斷無不施之理。我曰如無公文是私談也重大事件豈可以私談決之乎。彼曰此則不諒之辭也向日約條尙未批准則未換約之前本無公文往復故今無憑據也若無皇命則吾豈來此而謾言乎。我曰我亦非相信也但無一字公文我豈據以公事相議乎此是公體何不諒之。彼曰約條未換之前不用公文自是通行之規無論公私與否只須決定教師之用何國人而已請明言之本參贊之愚見此是大事須思言之。穆參判來署就坐俄官向穆參判以法國語問答。穆曰俄參贊所言乃公文憑據事也此在換約之前公文憑據不須問也。我曰然則以何爲憑據乎。穆曰駐日本俄公使送有書函道及參贊官先往之由此可爲憑。我曰吾未見此函。穆曰我曾言之想係錯聽且各國交涉之例有認識明白之人則便認他與之辨公不必拘於文憑。我曰聞俄參贊之言穆大人在長崎時以我國請敏師事有往復俄政府之文字果有是。穆顧問俄官謂我曰非我自爲文字也俄人將我說話錄送其國之謂也。彼曰無論有無文字我國教師必用乃已已到今事勢穆參判之有言無言不足辨也。我曰貴官既知我先請美師何乃欲堅

却其人而用貴國教師乎友誼關切不止此一事也。彼曰此是大事也若不聽我言則必生大事日後自當知之我則惟有氣力相加。我曰則我本無氣只以事理言之貴國欲厚於我國而先以氣力相尙實不曉也。彼曰必須許此事而後始可和好也和好與否在於貴國而已。

我曰容俟更商續當奉告也。

彼曰望政府諸大臣會議確定明示可否我姑在此待之。

啓者敝邦與貴國雖經修好尙未換約故一切未敢瀆請此次貴國參贊官士貝助來稱去冬敝邦所派副使穆麟德以敝政府擬請貴國教師訓練士兵貴大臣傳電于貴國政府已蒙允准等語

查但此事實非出于敝國君主之意無論敝政府有所不知即同行至日本之正使徐相兩亦未得聞迨穆麟德回國亦並未將此事告於敝政府第業已先請美國教師則穆麟德雖是朝鮮之官此次出使日本自有專職至請教師一事未奉君命故不齎公文也其師心自用侵職擅權之處敝邦自有處分之法至貴國推誠相待、敝邦敢不銘佩然失信于美國亦非敝邦之願已將一切下情說明于貴國參贊官知之矣特派齎函前來面罄一切請煩貴大臣鑒登將士情轉達貴政府可也。

高平大人閣下啓者茲有佈懇另具別幅再有送駐東京之俄公使一函致送近藤訥軒一函並望飭交明日

船便帶去確交爲荷此請。

臺安

金允植

再啓者號有致駐東京中國公使徐星使函亦即津致爲希。

去月俄國參贊官士貝耶自

貴國來到即去冬政府議約時暫過者也來署面談請教師一事據稱今春穆參判麟德出便

貴國東京時與俄公使有約且云有我政府命令俄公使已經電報于其國政府准送教師二十名訓練士兵敝邦雖感厚誼寔出意外敝邦與俄國縱已修好尙未換約一切未便瀆請況請師教兵事係重大豈無一紙憑據以口舌煩請乎此非我政府之意想穆君憂國之餘自己設辭不覺其言之過中也且去冬我政府已請教師於美國公使且有公文于美政府既請美國教師不應再請於俄國其理甚明弟於談次據實辨明俄官雖以穆君言爲重本署無以曲循臨去不能無憾此次俄官之回與俄公使道及談辨事果無一毫爽實則兩國自然釋疑如或差爽則俄公使不諳我國之情輕言偏言恐妨交誼願閣下將此事情轉行密稟于

貴國政府煩望代爲辨明從中調停使俄公使曉然知此事不出於我政府之意至禱至禱。

啓者敝邦與貴國雖經修好尙未換約故一切未敢瀆請此次貴國參贊官士貝耶來稱去冬敝邦所派日本副使穆麟德以敝政府擬請貴國教師訓練士兵貴大臣傳電干貴國政府已蒙允准等語查貴大臣爲敝邦迅速代稟貴政府是出於情誼關切之至殊深感謝但此事實非出于敝國君主之意無論敝政府有所不知即同行至日本之正使徐相兩亦未得聞迨穆麟德回國亦並未將此事告於敝政府未業已先請美國教師則自當不必再請貴國教師也穆麟德雖是朝鮮之官此次出使日本自有專職至請教師一事未奉君命故不齋公文也究之穆麟德愛國之餘不顧越俎而謀至有此請其師心自用侵職擅權之處敝邦自有處分之法然一言之悞致此鑿柄抱慊極至貴國推誠相待敝邦敢不銘佩然失信于美國亦非敝邦之願已將一切下情說明干貴國參贊官知之矣爲此仍欲致敝政府之意於貴大臣且爲謝貴大臣幹施之勞特派

齋函前來面罄一切請煩貴大臣鑒登將下情轉達貴政府可也

啓者敝邦與貴國雖經修好尙未換約故一切未敢瀆請此次貴國參贊官士貝耶來稱今春敝邦所派日本副使穆麟德請貴國教師訓練士兵貴大臣傳電於貴國政府已蒙允准等語查此事實非出于敝國君主之意無論敝政府有所不知即同行之正使徐相兩亦未得聞迨穆麟德回國亦並未將此事告於敝政府練兵一節業已先請美國教師自不必再請貴國教師也穆麟德雖是朝鮮之官且無公文何足爲據揣穆麟德之意不過爲憂國之餘不覺越俎而謀故有此舉而其師心自用侵職擅權之咎亦所難辭敝邦自有處分之法因其一言之誤致多鑿柄抱慊何極至貴國情誼關切推誠相待敝邦豈不銘感然失信於美國亦非敝邦之願已將一切下情說明於貴參贊官知之矣茲欲將敝政府之意奉達於貴大臣且謝貴大臣幹施之勞特派齋函前來面罄一切請煩貴大臣鑒登將下情轉達貴政府可也肅泐奉布順頌臺祺不宣

魯國書記官ノ事拾遺

「スペーア」氏使命不調ノ始末ハ先便及具報候通リニ有之候處、同氏ノ渡韓ニ付テハ其ノ發端ヨリ充分手續ヲ盡サル條件不尠有之候様被存候得共、其尤モ甚敷ハ魯政府ノ公書ヲ齎サル儀ニテ、其ノ使命ハ如何程公際ノ性質有之モノニ候哉、是レ一疑點ニ御座候。尤モ同氏ハ着佛後朝鮮政府ニ一書ヲ差出候趣ニ有之候得共、是ハ先便差進候應接筆記中、譯漢文トシテ引用記載有之モノニテ、即チ其文中ニハ客冬金牖元等浦潮港ニ出使ノ事及ビ今春穆氏魯教師依頼ノ事ヲ記載シ、續イテ金督辦、徐相兩及ビ穆麟德ノ人物ヲ贊稱シ、國王ノ信任ヲ勸告有之趣ニテ、格別公然ノ性質有之候様ニモ不被存、且ツ魯書記ハ着京已來常ニ穆氏ト往來シ、漸ク十餘日ノ後ニ至リ始メテ金督辦ニ對シ教師一條ノ開談ニ及ビ候儀故、彼レ是レ前後ノ始末ヲ參照仕候得バ、或ハ魯公使ニテ突然感覺セル所有之、常例ノ手續ヲ顧ミルニ違アラズ、色々魯書記ヲ派遣シ、金牖元、穆麟德ノ頼談ニ基キ、一權力ヲ博セント試ミタルモノトモ被存候。又穆氏ノ兼テ

米代理ノ不和ニシテ、從來米教師ノ來韓ヲ好マザルヲ見レバ、或ハ近來朝鮮政府ニテ愈ヨ米教師招聘ノ模様アルヲ見テ、穆氏ヨリ俄ニ宛書ヲ以テ魯書記ヲ迎ヘタルモノニ可有之トモ被存候。尤モ去ル八日米代理來館ノ節申聞ケ候ニハ、去ル四日魯書記告別方々米署ニ到リ、今般ノ使命不調ニ付同官困却ノ實情ヲ内話シ、穆氏ノ一言ヲ信用セルガ爲ニ皇帝ニマデモ奏聞ノ上、教師派遣ノ允可ヲ得タル儀ナレバ、今日ニ至リ復命ノ道無之上申聞候由、且ツ又魯國ニ於テ教師派遣ノ節ハ元ヨリ此ノ貧弱政府ヨリ其ノ費用ヲ支辨セシムルノ望ミ無之ニ付、其代トシテ相當ノ「コンセツション」ヲ請求スベキ積リニ有之旨ヲモ魯書記ヨリ申聞候由ニ御座候。由是觀之、魯公使ハ初メ穆氏ノ甘言ヲ信ジ、其ノ依頼ノ手續公正ナラザルヲ顧ミルニ違アラズ、直ニ本國政府へ上申ノ上裁可ヲ得テ魯書記ヲ派遣セルモノトモ被存候。就テハ今般魯書記使命ノ失敗ハ朝鮮政府ノ後害ヨリモ寧ロ魯書記又ハ魯公使自身ノ困難ニ可有之トノ說モ有之候。然ルニ先信申上候金督辦ヨリ魯公使へ差出候書翰ノ文意ハ如何改正相成候哉、其後相分リ不申候處、去ル九日清署譚氏ノ話ニ據レバ、別紙ノ草案中ノ使節派遣ノ事ニ關スル字句ヲ削除シ、其儘差出候趣ニ御座候ニ付テハ、右文中ニハ格別不穩當ノ字句モ相見エ不申、且ツ穆氏專擅ノ罪ヲ罰シテ魯政府ニ謝スルノ趣意ニ相成居候ニ付、魯公使ニテ右ノ書翰ニ據リ本件ノ失錯ヲ魯政府ニ辯解候儀難被行事モ不被存候得共、最初本件ニ付魯公使ト魯政府トノ間往復ノ次第モ有之、且ツ魯

書記復命ノ模様ニモ可據事ニ可有之候間、尙ホ其邊御探偵相成リ、結局如何ノ處分ニ相成候哉御分リ相成候ハ、御報示被成下候様仕度候。

明治十八年七月十一日

京城目下之形勢

在京城海軍大佐 新納時亮 手簡

井上公使歸朝シ三浦公使之レニ代ハリ、對韓策ニ於テハ前後其ノ方針ノ異ナル處ナキ筈ナレドモ、井上公使ノ熱心ナル干涉主義ニ於テハ、三浦公使ハ未ダ朝鮮國ノ事情ニ通曉セザルガ爲メカ、大ニ手ヲ縮メテ觀察シ居ルモノト云フガ如シ。然ルニ彼ノ閔泳駿歸國後ハ、政府部内モ何トナク動搖メキ來リ、宮中ハ例ニ依ツテ大ニ政權回復ニ力ヲ盡シ、諸般ノ命令、官員ノ黜陟等内閣ノ議ヲ經ズ特發スルモノ多々アルニ至リ、内閣員亦多少ノ交迭ヲ見ルハ近キニアルベキカ。従前ノ王妃内閣、即チ閔黨内閣ニ復セザレバ止マザルベシ。今般勅令ヲ以テ發表セシ服制改革モ其ノ一例ナリ(九月二十九日ノ韓城日報ニ掲グ)。因テ内閣備石塚顧問官等ハ、近頃政令ノ紊亂ナルヲ非難シ、口ヲ極メテ忠告ヲ試ミシモ、内閣員ハ宮中ノ權柄ニ恐怖シ、一人ノ爭諫

スルモノナキノミナラズ、只管己レノ身ヲ危ミ居ルモノ、如シ。最早顧問官等ノ力ニ及バズ、若シ井上公使ノ在勤中ナレバ、宮中ノ專横ヲ排シテ直諫スルノ例ナレドモ、三浦公使ハ餘リ激烈ナル處置ニ走ラザル方ナレバ、此末如何ニ韓廷ヲ調理セラルベキヤハ皆人ノ注意ヲ惹キ居ル處ニ有之候。

閔泳駿ハ歸國後春川ノ自宅ニ投ジ、未ダ入京セザレドモ、從前ノ勢力家ト云ヒ、且ツ王妃ニ寵愛ノ聲高ケレバ、舊其餘黨ハ又我黨ノ政府ニ回復シタルモノ、如ク早合點シテ、下等ノ舊式一兵卒ニ至ルマデ頗ル跋扈ノ風アルハ惡ムベシ。駿モ不日入京ノ嚙ハアレドモ、未ダ其ノ椅子ハ何邊ニアルヤ明瞭セズ。斯カル次第ナレバ、折角途ニ就キシ改革モ一方ヨリハ自滅シ、地方ノ暴徒ハ絶エズ蜂起シ、國家ノ財政ハ整理セズ、殆ンド又一年前ノ朝鮮ニ退歩スル傾キナキヲ保スベカラズ。

聞ク處ニ據レバ、兩人ノ陸軍米國教師ハ不相變宮中ニ出入シ運動スルヤノ説モアリ、王妃ノ政權回復モ或ハ之レガ預リカアルモノニハ無之哉。「リセンドル」ハ前井上公使トハ氷炭相容レザル反對者ニテ、常ニ離間策ヲ用ヒ妨害ヲ試ミタルハ皆人ノ知ル所ナリ。曾テ「リセンドル」其他ノ米國人ハ魯國公使ニ使喚サレ、魯國ノ爪牙ト爲リ妨害ヲ我ニ加ヘントスルモノナリ云々報告セシコトアリシガ、彼等ノ運動今尙ホ依然タリ、若シ新任魯國公使到着セバ、彼等ハ一層

甚シキ妨害者タラン。併シ三浦公使トハ夫レ程ノ軋轢モナク、尤モ目下駐韓ノ柴四郎抔トハ「リセンドル」ハ從前ヨリノ交際モアリ、互ニ訪問ノ往復モアリシ由ナリ。彼等元ヨリ組ミシ易キ人物、寧ロ最初ヨリ食ハシムルニ利ヲ以テシ、味方ニ取組ムハ難事ニアラザレドモ、三浦公使ノ向後彼等ニ對スル意志果シテ如何ゾヤ。

井上公使出立ノ比マデハ宮中ノ事モ凡ソ七部通リハ日本化シタルモノ、如ク見エシガ、公使ノ諫席未ダ暖カナル今日、最早此ノ如キ形勢一變シ來ルトハ、韓廷從前ノ歴史ニ徴スレバ何モ異シムニ足ラズ、人ヲシテ其ノ七部通リマデ感化シタル如ク誤魔化シタル處コソ、王妃ノ王妃タル特色ト申スベケレ。尙ホ二週間以内ニハ又如何ニ韓廷ノ變遷ヲ報ズル事ノ到來スベキヤ實ニ不堪憤慨ノ至リナリ。鎖末ノ事件ハ韓城新報ニ掲載シアレバ、例ニ依リ之ヲ省略セリ。

明治二十八年十月三日

朝鮮事變ニ付意見書

本大臣嘗テ聖慮ノ在ル所ヲ奉體シ、朝鮮ニ關スル我が國家ノ方針ニ付所見ヲ陳奏シテ聖可ヲ蒙リ、漸ヲ以テ實行ヲ期シタルニ、今ヤ圖ラザリキ朝鮮ニ於テ不時ノ事變出來セリ。此ノ事我が政府從來執ル所ノ政策ニ背戾スルノミナラズ、國際上異常ノ問題ヲ來タシタルコト論ヲ俟タズ。於是乎、從來ノ廟議ヲ明了ニシ、今井上伯ヲ朝鮮ニ派遣スルニ當リ、將來ニ誤解ヲ來タサシメザルノ必要アルガ爲ニ、更ニ之ヲ筆記シテ以テ 聖覽ニ供シ、併セテ內閣ノ記憶ニ留メンコトヲ冀望ス。

明治二十八年十月二十一日

內閣總理大臣 伊 藤 博文

朝鮮事變ノ起リタル爲メ、井上伯爵ヲ朝鮮へ派遣セント當初企圖シタルハ小村辨理公使任命以前ニシテ、此ノ節ノ變亂ニ對シ一切ノ善後策ヲ處理セシメントシタリシニ、其後三浦以下〇〇〇〇〇〇タルニ於テ、已ニ同公使召還ノ命ニ接スルニ至リ、今日ノ際暫時モ我公使ノ地位ヲ曠廢セシムベカラザルヲ以テ、小村ヲ即時ニ後任ニ命セラレタリ。而シテ尙ホ井上伯ヲ派遣セントスルニツキテハ、駐在公使ト特派使節トノ名義ヲ明瞭ナラシメ、雙方ノ間、支牒逕庭ノ虞レナカラシムルコト尤モ緊要ナリ。

一、特派使節ハ事變ニ付テ我が帝室ヨリ御見舞トシテ、且ツ我國臣民ノ此ノ變ニ關與セシコトノ遺憾ニ思食サル、旨ヲ朝鮮國王ニ傳フル爲メ、特派大使トシテ發セラルベキコト。

二、國際上彼我兩國ノ間ハ勿論、各國使臣ト公然照覆スベキ事項ハ駐在公使ノ任務ニシテ特派使節ノ記名處理スル所ニアラザルコト。

三、井上伯從前公使トシテ駐在シタルヲ以テ、朝鮮ノ事情ニ明晰ナルノ便アルヲ以テ、善後ノ事ニ付テハ小村ニ助言ヲ與へ、且ツ各國使臣等トモ音問往復、能ク事情ヲ盡スニ於テハ大ニ補益スル所アルベシ。然レドモ何時モ駐在公使ト其ノ意見ヲ歸一セザルベカラザルコト。

四、特派使節派遣ニ付テハ外務大臣ヨリ駐在公使ヘモ其ノ權限職守等明細ニ訓示セザルベカラザルコト

朝鮮ノ獨立ヲ扶持スル爲ニ日清交戦ハ興レリ。朝鮮ノ内亂ハ端無クモ勃興シ、鎮壓ノ爲メ多數ノ我兵ヲ以テ之ニ當ラシムルノ止ムヲ得ザルニ至レリ。嚮ニ日清交戦已ニ終局ニ至ルヤ、露國政府ヨリハ早ク已ニ我が政府ノ屢々朝鮮ノ獨立ヲ保證シタル宣言ヲ記憶センコトノ注意ヲ催シ來レリ。我が政府ニ於テハ素ヨリ其ノ獨立ノ名實共ニ舉ランコトヲ企圖スルノ眞意ナルヲ以テ、朝鮮ノ事情ヲ明カニシタル後、之ガ回答ニ及ブノ覺悟ナリシモ、其ノ獨立ヲ保證スルノ宣言ヲ實行スルニ於テ躊躇セザル旨ハ、當時露公使ニ對シ外務大臣ノ談話セシ所ナリ。

朝鮮國駐屯ノ我兵隊ノ事ニ付テハ、井上公使再ビ渡韓ノ際已ニ廟議ヲ一決シ、朝鮮政府ノ要求スル兵隊ノ數ヲ除ク外ハ撤回スルコトニ一決セリ。

彼ノ國ニ在ル電信ノ事、亦井上公使ニ一任シテ彼ニ與フルモ賣渡スモ妨ゲナシトノ廟議ヲ決シ置キタレバ、是レ又之レヲ我ニ保持スルノ希望ナシ。然レドモ遼東半島還付前ニ在リテハ通信ノ必要アルヲ以テ、其間守備兵ヲ以テ守護スルノ必要アルマデナリ。

朝鮮内政改革ノ助勢モ今日マデ種々ノ手段ヲ盡シタレドモ、目下朝鮮人ノ程度ニテハ到底成功ノ見込ナキヲ以テ、是レ又之ヲ強ユルモ益ナキコト知了シタルヲ以テ、漸ク逐ヒ朝鮮ノ自任

ニ附スルノ方針ヲ執リタルコト今更論ヲ俟タズ。

日清交戦後ニ於ケル我が政府ノ朝鮮ニ對スル方針ハ從前ニ異ナルコトナキモ、唯ダ戦後ハ戦前ト形勢ノ異同アルハ辨別セザル可カラズ。乃チ戦前ニ在リテハ朝鮮獨立ノ争ヒハ日清ノ議論ニシテ、各國々際上ノ議論ニアラズ、露國ト雖モ我ト同ジク朝鮮ノ獨立ヲ以テ我ニ確保センコトヲ求メタルニ過ギズ。然ルニ戦後ニ在テハ三國同盟朝鮮獨立ヲ主張シ、現ニ遼東半島ノ朝鮮ニ接壤スル土地ヲ日本ノ所領トナスハ朝鮮ノ獨立ヲ危殆ナラシムルト云フニ至リテ干涉ノ一部ハ即チ朝鮮問題ニ屬ス。

而シテ實際朝鮮ニ重要ノ關係ヲ有スルハ露國ニシテ、獨、佛ノ如キハ敢ヘテ重キヲ措クノ必要ナキモ、今日ノ場合已ニ三國ノ協意ニ出デタルノ結果、我ニ對シテハ同一ノ論鋒ヲ用フルコト論ヲ俟タズ。是レ戦前ト大ニ其ノ趣ヲ異ニスル所以ナリ。故ニ我が政府ノ戦後ニ於テハ朝鮮ノ獨立ヲ希圖スルモ、成ルベク我が干涉ノ跡ヲ漸次ニ絶チ、與國ヲシテ我が政府ノ處置朝鮮ノ獨立ヲ無視スルモノナリトノ非難ヲ容レシメザルハ、我が將來ノ地位ヲ保存スルニ於テ最モ必要ナリトシタリ。井上公使歸朝ト共ニ露國ニ向テ我が朝鮮ニ對スル方針及ビ撤兵其他ノ措置ヲ執ルコトヲ通告セント豫期シタルニ、豈圖ンヤ今般ノ事變卒發セリ。茲ニ至テ我ノ朝鮮ニ於ケル地位上更ニ一轉ヲ來セリ。

今般ノ事變ニ就テハ與國ヨリ見ル時ハ、我が政府ハ被告ノ地位ニ在リ。故ニ善後ノ手段ヲ執ルモ我ハ消極的ノ手段ナラザル可ラズ。但シ各國ト協同的ニ出ヅル場合ハ積極ノ手段ナルモ、我が獨力ノ責任ニアラザルヲ以テ、自カラ別議ニ屬スルモノトス。斯ノ如キ必要アルニ際シテハ、成ルベク我が政府ノ訓令ヲ待テ處分セシムルノ外ナシト信ズ。

朝鮮事變處分案

聞ク所ニ依レバ朝鮮駐劄露、米兩國公使ハ我が三浦公使ヲ訪ヒ詰問シテ曰ク、今回ノ事變ニ日本人ノ加盟スル證跡アリ、且ツ向後貴國ハ斯ノ如キ事變更ビナキコトヲ保證スルヤ否ヤト、此時ニ當テ三浦公使ノ答辯ノ一言一句ハ實ニ東洋ノ平和ニ大關係ヲ有スルモノアリ。然リ而シテ公使ハ答ヘテ曰ク、爾後斯ノ如キ事變ナキヲ保證シ得ズト。而シテ米、露兩國ノ公使ハ曰ク、此事極メテ重大ノ關係ヲ有スルヲ以テ、敢テ本國ノ命ヲ待テ重ネテ商議セント、遂ニ要領ヲ得ズ不滿ノ色ヲ負フテ去レリト。果シテ然ランニハ三浦公使ノ言ハ實ニ失當ノ言ナリト云ハザルヲ得ズ。何ントナレバ露、米兩國ハ必ラズ云ハン、日本一國ノ爲スニ任ゼンニハ朝鮮ノ平和ハ得テ望ムベキニアラズ、余輩隣邦ノ交友國ノ誼、袖手傍觀スルニ忍ビズ、其ノ内政ニ干涉シ、朝鮮全半島ノ保安ヲ鞏固ニセンコトヲ努メント、勢ヒ此ノ如クニシテ我レ其干涉ヲ拒ンデ敢テ歩武ヲ讓ラザランカ、必然戰爭ヲ免レズ、讓ツテ干涉ヲ承認センカ、我レノ朝鮮ニ於テ今日マ

テ取レル勤勞半バ水泡ニ歸スルノミナラズ、其ノ結果タルヤ露國多年ノ素望不凍港ヲ我レニ最モ接近セルノ地ニ於テ得ルニ至ルナキヲ保セズ。豈ニ危殆ナラズヤ。三浦公使タルモノ、何ゾ「朝鮮ノ保安ハ飽クマデ帝國ニ於テ保證シ、爾後斯ノ如キ事變ナキヲ期シ、又今回ノ事變ニ日本人ノ加盟セルモノ、如キハ萬々之ナキヲ信ズト雖モ、萬一之アラニハ速カニ國法ニ從テ嚴刑ニ處シ、以テ朝鮮ニ對シ、與國ニ對シ、東洋ノ平和ヲ希望スルノ心事ヲ明カニセン、然レドモ或ハ朝鮮人、我ガ邦人ノ服裝ヲ着シ、人目ヲ瞞着シテ宮闕ニ出入スル等ノ便ヲ得ントスル略ニ出デタル未ダ知ル可カラザルヲ以テ、事實詳細ニ調査シ、而シテ後ニ返答スル所アルベシ」ト答へ、以テ彼ガ干渉ノ端緒ヲ未發ニ防ガザル。假令ヒ後日再ビ事變アリテ難問生ズルトナスモ、以テ今日難問ノ生ズルニ比シテ孰レカ我ガ利害休戚ニ關スル最モ切ナル、必ラズシモ智者ヲ待ツテ而シテ後ニ知ラザルナリ。實ニ三浦公使ノ言ハ失當ノ言ナリト云ハザルヲ得ザルナリ。然レバ善後策果シテ如何。

第一 我ガ政府ハ與國ノ公使ニ告グルニ、飽クマデ朝鮮ノ保安ヲ鞏固ナラシメンコトヲ保證シ、三浦公使ノ言ハ我ガ政府ノ眞意ニアラザルコトヲ以テシ、彼ノ露、米ノ干渉ヲ防グベシ。今回ノ事變ニ日本人ノ加盟セルヤ否ヤニ至テハ、特ニ事實ノ調査精覈ヲ要ス、審査ノ上返答スベキ旨ヲ答フルハ可ナリ。

若シ露國以上ノ答辯ニ満足セズ、他ノ與國ト偕ニ口ヲ揃ヘ、カラ鬻ハセ、強ヒテ干渉ヲ試ミント欲シ、我ノ讓ラザルニ於テハ戰爭ハ萬止ムヲ得ザルノ場合ニ至リ、所謂背ニ腹ハ代ヘラレヌ時ニ當テハ始メテ左ノ手段ニ出ヅベキナリ。

第二 朝鮮ヲ所謂永久中立國(Perpetual Neutrality)、或ハ協議中立國(Conventional Neutrality)ト稱スルモノトナスコト、即チ千八百十五年十一月二十日已黎ニ於テ英、澳、普、露、佛ノ捺印締約セル宣言ニ依リ、瑞西ノ永久中立國タルコトヲ承認シ、同年以上ノ五強國伯耳義ノ永久中立國タルコトヲ承認シ、同年「グイエナ」會議ノ締約第六條ヲ以テ澳、普、露ハ「シチー、オブ、クラコー」ノ永久中立ヲ承認シ、千八百六十七年五月十一日倫敦條約ニ依リ澳、英、普、露ハ「ヂューチー、オブ、リユーキセムブルグ」ノ永久中立ヲ承認シ、又千八百六十三年十一月十四日ノ條約第二條、千八百六十四年一月二十五日日本條約第二條、及ビ同年三月二十九日希臘トノ條約第二條ニ依リ、英、佛、露、澳、普ハ「コルフュー」、「バクソー」諸島及ビ其ノ列島ノ希臘ト聯合後ハ永久中立國タルコトヲ承認セリ。所謂永久中立國ナルモノハ該中立ニ利害ト關係ヲ有スル諸強國協議ノ上、一弱國ノ中立ヲ承認シ、戰時、平時、等シク中立國タラシメ、該中立國ヲシテ敢テ自由ニ己レノ意旨ニ從テ合縱連衝スルヲ得セシメズ、又捺印セル諸強國ノ交戦スルトキ其ノ兵士、軍艦ハ其境ニ入ルコトヲ得ザルモノトナセルナリ。即チ略言スレバ、

強國ノ權力ト權力ト相衝突スルノ所ニシテ、彼我互ニ相控除シ、所謂無權力ノ所トナリ、双方等シク侵スコトナキヲ約スルモノニシテ、該中立國ハ強國ノ權力ト權力ノ間ニ介在シテ立ち、該諸強國ハ該中立國ヲ墻壁トナシテ互ニ侵攻ノ憂ヒナキヲ期スルモノナリ。即チ日、露、英、佛、米、獨ノ諸國、朝鮮ヲシテ戰時、平時共、等シク中立國タルヲ承認スベキナリ。而シテ此途ニ依ルトキハ朝鮮ニ對シテ取レル帝國今日マデノ勤勞、半ハ水泡ニ歸スルノ恐レナシトセズ、注入セル資本ノ利益ヲ殺ギ、朝鮮ノ我ニ對スル好感情ヲ失セシメントス。然レドモ諸強國、特ニ露國ヲシテ戰時ニ於テ朝鮮國境ヲ侵スヲ得ザラシムルノ益アリ、然ラザレバ、

第三 露國ノ干涉ヲ許スコト、日、露各々朝鮮ニ干涉スルトキハ、英、佛ノ埃及ニ於ケルガ如ク、結局大破綻ヲ來タサズンバアラズ。然レドモ可及的圓滑ニ交渉シ、漸ク歲月ヲ延べ、我兵ノ負傷治癒シ、我艦ノ破損修復シ、若クハ新造ヲ待テ斷然決答スル所アルニアリ。此途ニ出ヅルトキハ、我が軍備ノ整頓スルト同時ニ、彼モ亦朝鮮ニ於テ不凍港ヲ得ルコトナシトセズ。然レドモ目今焦眉ノ急ヲ緩フシ、我が實力回復ノ期ヲ待ツノ便アリ。

今回ノ事變及ビ三浦公使ノ失言ニヨリ端無ク生ゼントスル結果ニ關スル善後策、或ハ前述ノ二途其一ニ出デザルベカラザルニ至ランヲ恐ル。二途共ニ窮策ニ過ギズ、特ニ幸ニ朝鮮ヲ永久中立國トナス事ニ諸強國協賛スルモ、朝鮮ノ實力能ク自働自活スルヲ得ズ、必ラズヤ自ラ内部

ニ禍亂ヲ生ジテ自滅スルニ至ラン。果シテ然ラントキハ、強國ノ虎視豈其ノ中立ヲ守ラシメンヤ。露國ノ兵艦ハ朝鮮ノ諸要港ヲ得ント務ムルコト知ルベキノミ。然レバ此ノ途ニ依ルモ早晚朝鮮問題ヨリ日、露ノ開戦ハ數年ヲ出デズシテ免ルベカラザルモノ、如シ。故ニ前述二途、其ノ孰レニ出ヅルモ一時ノ彌縫策ニ過ギズ、然リト雖モ前ニ既ニ述ベタルガ如ク、今日只今戰爭ノ餘弊ヲ受ケテ、強國ト戰端ヲ開クハ、一ヶ月ニテモ二ヶ月ニテモ後ニ戰端ヲ開クコト大ニ我が利益休戚ニ關シ大差違アリ。加之、現ニ來ル十一月ニ至レバ「ウラデオストック」ハ水面水結シテ艦船ノ出入ヲ許サルナリ。故ニ一時ノ窮策ナリト雖モ朝鮮ヲ永久中立國トナスノ議、時ニ取リテ一種ノ策タランコトヲ信ジ之ヲ列記セルノミ。

若シ夫レ戰爭ヲ開カズ、損失ヲ蒙ラズシテ今回ノ事變ヲ所斷シ、所謂快刀亂麻ヲ斷ツノ思ヒアラシムルガ如キハ、外交ノ技能ト軍備ノ緩急ト相依リ相待テ奏功ヲ期センノミ。記シテ以テ要路ノ覽ニ供ス。

附記 今回ノ朝鮮ノ事變ニ果シテ日本人ノ連累者アラニハ、速カニ國法ニ從テ嚴ニ處罰シ、以テ朝鮮ニ對ヘ、以テ與國ニ對ヘンノミ。要スルニ一個人ノ行爲ハ一國政府ノ行爲ニアラズ、我が政府ノ示導、教唆、警察等ノ不取締、若クハ之ニ類スル行爲ナキコト明カナル以上ハ、彼ノ交戰國ノ臣民ガ休戰規約ニ反シ、若クハ平和條約ニ反ス

ル行爲アルトキト同ジク直接ニ責任ヲ有セザルナリ。而シテ或ハ結局多少ノ賠償ヲ支拂フガ如キハ不當行爲ヲナセル臣民ニ代リテ責任ヲ負擔スルノミニシテ、自己ノ責任ヲ負擔スルニアラズ。

朝鮮事變處分案

第一緒論

(一) 公使ノ犯罪ノ適例二三。

輓今外交ノ技能漸ク巧妙ノ域ニ達シ、談笑ノ間ニ國ヲ滅ボシ、王ヲ廢シ、弱者ノ肉ヲ割イテ強者ノ腹ヲ肥ヤスモノ比々皆ナ然リ。故ニ公使タルモノ外國ニ使ヒシテ罪ヲ犯スガ如キハ極メテ少ナク、其例殆ンド絶エタリト雖モ、少シク外交史ノ往時ニ溯レバ歴々トシテ其例アリ。今其一ニヲ左ニ掲ゲ兼ネテ公使ノ犯罪ニ對シ、公使所屬國ノ政府ガ如何ニ責任ヲ負擔スルヤノ觀察ヲ下サントス。

(イ) 千六百五十四年英國駐劄ノ佛國公使「ド、バツス」氏ハ「クロムウエル」ノ朝ニ公使タリシガ、「クロムウエル」ノ生命ヲ危ウセントスル隱謀ニ與ミセリトナシテ告訴サル

ルヤ、審問委員會ハ同氏ヲシテ訊問ヲ受ケシメントセルモ、同氏ハ之ヲ拒絕シテ曰ク「クロムウエル」ヨリ直接ニ訊問セラレバ答フベシ。裁判官ノ訊問ニ至リテハ之ヲ受クルヲ肯ンセズ、何トナレバ公使ナルヲ以テ、若シ他國ノ裁判官ノ訊問ヲ受クルガ如キコトアルトキハ、自己ノ代表スル君主ノ威嚴ヲ損傷スレバナリト主唱シ、終ニ審問委員會ハ同氏ニ命ズルニ二十四時間内ニ英國ヨリ出發スベキ旨ヲ命ジタルニ止マリ、其後佛、英二國間ニ如何ニ交渉アリタルヤヲ記載セザルヲ以テ觀察ヲ下セバ、必ラズヤ重大ノ難問ヲ生ゼズシテ終リタルナラン。

(ロ) 千七百十七年英國註割ノ瑞典ノ全權大使「ギレンボルグ」ハ「ジョージ」一世ヲ廢スルノ隱謀ヲ企テタルノ故ヲ以テ逮捕セラレ、所有ノ箱類ノ錠前ヲ破毀搜索シ、一切ノ書類ヲ差押ヘラレタリ。然シテ瑞典ハ復讐的方法トシテ在「ストックホルム」ノ英國公使ヲ逮捕セリ。佛國ノ攝政ハ一方ノ申請ニ依リ仲裁ノ勞ヲ取り、英、瑞双方其逮捕セル公使ヲ互ニ交換セルヲ得タリ。「ギレンボルグ」ノ逮捕ハ自防自衛ノ方策トシテ必要ナリシモ、在瑞典ノ英國公使ヲ瑞典ガ逮捕スルニ至テハ暴ト云フベキナリ。此例ニ依ルモ佛國攝政ノ仲裁ニ依リ双方逮捕セル公使ヲ交換セルヲ以テ落着ヲ告ゲタルガ如クナルヲ以テ推究スレバ、又其後瑞典公使ノ犯罪ニ對シ英、瑞二國ノ間ニ甚ダシキ難

問生ゼズシテ止マレルナラン。

(ハ) 千七百十八年佛國駐割ノ西班牙公使「セラメール」前例ト同一ノ理由、即チ國家自防自衛ノ必要上ヨリ佛國政府ハ同公使ヲ逮捕シ、其ノ書類ヲ差押ヘ、軍兵ヲ附シテ西班牙國境マデ送還セリ。本例又其後何等重大ノ影響ヲ生ジタルヲ聞カズ。

(ニ) 千八百四年合衆國駐割ノ西班牙公使「イルジョー」金錢ヲ以テ合衆國ノ新聞記者ヲ攬シ、盛ンニ己レノ意見ヲ記述シテ大統領及ビ國務大臣ノ不利益ヲ來シ、極メテ困難ヲ感ゼシメタルヲ以テ、合衆國政府ハ斯ノ如キ公使ヲ召喚センコトヲ西班牙政府ニ通牒シ、西班牙ノ王答ヘテ曰ク、何時ニテモ安全ナル航海ヲナシ得ル時期ニ於テ歸リ來ルノ許可ヲ公使ニ與ヘ置ケリト、而シテ「イルジョー」ハ其後數ヶ月ニ渡ルモ歸リ去ラズ、合衆國ノ議會ハ痛ク「イルジョー」ノ行爲ヲ攻撃セリ。「イルジョー」ハ答ヘテ曰ク、余ハ隱謀ヲ企テ、反亂ヲ煽動シ、若クハ其他合衆國政府ニ反對スル何等ノ異圖ヲ畫スルモノニアラズ、苟クモ是等ノ事ヲ爲サル以上ハ、合衆國議會ノ云フガ如キ攻撃ヲ受クルコトナシ。余ハ本國政府ノ命令ノ外、何等之ヲ奉ズルノ義務ナク、己ノ欲スル所ニ住居スベキノミト。合衆國政府ハ敢テ重ネテ批難ノ書狀等ヲ發セズ、「イルジョー」自身ノ良心ニ於テ悔悟スル所アラシメント欲シタルモ其効ナカリシヲ以テ、

合衆國政府ハ本件ニ關スル往復文書等ヲ西班牙政府ニ送達セルニ、西班牙ノ國務大臣ハ同國公使「イルジョー」ノ意見ヲ是トスル旨ヲ回答セリ。其後如何ニ本件ノ落着ヲ告ゲタルヤ明カナラザルヲ以テ考フレバ、亦タ甚ダ難問ヲ生ゼザリシガ如シ。

(ホ) 千八百四十八年西班牙駐劄ノ英國公使「サー、エッチ、バルワー」旅行券ヲ返還シ、西班牙ノ土地ヲ退去スルコトヲ同政府ヨリ要求セラレタリ。此時ニ當テ西班牙ノ各地ニ一揆起リ、同國政府ハ英國公使「サー、エッチ、バルワー」氏ガ國內ノ不平黨ニ援助ヲ與ヘタルニ依ルトナセリ。斯ノ如クニシテ英、西二國間外交ノ關係、二年間中止セラレタルモ、「ベルジウム」王ノ仲裁ニ依リ全ク落着ヲ告グルヲ得タリ。

(ヘ) 千八百八十八年ノ秋、華士頓駐劄ノ英國公使「ロード、サックビル」ハ「カリフォルニア」ニ住スル英國生レノ市民ヨリ書ヲ致シテ次期ノ大統領選舉ニハ何黨ヨリ選出スベキヤニ就キ忠告ヲ乞ヒ來ルニ遇ヘリ。該書中ニハ時ノ政府ヲ批難スル點モアリテ、「ロード、サックビル」モ亦該批難ニ同意スルノ回答ヲ送レリ。合衆國政府國務大臣「ベイヤード」氏ハ此ノ英公使ノ所爲ヲ以テ合衆國ノ内政ニ不當ノ干渉ヲナシ、其ノ主權ノ威嚴、安全、及ビ獨立ヲ脅カスノ嫌ヒアルモノナリトシテ、英國政府ニ宜シク公使ヲ處分スベキコトヲ申入レタルモ其効ヲ見ザリシガ爲メ、英公使ノ旅行券ヲ返還シ、

本國退去ヲ請求セリ。「ロード、サリスベリ」ハ本件ニ關シ英國駐劄ノ亞米利加公使ニ告ゲテ曰ク、公使タルモノハ其ノ駐劄國ニ生ズル事件ニ關シ、一私人ノ資格ヲ以テスルモ尙ホ意見ヲ表彰スルコト能ハズトナスノ原則ヲ置カントスルガ如キハ、到底出來得ベカラザルコトニアラズヤト、且ツ新聞紙ニ該英國公使ガ新聞記者ト會見セル節ニ云ヘル所ノ意見ナリトシテ記載セルコトニ關シテハ、同公使ノ説明書ヲ以テ後ニ回答センコトヲ告ゲタリ。而シテ右説明書ノ達スル前ニ退却スルコトトハナレリ。英國公使「ロード、サリスベリ」ニ復命シテ曰ク、新聞記者ト會見セル節ニ云ヘル所ノ意見ナリトシテ記載セル所ノモノハ事實錯誤ニ出デタルモノナルコトヲ合衆國々務大臣ニ通牒シアルニモ拘ラズ、新聞ノ記事ヲ以テ自己ノ眞意見トナシテ責ヲ歸セシメントスルガ如キハ不當ナルモノナリト、英國政府ハ合衆國ノ大統領及ビ大臣ガ英公使ニ對シテ斯カル所爲アルハ必竟大統領選舉ノ熱情ヨリ生ジタル一個人的ノコトニ止マルモノトナシ、次期ノ大統領就任式ノアルマデハ英國公使館ノ事務ヲ公使館一等書記官ニ委任シテ終レリ。

以上ノ數例ニ徴スルニ、公使ノ不當行爲、若クハ犯罪ニ對シテハ、公使ノ君主、若クハ之ヲ代表シテ中立不可侵タルノ權ハ失フモノタルモ、該公使ノ不當行爲及ビ犯罪ノ結果ニ對シ、公

使ヲ派遣セル國ニ嚴談ニ及ビ難問ヲ生ジタルノ例ハ殆ンド之レナキガ如シ。只ダ該公使ヲ派遣セル國ニシテ該公使ノ飽クマデ中立不可侵ヲ主張シ、若クハ庇保セントセルトキ始メテ多少ノ難問ヲ生ジ、紛争ノ種子トナルナキヲ保セザルノミ。故ニ苟クモ公使ノ所爲反法ノモノアルトキハ、公明正大該國ノ法ニ從テ處置スルニ任シ、若シ治外法權ノ行ハル、國ニアリテハ公使ノ國法ニ從テ處分シ、駐劄國ヲ満足セシメ、本國亦顧ミテ疚シキコトナキニ於テハ、該駐劄國ト雖モ何等ノ苦情ヲ我ニ對シ主張シ得ザルナリ。況ンヤ與國オヤ。然ルヲ況ンヤ該駐劄國政府變ジ、却テ該公使ノ行爲ニ對シ満足ノ意ヲ表スルガ如キ時ニ於テオヤ。然レバ公使ノ派遣タルヤ、之ヲ派遣セル國ハ外國政府ニ請ヒ、之ニ充分ノ信任ヲ置カレンコトヲ希望シ、一見其ノ公使ノ不法行爲ニ對シテハ責任重大ナルガ如クナルニモ拘ラズ、各國間ノ數百年ノ經驗慣例ニ徴スルリ、公使ノ犯罪ニ對シテハ本國政府ニ於テ該公使ヲ庇保セントシ、若クハ中立不可侵等ヲ主張セザル以上ハ、責任ハ公使ノ一身ニ止マリ、敢テ本國ニ係累ヲ及ボサルモノト謂フベキナリ。三浦公使ノ刑法上ノ責任ニ於テハ今茲ニ論究スルノ要ナキヲ以テ之レヲ略ス。

(二) 「バルガリア」ニ於ケル魯西亞ノ隱謀、附波蘭ニ對スル魯ノ處置ヲ評ス。

千八百七十八年伯林會議ニ於テ「サン、スラフアノ」魯、土條約ヲ一片ノ紙條約タルニ至ラシメ、「バルガリア」ヲ名ノミノ土國領トナシ、其實獨立國タラシメ、歐洲各國ハ之レヲ以テ魯國ニ對スル墻壁タラシメ、魯國ガ「バルカン」半島ニ出デ、土國ヲ脅カシ、地中海ヲ制セザランコトヲ期シ、魯國ハ「バルガリア」ヲ踏ミ石トナシテ土耳其ヲ征服シ、領土ヲ擴ムルト同時ニ地中海ニ號令セントスルノ野心ヲ満足センコトヲ欲スルヤ久シ、而シテ伯林條約ニ依リ千八百七十九年四月二十九日「バツテンベルグ」ノ「プリンス、アレキサンダー」ヲ選舉シテ國君トナシ、次イデ東「ルーメリア」ノ民望ニ從ヒ、「バルガリア」「ルーメリア」共同王國ヲ建設セリ。而シテ「プリンス、アレキサンダー」ハ「スタムブローツク」ノ輔弼ヲ得、敢テ魯國ノ欲望ヲ充タスノ楛梯タルコトヲ拒絶セリ。爾來魯國ハ或ハ「バルガリア」ノ士官、兵卒ニ啗ハスニ利ヲ以テシテ反亂ヲ企テシメ、或ハ「セルビア」ヲ煽動シテ屢々「バルガリア」ノ境ヲ侵サシメ、或ハ「プリンス、アレキサンダー」ヲ囚ヘテ魯國ニ送り、或ハ強硬ノ輔弼「スタムブローツク」ヲ暗殺セシメテ公然自國ノ新聞紙上賀辭ヲ掲グル等、其ノ「バルガリア」ニ寇シ、「バルガリア」ヲ苦メテ傍若無人ノ所爲アルコトハ何人モ知ル事實ナリ。假リ二十月八日ノ朝鮮ニ於ケル事實ニシテ總ベテ我帝國ノ指呼ニ出ヅルモノトスルモ、未ダ魯國ガ「バルガリア」ニ於ケルガ如ク擅マナラザルナリ。然ルヲ況ンヤ三浦公使ニ對スル我が政府ノ處分ハ一々其ノ當ヲ得、今ハ我が政府ト三浦公使トノ間、事變ニ關シテ一點ノ係累アラザルコトヲ與國ニ證明セルノミナラズ、政府ハ痛ク公使ノ行爲ヲ憤懣痛戚スルモノナルオヤ。朝鮮事變ニ關シ魯國何

等ノ口實アリテ能ク我が政府ノ所爲ニ對シ違議ヲ唱へ戰端ヲ開クヲ得ルヤ。

波蘭ノ分割ニ至ツテハ、奥、西、土、利、及び普魯西亞ノ口實ヲ嘲笑シ、單刀直入「兵力是權利」說ノ實行ヲ演ジ、始メハ憲法ニ從テ支配シ、議會ヲ設ケ政治ヲ議セシムル等ノ約アリシニモ拘ラズ、幾ナラズシテ是等ノ「ポーランド」人ノ既得權ヲ蹂躪シ去リ、全ク純粹ナル魯領トナシ、專制政治ノ下ニ呻吟セシムルニ至レリ。嗚呼魯西亞ノ如キハ他人ノ行爲ハ正當ノモノモ悉ク之ヲ不法ナリトナシ、自己ノ行爲ハ不正ヲ以テ當然ノ事ナリトナスモノナリ。彼レ若シ飽クマデ朝鮮事變ニ關シ我が政府ニ責任ヲ負ハシメントスルニ於テハ、我ハ宜シク是等ノ點ヲ列舉シテ與國ノ感情ヲ我ト同ウセシムベキナリ。

(三) 英國ト結托シテ魯ノ南下ヲ拒グコト。

魯國若シ朝鮮若クハ支那ノ南方ニ當リテ不凍港ヲ得ルニ於テハ、英國ハ多年「バミール」、「ギルギット」捷徑、其他「アフガニスタン」ニ對シ苦心シ來リタル計畫ハ總テ水泡ニ歸シ去リ、印度一億九千萬磅ノ毎年ノ貿易業ハ直チニ脅嚇サレントスルニ至ル。英國タルモノ若シ眞ニ我ト同盟スルノ必要ヲ感ズルコトアリトセバ、今ノ時ヨリ急ナルハナカルベシ。宜シク此時ニ乘ジ充分ニ英國ト同盟シ、魯國一タビ朝鮮ノ一港若クハ支那ノ旅順口港ノ自由ヲ得ントスルニ於テハ、日英同盟シ、兵力ヲ以テ抵抗スルノ約ヲ結ブコト必要ニシテ又洵トニ結ビ得ルノ時機ナリ。

(四) 英國政黨ノ外交的觀念、附大團結。

政黨政治ニ最モ多クノ經驗ヲ有シ、常ニ其ノ益ヲ受クル英國ハ、早ク外交問題ハ國家問題ニシテ、區々タル黨派爭ヒノ爲ニ左右セラルベキモノニアラザルコトヲ看破スルニ至リ、「ブライス」氏ノ如キハ、先キニ在野黨トシテ議院ニ演說ヲナスニ當リ、外交ノ事ニ關シテハ、議會ハ充分協賛シ費用ヲ可決シ、宜シク在朝ノ反對者ヲシテ内顧ノ憂ヒナク、全力ヲ舉ゲテ之レニ當ラシムルヲ得セシムベシト、各新聞ハ之レヲ以テ英國政黨政治進步ノ一段落ナリト爲セリ。我々帝國未ダ代議政體ニ慣レズト雖モ、當初國事多端數年間ノ經驗ハ無事長閑ノ數百年ノ經驗ニ優ルモノナカルベカラズ。今ヤ國民ハ既ニ外交問題ニ至リテハ在朝在野相共ニ輔ケザルベカラザルヲ知ラントセリ。此際大聲疾呼、此ノ點ニ着眼セシメ注意ヲ喚起センニハ、意地悪ルキ少量ノ在野政黨ト雖モ、己レヲ撰舉スルモノ、意見ニハ結局賛成セザルベカラザルガ爲メ、政府ノ方針ヲ翼賛スルニ至ランコト、尙ホ昨日マデ軍備ノ擴張ヲ攻撃セル其舌未ダ乾カザルニ、撰舉者ナル國民其ノ必要ヲ感ズルニ至テ早ク既ニ之ヲ駁撃スルノ己レノ位置ヲ失フニ至ルコトヲ察シ、一モ異議ヲ唱ヘザルニ至リタルガ如クナラン。只ダ夫レ撰舉者ナル國民一般ノ注意ヲ喚起シ、外交問題ハ在朝在野、等シク抱負シテ方針ヲ定メ、以テ浮沈ノ境ニ處スベキコトヲ知ラ

シムルコト必要ナリ。而シテ後チニ外交ニ關シテハ政府ノ云フ所ハ即チ國民ノ云フ所、國民ノ欲スル所ハ即チ政府ノ欲スル所トナルヲ得バ、強國ト雖モ甚ダ輕ンジ得ザルニ至リ、同盟國ハ益々信ヲ置キ、敵國ハ敢テ窺竄スルコトヲ得ザルニ至ラン。

若シ夫レ内ハ少ナクトモ軍備ト外交ノ二點ニ關シテハ、在朝在野ノ名士識者相提携シテ國是ヲ定メ、外ハ強國ト同盟シテ頑強ヲ挫クノ實力ヲ示シ、而シテ後ニ彼レノ暴行ヲ少シク擧ゲテ以テ今回ノ事變ニ對シ、整々堂々ノ處分ヲ彼レニ報告シ、未ダ以テ彼我相和スルヲ得ズシテ戰爭ハ遂ニ避クベカラズト云フニ至ツテハ、即チ左ノ三策中其一ニ出デシカ、乞フ試ミニ之ヲ第一、第二、第三、第四ノ三項ニ於テ詳論セン。

第二 朝鮮ヲ所謂永久中立國 (Perpetual Neutrality) 或ハ協議中立國 (Conventional Neutrality) トナスコト

千八百十五年十一月二十日巴黎ニ於テ英、奧、普、露、佛ノ五強國捺印締約セル宣言ニ依リ、瑞西ノ永久中立國タルコトヲ承認シ、又同年以上ノ五強國ハ伯耳義ノ永久中立國タルコトヲ承認シ、又同年「グイエチ」會議ノ締約第六條ヲ以テ、奧、普、露ノ三國ハ「シチー、オブ、ク

ラッコー」ノ永久中立ヲ承認シ、千八百六十七年五月十一日倫敦條約ニ依リ、奧、英、普、魯ハ「ヂ、ユーキー、オブ、リユーキセムブルグ」ノ永久中立ヲ承認シ、又千八百六十三年十一月十四日ノ條約第二條、千八百六十四年一月二十五日日本條約第二條及ビ同年三月二十九日希臘ノ條約第二條ニ依リ、英、佛、魯、普ハ「コルフュー」、「バクメー」諸島及ビ其ノ列島ノ希臘ト聯合後ハ永久中立國タルコトヲ承認セリ。「クリミヤ」ノ戰爭ヲ終ラシメタル千八百五十六年ノ巴黎條約及ビ千八百七十一年ノ倫敦條約ハ、土耳其ノ獨立ヲ確固ナラシメ、「コンスタンチノーブル」、「ボスフォラス」海峽及ビ「ダーダネル」海峽ヲ中立不可侵トナシ、「ブラツク、シー」ヲ變ジテ魯西亞ノ專有湖水タラシメザルコトハ最モ必要ナルコトヲ察シ、土耳其ヲ自然ノ成行ニ任シテ強國ノ好餌タルコトヲ拒ガントセルノ精神ハ終始一徹ナリ。「クリミヤ」戰爭ノ起因ハ實ニ此ノ點ニアリキ。千八百七十八年ノ伯林條約ハ、土耳其ノ歐羅巴ニアル境界ヲ大國ノ間ニ分割セリト雖モ、殘餘ノ部分ヲ嚴正ニ中立不可侵トナセルコトハ前數條約ニ異ナルコトナシ。土耳其亦永久中立國ノ一ト見ルヲ得ベシ。所謂永久中立國ナルモノハ該國ノ中立ニ利害ノ關係ヲ有スル諸強國協議ノ上、一弱國ノ中立ヲ承認シ、戰時、平時、等シク中立國タラシメ、該中立國ヲシテ敢テ自由ニ己レノ意旨ニ從ヒ、若クハ強迫セラレテ合縱連衡スルコトナカラシメ、捺印セル諸強國ノ交戦スルトキ、其ノ兵士、軍艦ハ其境ニ入ルコトヲ得ザルモノトナシ、又捺

印セザル國ト雖モ、敢テ該中立ヲ侵サントセバ、捺印セル諸強國ノ怒ニ觸ル、ノ危険ヲ冒サルベカラザルモノナリ。即チ略言スレバ、強國ノ權力ト相衝突スルノ所ニシテ、彼我互ニ相控除シ、所謂無權力ノ所トナリ、双方等シク侵スコトナキヲ約スルモノニシテ、該中立國ハ強國ノ間ニ介在シテ保護サレタル獨立ヲ得、該諸強國ハ該中立國ヲ墻壁トナシテ互ニ要害侵攻ノ憂ヒナキヲ期スルモノナリ。即チ前ニ掲ゲタル數例ニ倣ヒ、日、露、獨、米、佛ノ諸國相協議シ、朝鮮ヲシテ戰時、平時共、等シク中立國タルヲ承認スベキナリ。而シテ此ノ策ニ出ヅルトキハ朝鮮ニ對シテ取レル帝國ガ今日マデ取り來リタル勤勞、半ハ水泡ニ歸スルノ恐レナシトセズ。注入セル資本ノ利益ヲ殺ギ、朝鮮ノ獨リ我ニ對シテ有スル好感情ヲ薄ウセントス。然レドモ諸強國、特ニ露國ヲシテ戰時ニ於テ朝鮮國境ヲ侵スヲ得ザラシムルノ益アリ。然リ而シテ前ニ掲ゲタル「シチー、オブ、クラツコー」ノ永久中立ハ、千八百四十六年十一月六日魯、澳、普ノ三國（即チ先キニ永久中立ヲ承認セル對平國）ハ「ヴィエナ」ニ於テ捺印セラレタル締約ニ依リ、之ヲ澳國ノ領地トナシ去レリ。所謂之ヲ與フルモノ、又之ヲ奪フノ理ニシテ、止ムヲ得ザルコトト云ハンノミ。且ツ夫レ「クリミヤ」ノ役ヲ惹キ起シ、又千八百五十六年ノ巴黎條約ヲ破ラントシ、千八百七十一年ノ「ロンドン」條約ヲ破リ、千八百七十八年ノ柏林會議ナカリセバ「サンステファノー」ノ魯、土條約ハ實ニ魯國ヲシテ土耳其領土ノ多分ヲ占有セシメントセ

リ。是レ明カニ前述ノ巴黎條約及ビ倫敦條約、即チ土耳其ヲシテ魯西亞ノ蹂躪ニ任ゼシメズ、「ボスフォラス」海峽、「ダーダネル」海峽及ビ地中海ノ鎖鑰ナル「コンスタンチノーブル」ヲ魯國ノ窺フ所トナラシメザルノ精神ニ全然反スルモノナルヲ以テ、澳西土利亞ハ主トシテ之ヲ列國會議ニ附センコトヲ主張シ、魯國ヲシテ「サンステファノー」ノ條約ヲ同會議ニ提出セシメントセリ。魯國ハ固ヨリ之レヲ提出スルコトニ反對セルモ、英國ノ決心確固タリシガ爲ニ、終ニ魯國ハ該條約ヲ列國會議ニ提出スルコトナレリ。柏林會議即チ是レナリ。然レバ或ハ魯國ノ如キハ朝鮮ノ永久中立ニ一時捺印スルモ、條約ニ反シ口實ヲ設ケテ侵略占領等ヲナスコトナシトセズ。然リト雖モ日、英二國ニシテ飽クマデ魯國ノ朝鮮ニ領土ヲ有スルコトニ反對スルノ決心アランニハ、敢テ魯國ヲシテ尺地ヲ朝鮮ニ有セシメザルヲ得ン。斯ノ如クニシテ朝鮮ハ幸ニ永久中立國トナルヲ得テ、我が能事終レリト云フヲ得ベキヤ否ヤ未ダシナリ。恐ル、所ハ朝鮮ハ朽木ノ如ク自ラ體內ヨリ蟲ヲ生ズルノ性質ヲ有スルヲ以テ、一蟲ヲ取り去レバ數蟲ヲ生ジ來リ、終ニ全ク自滅スルニアラザレバ止マザルコトナキヲ得ンヤ。此時ニ當テ「バルガリア」ニ墨ノ如ク腹黒キ惡事ヲ斷行セル魯國ハ、朝鮮ニハ能ク清廉貪ルナキノ君子タルヲ得ルヤ否ヤニアリ。此ノ點ニ關シテハ最モ懸念ニ堪ヘズ、即チ第三、第四ノ二項ニ於テ聊カ之ニ對スル方策ヲ論究セン。

第三 日本ノ朝鮮ニ於ケルハ英國ノ埃及ニ於ケルガ
如クナスコト

本項ヲ論ズルニ當リ、主トシテ埃及ノ現時國際法上ノ位置、即チ一個人ノ場合ニ於テ自分トモ稱スベキモノヲ研究スルコト必要ナリ。

現時埃及ノ國際法上ノ位置ハ土耳其帝國ノ一部ニシテ、英國之ヲ監督スルモノト云フヲ得ベシ。即チ埃及ノ軍隊ハ土耳其軍隊ノ一部トシテ扱ヒ、埃及ニ於ケル租稅ハ土耳其帝ノ名ヲ以テ付課シ、土耳其帝ノ締結セル條約ハ埃及ニ於テモ之ヲ守ラザルベカラズ。埃及ノ海陸軍旗ハ土耳其帝ノ軍旗ナリ。實ニ埃及ハ公法上獨立ノ資格ヲ有セザルナリ。千八百七十九年ノ時ノ「ケダイブ」土耳其帝ノ勅令ニ依リテ廢セラレ、其子「テウフイツク」位ヲ繼グニ及ンデ、復ト英、佛「二國監督」制ナルモノヲ用ヒルニ至リ、兩國ヨリ出デ、此レニ住スルモノヨリ監督者ヲ擧ゲ、埃及國務大臣ノ會議ニ參與セシム。千八百八十一年所謂對外硬派ノ如キモノ紛亂ヲ興シ、軍隊一部ノ援助ヲ得テ勢ヒ甚ダ輕侮シ難キモノアリキ。是ニ於テ英國ハ佛國ト協同シテ鎮定セシコトヲ申入レタルモ、佛ハ應ゼズ、土耳其亦兵力ヲ以テ反亂ヲ征シテ「ウフイク」ヲ援クル

コトヲ躊躇セルガ爲ニ、英國ハ獨力ヲ以テ此ノ反亂ヲ鎮定スルコトニ當リ、同年十月「テル、エル、ケビール」ニ於テ反兵ヲ敗リ、埃及ハ事實英國ノ掌握監督内ニ在リキ。千八百八十三年一月十八日ノ土帝ノ勅令ニ依リ、二國監督制ヲ廢シ、千八百八十四年英國ハ埃及ノ永久中立國タルベキコトヲ申立テタリ。千八百八十五年八月英國ハ「サー、ヘンリー、ヅラモンド、ウルフ」ヲ「コンスタンチノーブル」ニ遣リ、埃及處分ニ關シ特ニ協議セシム。使命ノ要點ハ、埃及ノ土耳其領タルコトヲ認ムルト同時ニ、英國ノ利益ヲ鞏固ナラシムルニ必要ナル勢力ヲ埃及ニ有シ、且ツ強固ナル埃及政府ヲ立テ、可及的外國（英國ヲ除ク外）ノ干涉ヲ避ケントスルニアリ。「ウルフ」氏派遣ノ第一ノ結果ハ實ニ千八百八十五年十月二十四日「コンスタンチノーブル」ニ於テ捺印セル締約是レナリ。締約ノ要項ヲ列記スレバ、

- (一) 土耳其及ビ英國ハ各特派使節一員ヲ埃及ニ派遣スルコト。
- (二) 土耳其特派使節ハ「ケダイブ」若クハ「ケダイブ」ノ委任ヲ受ケタルモノト協議シ、協議ノ結果ヲ一々英國特派使節ニ通告シ、埃及百般ノ件ノ處分ニ關スル方針ハ總ベテ英國特派使節ノ協賛ヲ經テ後之レヲ執行スルコト。
- (三) 土、英二國ノ特派使節「ケダイブ」ト協議ノ上、埃及軍隊ノ組織ヲ改正スルコト。
- (四) 埃及行政ノ一切ノ機關ヲ點檢シ、土帝ノ「ケダイブ」ニ附與セル權限ヲ躰ヘザル範圍

内ニアリテハ必要ト認ムル變更ヲナスコト。

(五) 「ケダイブ」ノ外國ト締結セル約束ニシテ土帝ノ附與セル權限ヲ踰ヘザルモノハ、土耳其政府ノ協賛スルコト。

(六) 兩國特派使節ニ於テ埃及國境内ノ治安鞏固トナリ、埃及政府機關ノ運轉宜シキヲ得ルニ至リタルコトヲ確認スルトキハ、兩特派使節ハ各本國ニ具狀シ、兩國茲ニ埃及ヨリ英國兵ヲ便宜ナル時ニ撤去スルコトノ協議ヲナスベシトアリ。

前述ノ締約ニ依リ英國ハ土帝ガ埃及ニ主權ヲ有スルコトヲ承認シ、土帝ハ英國ガ埃及ヲ事實占領スルノ適法ナルコトヲ承認シ、且ツ埃及ノ全般ノ事件ヲ處分落着セシメン爲ニハ土、英二國ノ兵ヲ用フベシトセリ。

尋イデ「サー、ヘンリー、ヅラモンド、ウルフ」ハ英國特派使節ニ撰マレ、土帝又特派使節ヲ撰ビ、兩使節ハ埃及ニ到レリ。「サー、ヅラモンド、ウルフ」ハ埃及ノ土耳其領タルコトヲ認メ、一切之ヲ英國ニ屬セシムルガ如キコトヲナサザルコト、及ビ歐洲各國ノ利益ヲ害セザルコト、及ビ「スエズ、カナル」ノ通航ニ故障アルトキハ、限ラレタル兵員ノ進行ヲ得ルモノトナスコトノ外、埃及ノ土地ハ中立不可侵タルベキコトヲ斷言シ、再ビ「コンスタンチノーブル」ニ行キ、以上ノ目的ヲ達スルガ如キ締約ヲ土、英ノ間ニ締結センコトヲ期シ、千八百八十七年

五月二十二日「コンスタンチノーブル」ニ於テ土、英二國ノ間ニ締約ヲ結ベリ。今、其ノ要項ヲ列記スレバ、英國兵ハ本締約後三ケ年ノ後、埃及ニ内亂若クハ外寇ノ生ズル恐レナキニ至ルトキハ、直ニ埃及ヨリ撤去スベシト、之レト同時ニ各國ヲシテ埃及ノ中立不可侵ヲ認メシメ、「スエズ、カナル」ノ通航ニ故障アルトキニ限り、一時ニ一千人ノ埃及ニ上陸シ、最モ急速ニ通航スルヲ得ル外、何等ノ場合ト雖モ埃及ノ地ニ兵員ヲ上陸セシムルヲ得ズ。然レドモ土耳其政府ハ埃及ニ外寇若クハ内亂ノ危険アル場合ニハ軍隊ヲ上陸セシムルヲ得、英國政府亦同様ノ權ヲ有ス。若シ英國兵撤去ニ關シ締約ニ記入スル三ケ年經過後、地中海ニ濱スル大國ノ一ガ、本締約ヲ協賛セザルニ於テハ、此ノ事實ヲ以テ外ヨリスルノ危険ノ一ナリト認メテ、英國兵撤去猶豫ノ理由タルヲ得ベシ。伯林會議ノ締約ニ捺印セル諸國及ビ其後埃及ノ「ケダイブ」ト交渉關係アル政府ヲ誘導シ、本締約ヲ認メシムベキコト云々ナリキ。而シテ各強國ニ脅カサレテ、土耳其帝ハ終ニ英國ノ與ヘタル期限内ニ此ノ締約ニ捺印セザリシ爲メ、本締約ヲ成立セズシテ終ンリ。即チ其ノ結果タルヤ、千八百八十五年ノ締約生存シ、英國ガ埃及ヲ占領スルコトハ適法ナルコトトナルナリ。

千八百八十七年七月「スエズ、カナル」締約ニ關スル談判中、「エム、ウアウヂングトン」ハ埃及全部ノ他日中立ナルコトヲ佛國政府ハ希望スル旨ヲ陳ベタリ。佛國若シ此ノ如クナルトキ

ハ埃及ノ中立ハ期シ得ベキモ、英國獨リ或ル時變ニ際シテハ軍隊ヲ上陸セシメ、又「スエズ、カナル」ノ通航ニ故障アルトキハ何レノ國モ定限ノ兵ヲ埃及ヲ經テ通行セシムルヲ得ルモノトナサンコトヲ主張スルニ於テハ、埃及ノ中立ハ終ニ期シ得ベカラザルナリ。佛國ノ混合裁判及ビ「スエズ、カナル」造築等ノ關係ヨリ、利益ノ關係ヲ有スル極メテ多キヲ以テ、埃及ノ中立ニ關シテハ歐羅巴各國、等シク軍隊ヲ埃及ニ上陸セシムルヲ得ズトナスニ於テハ、該中立ヲ承認スルモノナルモ、英國ハ此ノ條件ニテハ終ニ承認シ得ズトナスモノナリ。

之ヲ要スルニ英國ハ土帝ノ固ヨリ埃及ニ有スル主權ヲ認メ、其ノ代償トシテ英國兵ガ埃及ヲ事實占領スルコトヲ認ムルノ締約ヲ土耳其帝ト結ビタルモノニシテ、此ノ締約ニ依リ實ニ英國ハ自己ノ欲スル間、埃及ヲ事實占領スルコトヲ得ルモノナリ。朝鮮ニハ之レガ主權ヲ求ムル土耳其ナシ。故ニ我國ハ「サー、ドラモンド、ウルフ」ノ斷言セルガ如ク、朝鮮ノ獨立ヲ認ムルコト、朝鮮ヲ我々ニ附屬セシムルガ如キ野心ナキコト、及ビ各國ノ利益ヲ害セザルコトヲ主張スルト同時ニ、朝鮮ニ内亂外寇ノ恐レアル間ハ、事實日本ノ占領スルコトノ適法ナルコトヲ朝鮮ニ認メシメ置クベキナリ。而シテ埃及ノ如ク外形の歐洲ノ文明ヲ裝ハンガ爲メ、若クハ實用上ノ爲ニ外債ヲ諸國ニ募ルガ如キコトナカラシメ、各國干涉ノ端緒ヲ防グコト必要ナルベシ。義和宮各國巡回ニ際シ、此點ニ注意ヲ要スルモノアラン。外債ノアリシ爲メ各國ノ干涉ヲ脱シ得ザルガ爲メ、「サー、ドラモンド、ウルフ」ト雖モ頗ル窮色アリタルガ如シ。

第四 止ムヲ得ズンバ朝鮮ヲ波蘭ノ如クナスコト

朝鮮ヲ波蘭ノ如ク強國ノ間ニ分割セント欲セバ、先ヅ波蘭ガ如何ナル口實ヲ以テ分割サレ、如何ナル反對アリタルヤヲ攻究シ、而シテ後如何ニ分割スベキヤヲ論ゼザルベカラズ。即チ左ニ順次之レヲ論究セン。

- (一) 波蘭分割ノ開始及ビ魯、奧、普ノ口實
- (二) 魯國ノ專制、附英、佛、瑞ノ違議
- (三) 朝鮮ノ分割

(一) 波蘭分割ノ開始及ビ露、奧、普ノ口實

波蘭ハ露、奧、普三國ノ間ニ三回ニシテ悉ク分割シ去ラレタリ。其ノ第一回ノ分割ハ千七百七十二年九月露西亞女帝「カセリン」第二世ノ奧西土利亞女帝「マリヤテレサ」及ビ普露西亞王「フレデリック」二世之レヲ決行セリ。奧西土利亞及ビ普露西亞ガ提出セル理由ヲ見ルニ、